女子文壇

たちばな月

定期増刊



明治卅九年五月十五日發刊（毎月一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

第二巻第七號

若葉



鏑木清方筆



女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

國文學專攻 小森松風先生編著

全部十二冊 毎編讀切

女子文學

月一冊發刊 洋裝美本

根本を和漢洋の三文學に置き、軆裁を最新式の編纂法に據り、女子の爲めに文藝獨習の心強き手引となるものは本書なり全部十二巻之を座右に具へ置けば文藝上の智識は嚢中に物を探るが如く、名作雄篇を成すに無比の重寶たらむ、敢て天下の諸孃に此良書を推薦す。

全部概目

卅九年六月ヨリ出版

◎全部拾二冊＝紙數二千五百頁以上＝毎編大判二百頁以上各讀切

◎都合に依り豫告と多少の相違するとあり、發刊都度新聞に廣告す

女子文學正價 壹册金參拾錢◎三册前金八拾九錢◎六册前金壹圓六拾錢外郵税一册四錢◎全部拾二册前金拂込は金參圓 郵税四十八錢不要

國文學專攻 小森松風先生著

女子文學第壹編 美文作法

六月中旬發刊（印刷中）

全一册 大判二百頁以上洋裝 正價三十錢 郵税四錢

附錄 古今名家美文範

本書は著者が、現今の女子の文學趣味を鼓吹せんの考にて女子師範、高等女學校其他各種の女學校に於て、最も困難を感ずる文章の作法を懇切に説明指導せられたるものなれば明治の女學生には、實に坐右の寶典なり

發兌元 東京京橋大鋸町十二番 女子文壇社（電話本局六百七番）

賣捌所 東京堂。北隆館。東海堂。上田屋。良明堂。其他全國雜誌書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

閨秀二大新著

（貴媛諸嬢の案頭に陸離たる光彩を放つべき無比の美本）

芹影 小山内八千代女史著

最新刊

門のくさ

久保田米齋君畫

挿畫石版及木版二葉

新案装釘優美典雅

全一册 正價金五拾錢 郵稅六錢

閨秀作家の新異彩として、其名評壇に喧しき小山内女史が、其會心の作を輯めたるもの

▲花の枝▲いさご路▲騙平太▲爭▲下り藤▲入相▲茶の花▲朝あけ▲月見草▲おはじき▲初髷▲秋のけはひ▲寒月▲王母珠▲門の草（長篇小說） 其他

美文、小說、とり／＼に目も綾なる心地す、清新の想、豊麗の文、中々に言ふも管なるべし、あわれ文の園生に遊び賜ふ姫君達とく此美しく生い出てし門の小草の一もとを摘み賜わずや。

與謝野晶子女史著

詩集

舞姫

中澤弘光君畫

日本絹及クロース貼交表紙、金摸様打込、金縁

全一册 正價金七拾錢 郵稅六錢

文壇異例の大好評を博しつゝある本書は再版も亦將に盡んとしつゝあり

新派歌界の明星、著者晶子女史の短詩は、從來の凄艶と奔放とに[illegible]者更に一味の沈痛と一味の洒脫とを加へ來りて諸體悉く發展す、而して其聲調も亦益圓熟し時に奇聳の新聲を試むるあり弊堂玆に最近の作一卷を乞ひて上梓し、敢て我讀書界の諸兄姉に薦む、

萬朝報記者落合浪雄君著

樂世觀

人生不可解を叫ぶ人失意の人、煩悶の人、請ふ速に無限の慰藉を本書に獲よ＝郵稅共三十四錢

發行所 東京市日本橋區上槇町 如山堂書店



（所在　芝區三田四國町）

東京高等女學校卒業生並職員　（明治三十九年）



（所在　赤坂區青山南町七丁目）

青山女學院普通科卒業生

（明治三十九年）



（所在　本郷區龍岡町）

日本女學校卒業生並職員

（明治三十九年）



（所在　小石川區柳町）

跡見女學校卒業生

（明治三十九年）


(所在 神田一ツ橋通り町)

共立女子職業學校卒業生並職員

(明治三十九年)



（所在　府下澁谷村）

女子工藝學校卒業生並職員

（明治三十九年）



（所在　神田錦町一丁目）

女子商業學校卒業生並職員

（明治三十九年）



（所在　府下澁谷村）

實踐女學校卒業生並職員

（明治三十九年）

文學士中内蝶二先生校閲
秀才文壇編輯局編纂
（全一冊洋裝本綴 袖珍美本寫眞口繪數葉挿入）

新撰 美文捷徑

正價金四拾五錢 郵稅四錢

六月下旬出來

索引概目（▲天文篇 ▲地文篇 ▲歷史篇 ▲人事篇 ▲風景篇 ▲生物篇 ▲鑛物篇 ▲植物篇 ▲四季篇 ▲器物篇）

作文家の机上常に美文麗句集の必要なるは今殊更らに贅言の要なけむ、本書は專ら文章を學ばんと欲する人の爲に、古今文豪の著作中より、特に美文韻文等の妙句を精選蒐集し、之を容易なる方法を以て索引するを得せしめたる者にして、練文者一たび之を繙かば百花燎爛、縱横に形容の美辭を引用し得べく、辭句の修飾に苦心する初學者は勿論苟くも文章を作り、或は新聞雜誌に投書せんと欲する人は是非共一本を供へて、作文の練達に努めざるべからず。文章家の机上、投書家の座右、本書を措いて亦何をか求めん。

東宮侍講 本居豐頴先生閲
文學士 大町桂月先生序
國文學專攻 小森松風君編纂
（全一冊袖珍美本 正價金四十五錢 郵稅四錢）

古今名家 短文軌範

六月中旬出來

短文軌範（▲記事▲紀行文▲說話▲詞辭▲評論▲圖讃▲序▲消息文▲春▲夏▲秋▲冬▲天象▲地儀▲人事▲敎訓▲言行▲動物▲植物▲雜文）

類語篇
（春の部）新年 梅附鶯 春景 楊柳 櫻 春曙 春夜 春雨 春色 春雜
（夏の部）初夏 時鳥 夏景 五月雨 螢 夏雜
（秋の部）初秋 秋曉 秋夕 月 蟲 秋草 紅葉 秋景 秋感 暮秋 秋雜
（冬の部）初冬 冬夜 冬景 雪 冬雜
（雜の部）眺望 山水 海濱 社寺 園地 旅行 別離 悲哀 戀愛 旅情 敎訓 盛衰 治亂 美人

附錄（日光山離宮三十勝記（漢文）三島毅（和文）本居豐頴 東京名所記…本居若水 ○ 短文一束…小森松風）

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目廿三番地 文光堂
賣捌 東京堂●東海堂●北隆館●良明堂●上田屋●大坂盛文館●長岡目黑●酒井●旭川弘文堂其他全國各雜誌店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

▲三版製本發賣▼

文學士 中内蝶二先生序文

女子文壇社編輯局校訂

大好評

當代名家選評

懸賞文集

▲選評諸家寫眞肖像及懸賞當撰書色刷十數葉入

全一册 洋装印刷美 中判上等紙 四百廿頁

正價低廉無類 金廿五錢 郵税六錢 中受けず（郵券代用必一割増）

目次

○短篇小説（廿七）○消息文（三十五）○抒情文（三十）○叙事文（三十二）○論文（十五）○新躰詩（廿七）○和歌（三十五）○俳句（四十四）○はがき文（卅八）○圖書（廿七）○附錄＝大家文集（七） 計十一項……三百〇七題

此書は女子が文章を練り詩歌を學ぶに**模範的作文書**としては**唯一の寶典**たるべく殊に**附錄**として**諸大家**の作文上の心得となるべき**名文**數篇を載せ、**修養**の**便**に**供**したる無比の良書なり。今や三版成る、陸續注文を乞ふ

出版元 東京京橋大鋸町 電話本局六〇七 **女子文壇社**

特約發賣所○東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、良明堂

●御最寄の賣捌書店になき時は「出版元」へ直接御注文の程希上候

皇太子殿下毎號御上覽

六卷第十壹號 《五月十五日發行》

◉青年筆戰大機關

秀才文壇

▲低廉無比▼ 毎月二回發兌（一日十五日）石版極彩色畫寫眞數葉挿入

價 一册拾錢 六册五十七錢 十二册一圓八錢 送無料

▲類書中王▼

▲第六卷一號より十號迄殘本少數、取揃注文に應じ候

東京神田旅籠町一丁目廿三 文光堂發兌

世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまづ、いぼは拾日 目に必らず美麗に除去すること**保險附** 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛に除去し得らるること確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完ふせよ來館者へ**感謝状**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥 ▲價は壹劑分壹圓、參劑半分三圓、六劑分五圓、拾貳劑分拾圓、送料各拾錢宛、必ず添送の事郵券代用二割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを適用とす）着金即刻小包郵送す

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさへムチスカシ的舊式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病强健の大幸を得られよ 輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢 特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり 本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す 又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢 貳劑分壹圓廿錢 參劑分壹圓七拾錢 特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて一手專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

毎號皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

定期増刊 たちばな月 二卷第七號

本號 石版極彩色口繪＝若葉（鏑木清方君筆） 表紙（山中古洞君筆）



女子文壇　第二巻第七號

定期増刊

花たちばな

河井酔茗

燃ゆるやうなる花咲きて　百合は大きく蘭は垂れ　風に流るゝ草の波　熱き息吐く夏の森　昔にかへす袖の香を　花橘の蔭にたづねむ

「そも〳〵卯月、中の酉　加茂の祭の頃ほひや　空のけしきも若やかに　樹樹の木葉も青みたり　つかさ〳〵に使立ちて　せみの小川の行く水も　清らになりし想あり

「棟にはさみし丹塗の矢　玉依姫はみごもりて　玉の和子を儲たるに　さしゝ盃、天に投げ　神去りしより姫と子の　御靈をいつく上下の　加茂は太しき宮柱

「裾濃むらごや、あをくちば　香の羅、あざやかに　直衣　刺貫、袍　火の色したる下襲　雲形を染め鳥を織る　くらゐ〳〵の裝束は　目覺しくも亦なまめかし

「車を寄する關白も　はやして渡る童女も　葵がづらは一様に　髮にかけたる草の葉の　緑はものゝ淸げなり

「神を鎭むる御生の日　布衣、雜色のすゑ〴〵も　思あがれる面持に　朱雀の大路、小六條　都九條に分れたる　巷は今か盛りなり

葵かざすと擧ぐる手に　はしなく覺し白日の夢　橘かをる蔭なれば　我も昔にかへりけむ　かへると見しは夢にして　五月の詩を如何に想はむ

女子の文章

近刊の『文章世界』に將來の女子の文章に就いて名流婦人の意見を叩いて居ますが、三輪田眞佐子は「我國では男子の文章と女子の文章とが分れてゐるが、之は無用な沙汰、否、有害無益の區別である」と云ひ、小金井喜美子は「思ふこと滯らず、嬉しき時悲しき時、程につけつゝすら〳〵と人に實にと思はるれば事足るべし」と云ひ、大塚楠緒子は「畢竟將來女の書く文は、文體は何うしたら善いなど、文體を撰ぶより、文體は何うあつても、兎に角よい文章を書かうと勸めて居ればよいと思ひます」と云ひ、鳩山春子は女子の手紙も「やはり男子のと同じく拜啓で始めて、匆々不一なり敬白なりで終るのがよいと思ひます」と云ひ、皆それぞれ意見はありますが、要するに實用的の文は餘り飾りを入れないやうに、明瞭に書くこと、耳遠い國語などは避けた方がよいと云ふ事になつて居ます。

常識を養へ

女子だから女子一方の學問さへすれば宜いと云ふやうな考へて、社會的の一般の智識が缺けて居るのは、現代女子教育界の弊かと思ひます。皆さんは書物に書いてある事なら能く御承知でせうけれど、一寸人の集る場所へ出て挨拶が出來なかつたり、母の留守に人が來て應答に困つたり新聞の記事が分らなかつたりするのは、凡て常識が足らないから起る事で、女子は男子と同じく世間一般の事情に通ずる必要があるのです。

男子を恐るゝ勿れ

男女學生の交際と云ふ事は近頃の一問題で、之を解決するには種々の方面から試みねばならぬ事でせうが、一つ申したい事は、餘り男子を恐れてはいけないと云ふ事です、多年の習慣上、男子を恐るべきものゝやうに思うて居る女もあつて、何がなしに之を避け且忌み嫌ふ風もありますが、太だ所由ないことで、其反動は却つて恐るべき結果を來します、今後男女交際の道が發達したならば、男が女に對する時も、女が男に對する時も、平然になるやうにならねばなるまいと思ひます。

文壇抄

▲麴町三番町家庭文學會から『家庭女學講義』の一號が出ますがそは『家庭の友』の主筆羽仁もと子の主任ですから信用すべき者でせう▲伊良子清白の詩集『孔雀船』と横瀨夜雨の文集『花守日記』とは遠からず出ます



短篇小說

廣津柳浪先生選

（天）

○散り行く花

下谷上根岸百二十五　太田秋津子

乳色の夜の霧深く、さし交した櫻の枝を鎖して、星もないどんよりした空に夢の樣に霞んだ朧々の月。遠く霞んで行く花の便り戀の辻占の呼聲も艶かしう、さすがに爭はれぬは春の夜頃の、柔かい溫い風が音なく通つて今を盛りと咲亂れた梢からは、もう花片がはらりはらりと、見る限りの物象は皆妖艶な春の香に醉つて眠つて居る樣な物靜かな一夜。

「零落した家も興さないで此儘斃れるのは、僕、實に殘念です…姉樣だつて普通なら、もう子供の一人や二人有る年だのに、僕達のために斯やつて燻らして、姉樣!!!實に僕は濟まんですよ」

枕邊の姉を見上げて、新一は光りなき目に含む痛恨の涙、假初ならぬ重き病に、靑春の俤いづこ。いたくも變りし有樣よ。ほの暗い洋燈の光に照された其面のやつれ、何所やらに死の影が漂ふ如く覺へて、姉靜枝は勝り氣乍ら女心の、急に胸迫つて云ふべき言葉も出なかつた。

「死は天命で、元より是非もないですが、僕は…僕はあゝ實に、此樣に短い生涯だとは、夢にも思掛けなかつた。姉樣には隨分御苦勞もかけましたが、然し行末は必御恩返しする積で居たのです。二人の世話から何から、其上人仕事まで…姉樣!!!僕は死たく有ません。何故斯短つかい命に生て來たかと思ふと、殘念で!殘念で…」

二十七の女盛り、二人の弟の世話から世帶の遣繰、か弱い手一つに皆計らふ苦勞、常に心に憂のあればか、晴れぬ面に、淋しい姿。

「其樣な事云つて!!!そふ餘り焦々するから不可ないんですよ。妾の事なんか…姉が弟を世話するのは、當然の事だわ。肺だからつて、必死ぬ物と定まつてや仕ないでせう!」

口には優しく慰めても、もしや、若しや此儘起たなか

つたらと、云はれぬ感想に心で泣く。
「いゝへ、姉樣僕は到底駄目だと覺つたですよ。竹田の家を興さなけりやならん僕は、僅に二十一歳で命がつきる……姉樣には濟まないが、許して下さい……云ふ迄もない事ですが、どうか武二は立派な人間にして！こ、之が僕の願納です……」
痛恨の情潮と寄せて、新一は霑む目を屢瞬く。靜枝が眉宇の曇りは一入深く成まさつたが。
「そりやもう、武二は確かに立派な人間に……妾が誓つて請合ひます……」流石に其聲は曇つて居た。
「有難う……」とばかり。
感に迫つて跡は出なかつたが、やがて、
「武二はまだ歸らんのですかしら？」と語をかへて問ふ。
「えゝ、まだですよ、だがもう直歸るでせう。寄道する氣遣はなし、彼品を納めて代さへ受取つて來りやいいんだから……」
新一は默つて天井を仰いだが、青ざめた面に歷然、苦悶の色が浮んで、
「あゝ……」と溜息を洩したが、急に烈しく込上げる痃に靜枝は慌てゝ背を撫つたが、かつとばかり、吐くや眞紅の鮮かな色。白い枕當には時ならぬ紅梅の花を散らした。
「姉樣!!!僕はもう永かありませんよ……姉樣にや厄介の掛けつ放してね……」
淋しく笑むだ新一、聞くに悲しき其聲よ。優しい姉は零々と落淚したが、泣かじと堅く唇を嚙んだ。
永久に盡きぬ思をのせて、行く春の行方や何處、外にはあはれ、朧夜の落花。

詩趣のある筆、餘りしめッぽいので、春の讀みものとしては、ふさはしからぬやうであるが、兎に角筆路のたしかなる事は敬服である（選者評）

地

○ショール

横濱　生田喜世子

「姉樣どうかなすつたの？」
驚きの眼を以て繁子の青い顏を窺き込んだのは君子と云ふ今年十二の乙女、髮は桃割れに可愛う結んで紫の被布の袂長う、少女界を左の手に抱へて居る。
「あゝ、君ちやんですか、妾又困つた事が出來ちやんで

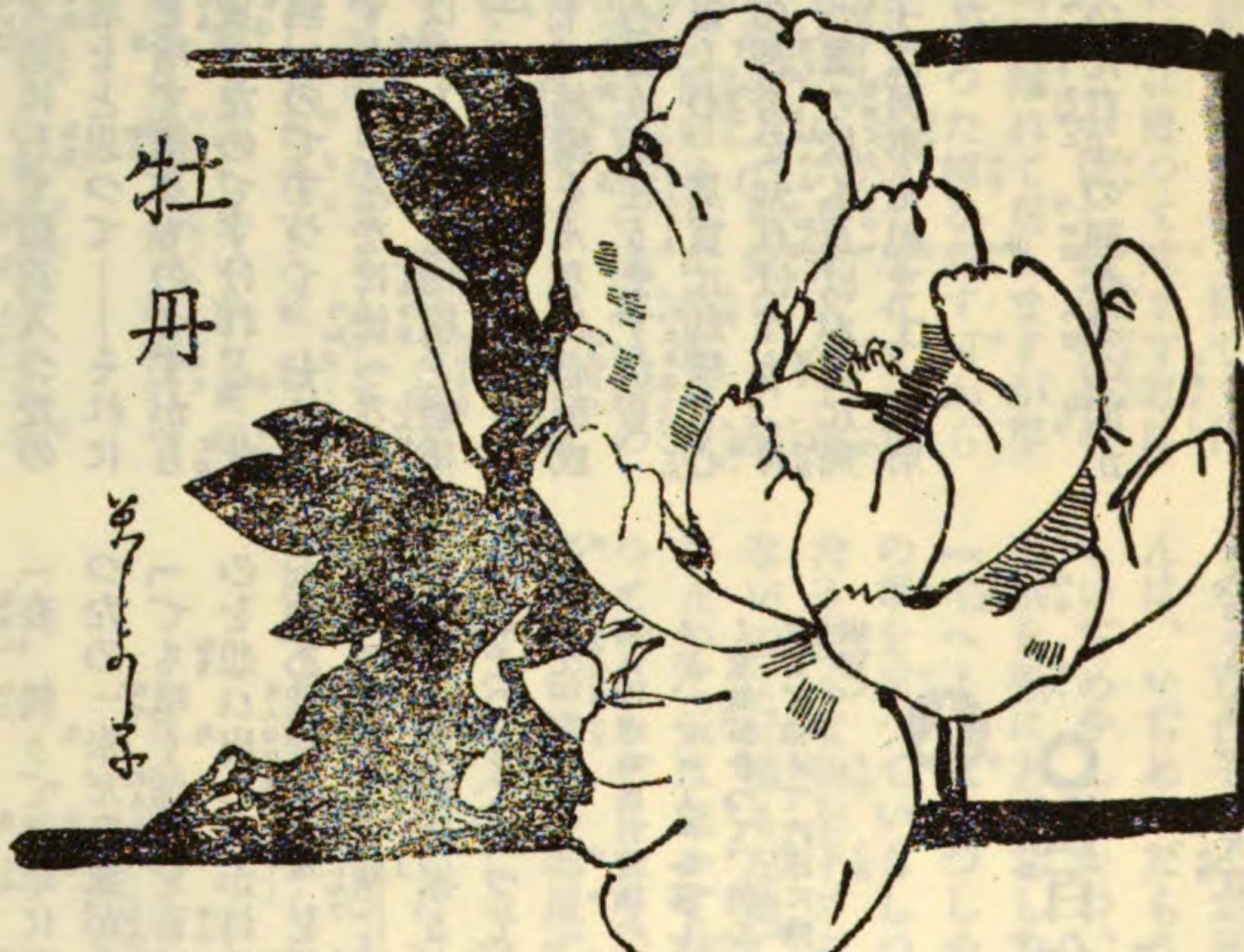
すよ
縫ふて居た姑の着物をしづかに押しやつて涙を拭ふ。

此家に嫁入てから丸三年、繁子は二十一のうら若い身を日頃の苦勞に窶れ果てゝ昔の容貌は影も止めぬ。

「兄様がね此二三日家にお歸りなさらないんでせう、多分例の待合でせうと思つて、母様に御相談したのよ、お迎へに行きませうかつて、そしたら母様大變御機嫌が惡くつて、こんなに秀雄が此頃家を明ける樣になつたのも皆お前の仕へ樣が惡いからだと仰有るんですもの……まあ妾どうしたら

（選外）

神戸　木田繁子



宜のでせう、兄様は實に私に親切にして下すつて是迄唯一度口爭ひも爲た事が無い位ですのに此頃の御身持は……あゝ魔でもさして居るんでせうかね」熱い涙が止め度もなく落つるのを襦袢の袖に受けて、

「それで其儘にもして置けませんから昨夜妾がお迎へに參つたんです、其時餘り急いだもので傍にあつた母様のショールを拜借してコートの上へ掛けて行つたんですが車の上で考へ事を爲て居たもんでショールが滑り落ちたのにちつとも氣が付かなかつたのよ、まあ何んて馬鹿なんでせう妾

は……」

「彼れは母樣が常々から一番大切にして被爲入つたのですから何卒して彼の通りな者をと思つて――それに今お謝罪をしては却て御立腹を増す樣なものですから――竹やに秘密で方々捜して貰つたのですけれど、此横濱には如何しても同じ物が無いのですつて、それに竹やだつて母樣の御用が在ますからそんなに使へないし、困ッてますの、たしか彼れは君ちやんと母樣と新橋て買つて被爲入たんてしたね」

「エー妾の桃色のと一所に――、姉樣そんなに心配成さらない方が宜のよ、妾少し心當りが在りますから、それぢや其お金子お預りして置くわ、眞實に姉樣も心配が多いわね」、慰める心も姉の苦勞を知ればなり、母なる人の我身につらきに引替へ眞の妹も及ばぬ迄に痛はりくるゝ乙女の心嬉しく繁子は何事も包まず、何時も君子にのみは語るのであつた。

* * * * *

「姉樣ッ在つてよ」喜びに輝いた君子の顔が次の間から現れた。

「まあ、何處に」

「妾東京へ行つて買て來たの、一人て」

「エッ君ちやんが一人て……」驚くのも無理は無い。

「妾、獨りで汽車に乘つたの今日が初めて……夢中だつたの」未だ動氣がと云ひた想に胸を抑へて、

「でも早く姉樣を喜ばせやうと思つて……」怖かつたのを想ひ出してか姉の膝にわつと泣き伏した。

「まあ其程迄妾を思つて下さるの君ちやん、う、うれしいのよッ」情に燃えた眼からはら〳〵と露が散つて桃割れの鬢に振りかゝつたと思ふと、つと柔しい手が君子の脊に掛つて長へに離れじとかた〳〵抱きしめた。

初めに噂の出た秀雄の事が、後に何もないので稍物足らぬ感じもするが、ショールを落して、心配する兄嫁の氣苦勞と、妹の慰めは能く意氣が合つて、美くしい女の情が表はれて居る、殊に横濱から東京まで初めて汽車に乘るなど、妹の性格は最も同情を惹くに足る（選者評）

(人)

○白百合

京都西陣紋屋町　濱部郭公女

あまりよいお天氣てすから私は晝飯を濟してから本を片手に獨り程遠からぬ船岡山を散歩し樣と出かけま

した、丁度三月の末で空は一點の曇も無くコバルトの様な色、時々思ひ出した様に暖い風が頬を撫て、何處からか梅の香が風の吹く度に、にほつて來ます私は船岡山の麓迄で來ましたが茲は小さい岡で織田信長の靈を祭た處、町からは僅少三四町離れて居りますが早や茲迄來ると何だか急に俗塵を去つた様な犯す可からざる自然の光景に私は恍惚として歩いて居りました知らぬ間に足は北に向いて人通少ない六兵衛と云ふ池の畔に來ました、折しも私の頭の上で可愛らしい聲が聞えました仰向て見れば鶯が面白さうに枝から枝へ飛び廻つて居ります、偶然私は彼處の淺若い綠の草を見ましたが一葉の白紙が落ちて有りました私は何心なく手に取つて見ると小供らしい手跡で、

『兄様私嬉しくつてたまら無いわ、だつて私の大好な百合子さんが今に兄様の奥様にお成りなさるんですてね』私はハツと顔が赤く成りました百合子とは私の名です、私はもしや誰かゞ傍に居りはしまいかと見廻しましたが私より外に誰も居ない様子私は波打つ胸を抑へ次を讀み始めました。

『私は男では兄様が一番好きで女では百合子さんが世界中で一番好きなのよ親切で優しくつて何でも教へて下さるんですもの、そして可愛いがつて下さるのですもの、百合子さんが私の信實の姉様に成つたら花ちやんは、いぢめるだらうなんて兄さん酷ひのネ、私何にもいぢめやしないわ、大好なんですもの』私は思はず手紙を頬にあてました。

『宅へよく入らつしやる富子さんね、あの方始終兄様の事を言つていらしつてよ、そして私にリボンを呉れたり色んな物を下さるの、だけど私あの方何だか好かないのよ兄様も左様でしよう、兄様私これから百合子さんつて云は無いで姉さんと謂ひますよ、かまわなくつて、いゝでしよう、あゝ嬉しいな、今此れを書いて居る時母様のお部屋で百合子さんの聲が聞えてるのよ、きつと入らしつたに違ひない、また一處に散歩に行くの、今日はこれで失禮します、兄様勉強してえらい人にお成りなさいよ、そして早く歸つて頂戴よ私は百合子さんと中よくして待つて居ます、さよなら』

花子より

なつかしき　御兄上様

まゐる

* * * * *

船岡山から歸つて机の上を見れば白百合の封筒の手紙が載せて有りました勿論花ちやんからで讀み終つて私は幾度となくキツスをしました、そして手紙の終に「昨日姉さんと船岡山へ散步に行つた時東京の兄樣へ送る大事な者を袂へ入れて置きましたが何處かで落してしまつたの私心配なのよ、モー誰か拾つたのでしようネ」と書いて有りました、其の大事な者……は今私の懷の中に………

斯う何事もうまく行くと、世間は心配したものでもないが、兎に角光明小說として、喜劇として、少しも暗くない作、寧ろ青年男女の欣んで迎へるべきものだらう(選者評)

秀逸

○同窓會

神田　大澤隆子

『只今。』

今、學校から歸つた計りの美代子、襖をしとやかに引明けて手を仕へた。

『あゝお歸りかい、今日は少し遲かつたね。』と長火鉢の傍、裁縫に餘念なき母は、針の手を止めたのである美代子は微笑み乍ら『えゝ今度の日曜に同窓會するんですツて…餘興の相談で遲くなつたの。私と花子さんと櫻狩を彈くのよ。活人畫…中將姬に私なるんてすけれど…厭に成ツちまふわ。』

『そんなにお前に出來るかい。』

『だツて…皆樣が承知しないんですもの。仕樣が無いわ。お琴はまだ俯向いて、彈奏んですからようござんすが…活人畫は眞實に極りが惡くツて…。』

今更に頰を赤くして、言葉を途切らした。が不圖思ひ出した樣に、『アノ母樣、私お願があるの。』

『何に…?』『幹事の方達がね。例でも黑木綿の紋附に海老茶袴も氣が利かないから、今度は元祿模樣のお揃衣を新調へやうツていふのよ。ですから私にもね母さん、會て一緒に誂へるんですからお金を明日持つて行かなくツちや…。』熱心に云つて母を見詰めた。

『まあ幹事達が其樣な事いふのかい。學校へ通ふ人達が如何流行るからツて、藝妓風情の眞似するなんて、眞實に呆れるぢやありませんか。お前は其をいゝ積りてお出でなのかねえ。』

『ね、美代ちやんそんな事はお止し…母さんは餘計な事にお金は出せませんよ。』キツパリと云ひ切る。

『だツて、皆樣が賛成だのに私ばかり…。』美代子は

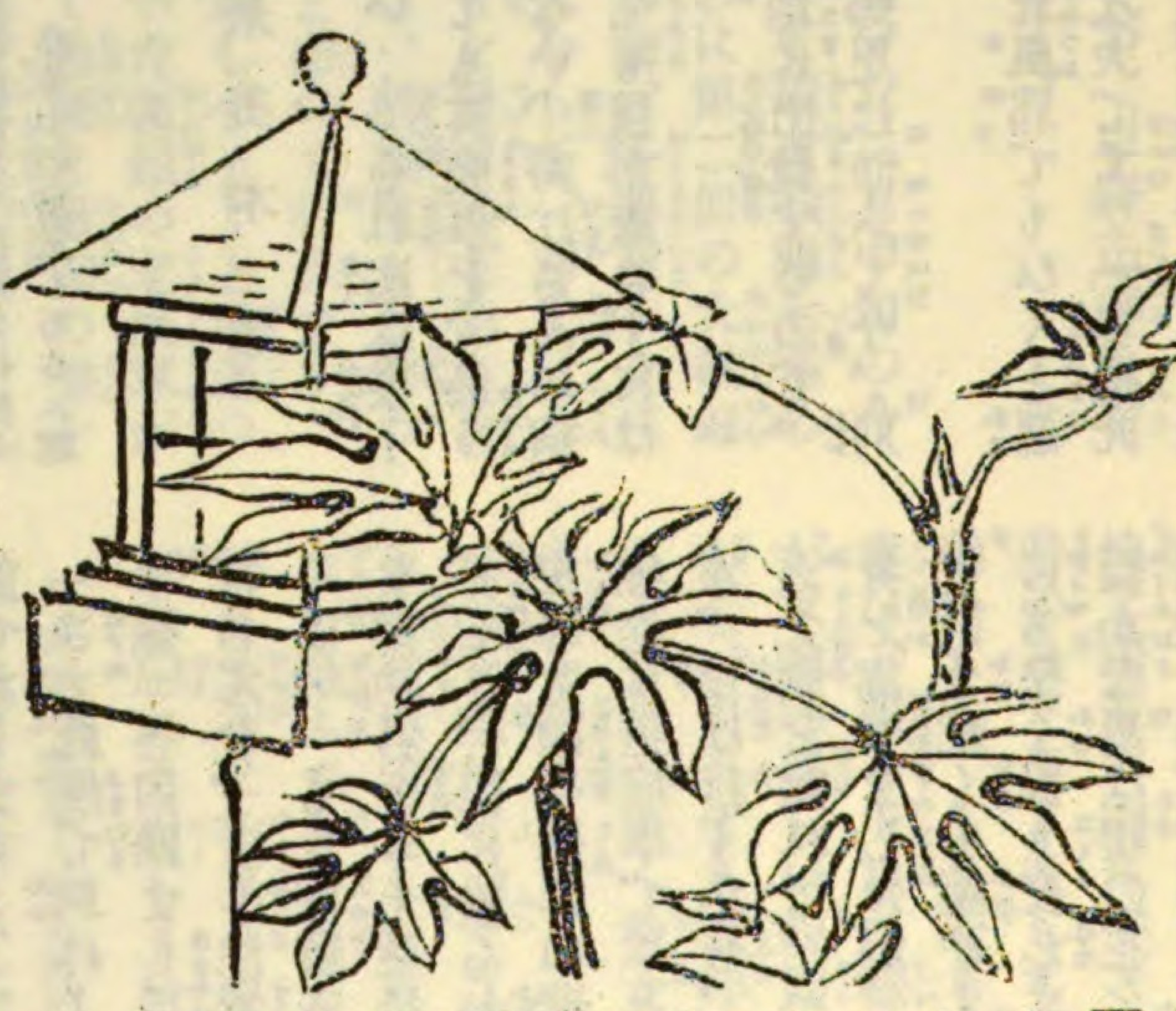
泣き出しさうてある。

『ほんとに其樣な無益な事に費ふより、費ふ處は未だ外にありますよ。まあ東北地方は饑饉で大變ださうぢやありませんか。草の葉や芋の葉や藁の餅などを食べたりして凌いて居たが其さへ遂々盡きて餓死した人があるさうてすよ。質に可愛さうぢやありませんか。皆樣のお揃衣を新調るお金の半分宛でも寄贈ッて上げたら、其人達は如何に助かるてせう。そふ云ふお金なら母さんは出來るだけ出して上げますよ。』

『もう皆樣とお約束したんてすもの。今になつて斷はれやしないわ。』美代子はうるみ聲。

『皆樣にお勸めして御覽。きつと其方へ贊成なさるから。』『だッて、私困ッちまふわ。』

『まあ何誰にでも聞いて御覽。母さんの云ふ事が無理か、無理でないか‥‥。』『いゝえ母さん私同窓會に



行かないから‥‥。』とすゝり泣く。

『お前はこれ丈いつても、分らないのかい。』母は美代子をきつと見据えた。

『奥樣、山下樣が入らッしやいました。』折から女中の來客を告ぐる聲に。『左樣かい。彼室へお通し申しておくれ。』母は立上り乍ら『美代ちやん、お前よく考へて御覽よ。』と捨臺辭を殘して、彼方へ去つた。

母の言葉も當然‥‥東北地の人々に同情せぬではない、ないがさて當日自分計り仲間外れ、と思ふと泣かずには居られぬ。其とも皆樣が寄贈に贊成して、お揃衣を中止にするかしら、其ならいゝけれど‥‥若しさうてないと私計り‥‥あゝ乾度貪乏だと思はれるわ。まあ何したらいゝだらう。

一人取殘された美代子は、少女心にいとゞしく思ひ悩むのである。

* * * * *

（選外）　下谷　太田らく子

其より一週間後の○○新聞東北凶作地寄贈金欄に
一金卅八圓　○○女學校同窓會
とあり、尚同女學校諸孃等の美擧を賞揚してあつた。

まさか元祿模樣と言ふ事もなからうが、學校に依りては華美に流る風俗も無いとは限らない、一篇の小說、亦多少の寓意もある（選者評）

○惜別

小石川　奈美木翠

「ぢやア貴郎、天晴、働いて下さい……それ迄は妾……屹度死なずに待ッてゐます」「又しても其麼事を、最う決してそんな考へを起してはいけない、時江さんの病氣は癒る、屹度癒る、いや什麼しても僕が癒さずにはおかないから」

海軍少尉早野正春は、間もなく戰地に出發するので、久しく病に惱んでゐる、その妻を郷里に訪ふて今、別離を惜んでゐるのです。

「時江さん、最う此所でいゝ、また風邪でもひくと惡いから」「其所まで參りませう、大丈夫ですワ」「奧樣此所で御み送り遊ばせ、眞にお風邪でもめすといけません」

今迄無言で後に扣へてゐました媼は、少し身を倚せて心配そうに謂ひましたが、はや眼には一ぱい淚さへ堪へてゐます。實にも立ち盡した後姿は、豐であッた肉は落ち、優しい肩は一層こけて見るから痛はしい病態であります。

「さア此所で別れよう、何所迄行ッても同じ事だから、ネ、媼」と回顧まして、「餘計な言だが、僕が留守中は時江さんを、よく注意てネ、媼一人が恃みなのだから」「はい、もう御留守中は決して御心配なく、何卒天晴な御功名をお土產に……」後は喉が塞つて謂へないのてせう、咳に紛らして、ソッと淚を拭くのです。

正春も謂ひ知れぬ悲しさに胸塞がるのですが、戰爭の征途に這麼事ではと氣を引立てまして「ぢやア時江さん、僕は行くから、病躰を大切にネ」「ハイ……」ガックリ頭を垂れて、ハラ〳〵と散り掛る櫻の下に力なく身を靠せましたが、二三步正春が進んだとき「貴郎!」と計り危くも驅けよッて、ひたと身を倚せ、力なき手にも堅く握り交しました。

緩かな風は櫻の花を雪と翻して窶れた頰に亂れ掛る、遲髮を撫て、やがて菜の花咲き匂ふ野面に流れますと、何所からか白と黃色の蝶が浮んで來て、霎く上になり下になり狂ひ舞つてゐましたが、亦何所へか飛んで行

きました。

間もなく四月の某日、一大悲報は全國に傳はりました。それは常陸丸の遭難でありますが、早野正春も恰度それに乘り込んでゐたのであります。

＊　＊　＊　＊　＊

鶯の初音に世は復び麗かな春となつた二月中旬の今日、東京市では、長らく異域に在つて謂有艱難を嘗め盡して、目出度凱旋した將卒のために第二回の大歡迎會を催したのです。行軍の沿路は勿論、各要所々々には意を盡した凱旋門や大國旗の交叉やらで、市民は心から此光榮ある軍隊の歡迎に此一日を費すのであります。今しも不忍池畔を發した行軍は、威風堂々と都の大路を經て、日比谷の正門を順々と潜つて行きます。勇ましい騎馬を前後に幾輛の馬車がしづ〱と通過つた後に續いて、頭には巳に霜を頂いた溫顏の老將軍が見へました、そのとき市民は齊しく熱誠な歡迎の聲を擧げ波をうつて動搖めき渡りました。恰度其時でした、群集から少し離れた所に未だうら若い一人の婦人が斯の狂する計り歡びの聲に亂れる方をうらめしそうに眺めてゐました、而も何所やら凛とした所に面窶れして、誰が眼にも病氣上りの蒲柳い身であると云ふ事が知れます。アヽ！それは時江であります。今日しも彼女は去年櫻散る靜な日、別れた夫が未だ戰地を踏まない中に、アハレ千秋の恨を呑んで恥かしい俘虜の身となりましてザット一年、漸く故國に歸つたと聽いては、もう矢も楯も堪らず、少し快方なつたのを幸ひ、遙々上京て戀しい夫に面會を願つたのです。所が軍隊の嚴しい規則に無情にも謝絕れ悄然と辿る道すがら、計らずも歡呼の聲に沸き返る行軍に遭つたのであります。アヽ彼女の少い胸は甚麽でせう。時々彼女は細い嘆息を吐ひては力なく彼方の動搖くを見ては亦首を垂れて、深い懷ひに沈むのですが、定めて限りなき今昔の感にうたれたのでせう、果ては、ハンケチに面を蔽ふて身を慄ふのであります。折柄式場で打ち揚げる煙花に喧囂の聲天に響いて今は、愁ひも悲しみも打ち忘れて齊しく欣喜の叫びのみてあります。(完)

軍隊の歡迎と云ふ裏面には幾多の悲劇喜劇が含まれて居るか知れない作者が此點に眼を着けたのは、甚だ宜しいが、それにしては常陸丸—捕虜—ては少し物足らない、此れだけ書ける筆があるなら、今少し面白い筋が欲しかつた(選者評)

○渡しの月夜

岩代　服部すゐせん子

風一陣、枯蘆戰いて、今白雲を分け出た月に、櫓の音低ふすべり行く舟の波に漂ふ金波、銀波。

と、また月は薄墨雲の影に隱れた。

下宿の家々の灯チラ〳〵、渡し小屋の影から見えて、川柳續きの土堤を、小股に走り來るは誰ぞ。月は益々雲の奥深う。

「ヨイショッ、ヨイショッ」

ギイと舟を岸に着けて、ホッと一息。疲れし腕を摩する女渡し守。

ハタ〳〵と土堤に音して、やがてヒラリ！舟は左右に、波は前後に。

愕然たりし渡し守は、今漸く半面を現した月の光に、踞れる舟の人を透し見て、驚き聲。

「ヤ新屋のお浪樣か」

「マア〳〵此夜更に、何處へ往かつしやる、新屋の御新造ともあろう者が、お一人でそしてまア裸足とは如何した譯でござんすか、新樣と言爭ひてもさつしやつたか」

問はれてつまる胸を押へて、恥かしさう。

「いゑ、あの私一寸家まで……おなをどん早く遣つてお呉れよう」

無邪氣ない言葉に、容子お可笑しと危ぶみながらも、女は櫓を取りあげた。

「そんなら大事ござんせんか」

漕ぎ出づる舟、綠りの小波を蹴て、無言の二人を河風緩ふ吹く。兎餅搗く、月の世界は、又黒雲を拂ひ退けて、一點の汚れなき靑空に、今度こそはと光を放つて居る。見れば女渡し守。まだうら若き廿四五、白の手拭ひ姉樣かぶりに、黑の筒袖甲斐々々しう、肉付き豐かの其頰に、月が照らして美しい、手拭ひ退くれば、束ね髮、ハラリ〳〵と張りたる肩に。

突然靜寂を破る拍手の音。

「お月樣！どうぞ〳〵戰地の權さんに變りがない樣にお願ひ申まする……」

小瀨の渡しのたゞ中に、舟は動かず、波立たず、月の光りのたゞ皎々。

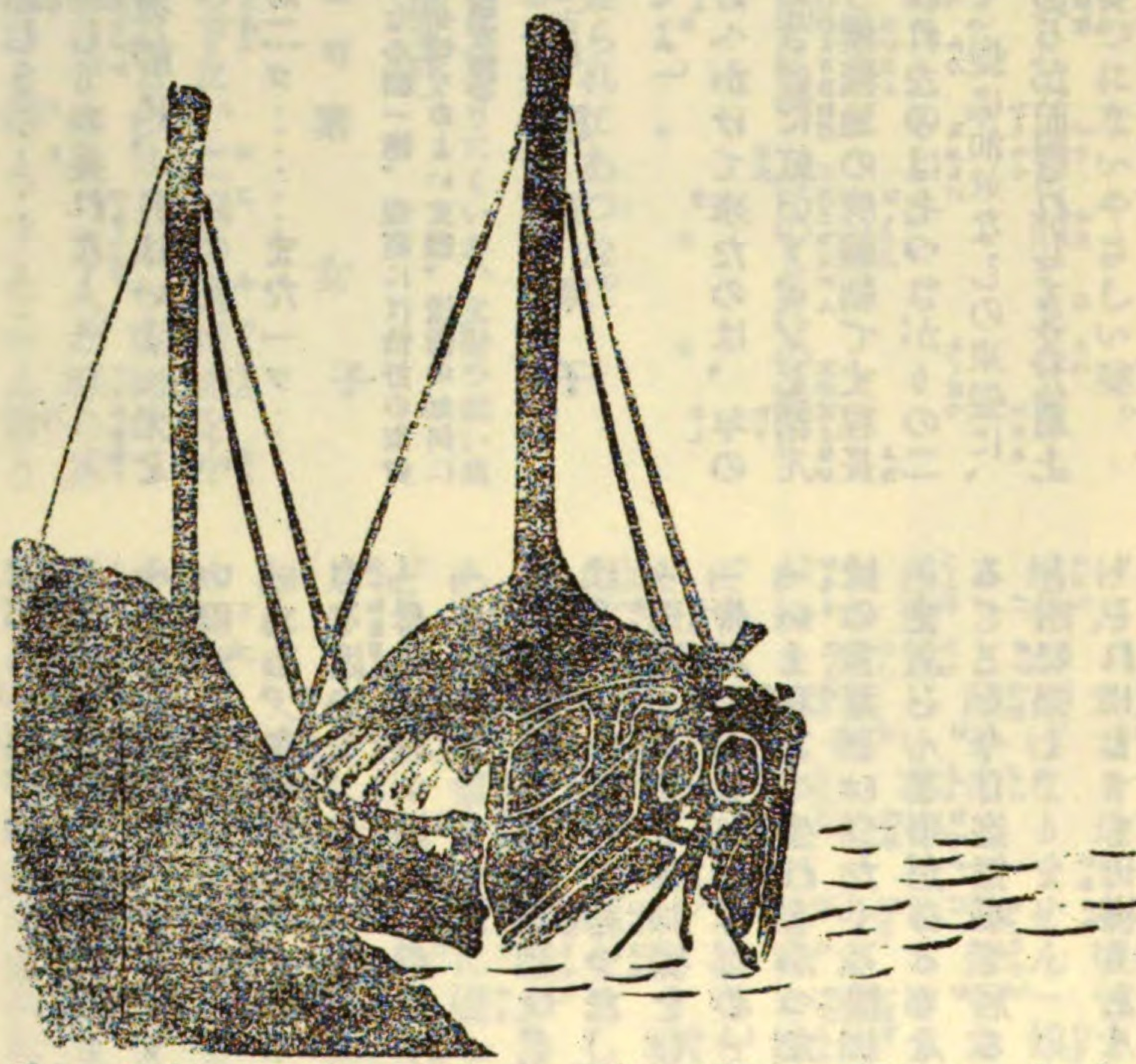
「お浪樣。家の權さんが出征つてもう丸一年。早いものでござんすのう、私しやそれからこうして女船頭、亭主の握つた舵を取つて、盲目の姑さんを養つて居りましたが、毎晩此處て、こうして、お月樣を拜むんで

（選外）　岡本　鶴れい子

ござんする」

凛と冴えたる其言葉に、お浪の胸にはヒヤリと。

上宿の舊家、笹川に生れたお浪十八。下宿きつての好男子、新屋の新造に望まれて、遂此正月に芽出度い三三九度。可愛いお雛樣のやうなご夫婦と、村の若者、娘達の羨みの種となつて居るが、何を言ふにも笹川の一人娘、可愛い／＼で育つただけに、新屋の御新造とも仰がれる身が、日毎々々の仕事と言へば、父が京土產の人形の着物縫ひ、そしては物堅い姑をあきれさして居たが、お孃樣育ちのわけてまだ十八、髷は結ふても強ねるがお上手。今日も今日とて姑さんに少々小言



を言はれたのが口惜しいつて、新樣の膝に顔押し當てのそゝり泣き。まア／＼となだめられるを、私しやもうもうこんな家いや／＼いやと、強ねて泣いて、慰め兼た新樣が、そんなら勝手におしと、わざと起ち去つたを、怨めしそうに後見送つて、まあ新樣までが：：：いゝわ／＼家に歸つて母樣に言ひつけてと、裏口から拔け出して來た今のこと。

月にのぞかれる樣な氣持ちして、

「イヤ！」とばかり長き袂に顔を覆ふた。赤い襦袢の袖がもつれて出て、クッキリと白い襟に丸髷のくづれが、落ち入りそう。

あゝ今更ながら……新樣戀しう……
「あのうおなをどん！舟を戻してお呉れな！」
川面を渡る風サラ〳〵、小波靜に、月はいよいよ光を増して……。と
向ふの土堤に現はれた、提灯二ッ……また一ッ……

十八の嫁御寮としては、ありさうな心機一轉、短篇には恰好の取材て申分ない、文章もハキ〳〵した句切りのよい文體。諧謔の如何に依つて希望のある作家であらう（選者評）

○大變

名古屋　原田琴子

「姉樣また大變な事が出來てよ」
と今し洗濯に餘念ない姉の許へかけて來たのは、年の頃十一二、房々とした髮をおさげに紅いリボンを結んて、身には琉球絣の綿入に、紫無地の唐縮緬て丈程長い袖の被布を着て、姉と呼ばれたのは七つさがりの二子縞にキッとたすきをかけて、髮は油氣なしの束髮に、かいがいしい出てたちてはあるが面窶れしてまだ肩上げもおりないのに大人びた姿。
「なにつ大變な事つて」と洗濯の手を止めて、後を見返ると、
「あのお壺のご飯たべてはいけないの」後に氣を配りながら小聲て、
「なぜつ」じつと妹の顔を見詰める。
「あのご飯はたべてもいゝけどお菜をたべてはいけないの」と最早涙ぐんて、
「まあ、なぜなの早く敎へて頂戴」いつか妹の方へ向きなほつて、
「母樣が白い粉を入れ成すつたの、姉さんのだけに」
「えエッ」
と云つたぎり二の句をつぐ勇氣もなく一人は膝に一人は脊に泣き伏して終つた、暫したつて妹は、
「母樣はなぜこう姉樣をむごくするんてせう」
「皆私がわるいからだわ」と力ない聲、
「いえ私さへ生れなかつたら……」
妹の言葉をひつたくる樣に、
「まあそんな事が有るもんてすか君ちやんが居て呉れるてこそ今日迄無事て居るんてすもの私の恩人だわ」
と語勢強く、
「それにしても母樣もあんまりだわねえ」
暫し無言に打ち過ぎたが、やがて姉は思ひ付いた樣に顔をあげて、
「君ちやん有り難うよ、よう敎えて下すつて有り難う

よ、私死んでもかまわないんだけど、せめて父樣のお凱旋り成さるまで……」

あと云ひ得ず姉妹が互に抱き合つて涙にくれて居ると「八重子ご飯だよ」と母のいつにないやさしい聲。

「はい」と答へて姉妹は云ひ合した樣に顏を見合せて。

「君ちやんよもやご飯には……」

「そうね……」と直ぐと行うともしない。

「八重子ご飯だと云ふに」と早荒だつた聲。

「はい只今」と答へはしたが胸は轟く波のそれの樣に、さて足はいよ／＼重うて……」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

膳に向つた時は既にご飯は盛られてあつた。

一と目見た八重子は顏の色さへ失せて……。

ありふれた繼母の物語りて、趣向は受取りにくいが、文勢の鋭い處は、決して捨てたものてはない（選者評）

○佳人薄命

淺町　素女子

三分心の煤けた薄暗い洋燈の下に、二個の蜜柑函を中に挾んで摺附木の箱張をしてゐるのは、年の頃四十二三位の母と十七八の美しい娘とてある、二人の膝の周圍には既に出來揚つた箱と是から張らうといふ箱とが、堆高く積上げられてある、母は一寸手を止めて、

「ねえ雪さん、阿母さんは和女に折入つて相談がありますがねえ」雪子とよばれた娘は莞爾無言て母を見上げた、「和女も最う年頃てすからねえ近々には何處かへ嫁付かねばなりません」娘は思はず眼を睜つて而してさッと顏を赤めて差俯いた、「けれどもねえ雪さん、恁麼貧しい暮しをしてゐては嫁入り處か明日お米を買うお錢も無い位い今が今何うするとも出來ません、處がねえ實は和女を是非お嫁にと望んてゐる處があるんてすがねえ和女親のためなら何處へでも行てくれますかえ」娘は無言て頷いた、雪子は今年十八色のクッキリ白い中肉中背のすらりとした柳腰髮は黑くつや／＼として眼元に無限の愛嬌があつて其上何處か上品な處がある其れて氣象は誠に優しい從順かな娘である、されどまた非常に不幸な身て杖柱ともたのむ天にも地にも只一人の父は肺病といふ忌しい病に冐されて今日明日知れぬ大病、信雄とて今年十一になる弟はあれど腹違の何處やら隔あつて心から便りにはならず母はなさぬ中とて箸の倒れたほどのことでも雪子には辛く當る雪子は木から落ちた何とやら、その愛くるしい眼から夜毎夜毎に盡せぬ泉の溢れ出てゝ、ピッショリ枕紙をぬら

すのである。母は雪子の樣子をつく〴〵と瞻入つて「和女が大人しう何にも云はずに其處へ嫁付いておくれたら宅の道の難義も助ますしお父さんも良いお醫師さんに診てお貰ひなさる事も出來ますしまた信雄を學校へも遣れますねえ雪さん親や弟を助けると思つて嫁入する氣はないかへ」佳人多く薄命不幸なる雪子は遂に一家のために身を犧牲に供せねばならぬのである雪子は自分が穢多の宅から望まれてゐると云事も薄々知つてゐる、其穢多が非常の金滿家で嫁くとさへ云へば仕度料は何程でも出すといふことも高利貸の黑澤の話でそれとなく聞てゐるけれども貧はしても早川家は素性正しい士族身分に雲泥の相違あれば正かに母が自分を穢多の嫁には遣られまいと今が今まで信じてゐたのだ。さるを今母の口から直接斯ういふ言を聞いてはどうして驚かずにゐられやう我知らず顏の色は變つたのである、しかし一度云ひだしたことは何うでも其れを遂行せねば巳まぬといふのが昔からの母の氣象殊に物優しい雪子には何とも其れを云いとく術をしらない「ねえ雪さんお母さんが手を合して和女に賴むんです和女に助けて貰はねばお父さんは彼のまゝ死んでお了ひなさるし信雄も何時までも學校へも行くことが出來ません」この最後の言葉丈けは眞に哀れである母は重ねて「もう此上は何を隱しましやう和女も薄々は知つてゐなさるでしやうが實は今戶の新平民です」「……」雪子は眞蒼になつた、母は偖はと思つたけれど聲はますます優しく「士族の身で新平民へ嫁入するこんな情けないことは又とないとお思ひなさるだらうがねえ今は昔と違て身分に高低はありません、お金を多く持つてゐるのが勝の世の中隨分世間には親のために苦界へ身を沈める人も澤山あります其れを思へば何も辛いのはありません、ねえ雪さん一つ思切つてお父さんのために死んだと思つて承知しておくんなさい和女心一つで家中が助かるんですからね」雪子はもう遁るゝ道はない父さへ健康であれば「いや其樣ことは出來む」と只一言で退けて了はれるけれども哀れや其父は今九死一生である、しかし雪子は親のためなら恁麼なる苦艱をも笑つて忍ぶ、孝行者である、悲鳴をあげて殺される者よりも笑つて死につくものゝ方が哀れであるまいか「それではお母さん、妾をその今戶とやらへまゐります」顫へ聲てはあるが立派に云切つて、ニッコリ笑つたその顏の淋しさ、今まで靜まり反つて寢てゐた主人は忽ちガワと跳起きて「ああッ、ああッ」と苦しみ出

した。

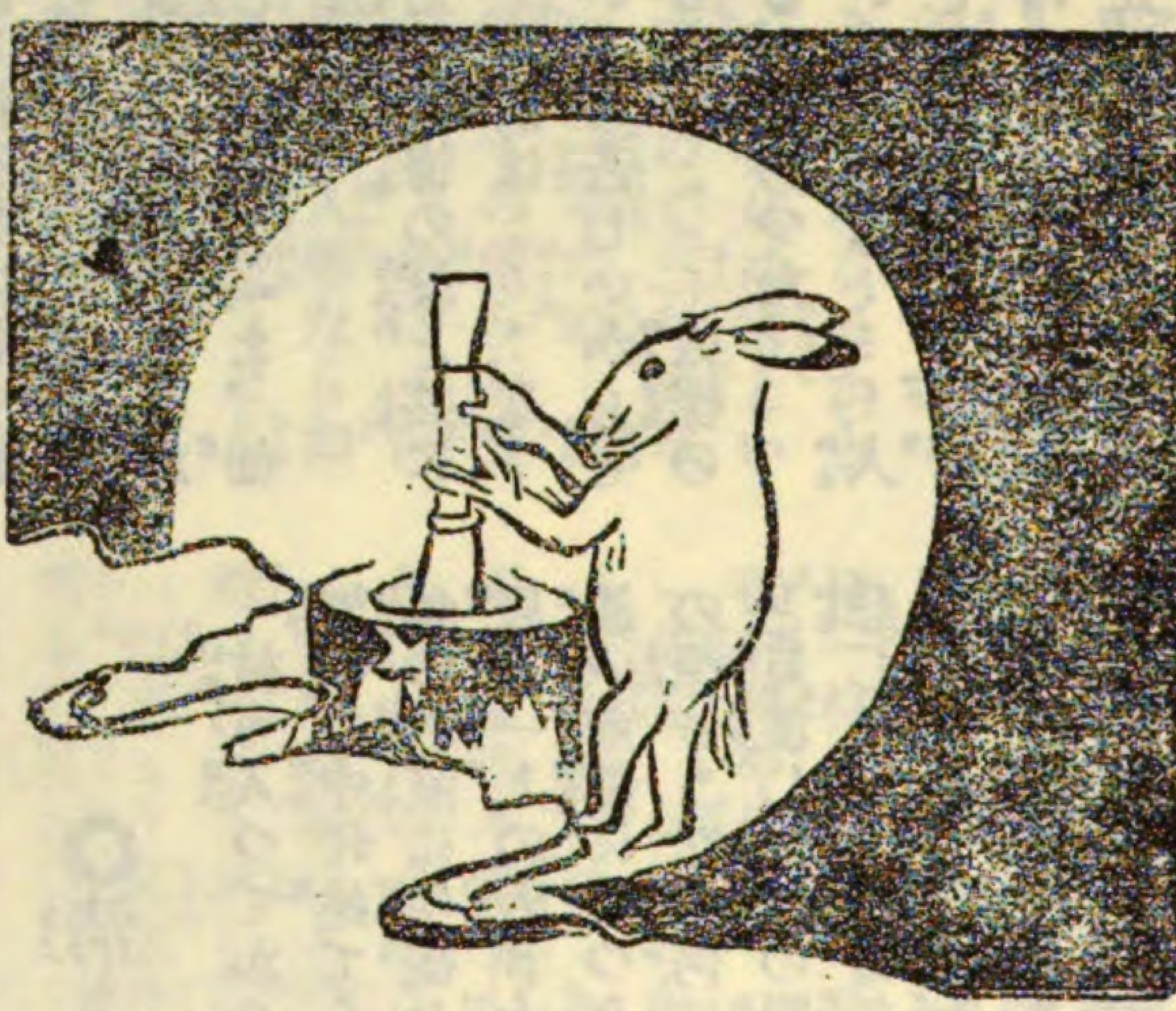
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

それから間もなく優しいそして美しい雪子の姿はこの荒屋には見えなくなつた、それと同時に信雄が前の日とは見違るやうな服裝をして嬉しさうに登校する樣になつた、折々此家の門前に立派な抱車が待つてゐるそれは何某博士とかいふ醫師が見舞ふとの事である。

沈着な文章、漸層法とも謂ふべく、次第に主人公の哀れな境遇に立入つて行く處、書き流しの文章とは全く違ふ、併しながら、之も着想は、舊思想の產物て、餘り小說らしい型にはまつて居るのが欠點である（選者評）

○子ごゝろ　本所　紅の花

『母樣。今日はお一人て嘸お淋しかつたてせうねえ。』今外から歸つて來た計りの光子は可愛らしいお下髪の



（選外）　埼玉　武井源喜知

首を曲げつゝ、病床の母の顏をのぞき込むだ。母といふのは三十歲餘りて、此樣な家には住むとも見えぬ程品の好い顏立てはあるが、長く病苦に惱むだ故か其の青白い頰はやつれて無造作な結髮の後毛が枕にかゝるのをうるささうに指もてかき上げながら『まア光や。遠い路を御苦勞だつたねえ。』と力のない聲で。『母樣今日はお好きな甘納豆を買つて來てよ。』と光子は甲斐々々しく傍の風呂敷包を開いて、小さくても情のみちた紙袋を取り出して母の枕下へと押しやつた。『光や。母樣はこう毎日ねて計り居るのだからもう決してお前こんな心配なんかお仕てないよ。』……世間の人は今月よ花よと浮かれ廻つて居る最中に晴衣一枚着せるてもなく、あたら可愛盛りを此のまゝ此のまづしい中で朽ちさすかと、足らぬ勝の母を恨む所でなく仕立上りの衣を屆けに行つた歸りに常から好む菓子まで

心づけて來た可愛い丶心をおもつては、さすがに涙のハラ〳〵と落つるのであつた。

『まア其れてもよく……氣がついてくれたねえ。』とそつと涙をふいて『でも光や。お前これを如何して買つて來たの？彼の仕立賃はもう戴いてあるのに。』

光子は胸にギツクりてたへて面をさつと紅に染めながらさしうつむいた。母はさては！と心づいて『え、如何したの？光！』聲は高くふるへた。

『母樣！私が惡う御座いました。』光子は悔の涙と共に床の上へと俯向した。『これ光！まアお前は……な……何故そんな心を出しました！いくら苦しいからといつても、母樣はたとへ死んでもそんな……人樣の品を……。』後は苦しげにせき入るのであつた。

『あら母樣！私……なんぼ苦しいからつて……人樣の品取るなんて……。』『それては如何……如何したのです。』『……母樣！かんにんして頂戴！母樣にことはらないて仕たのは惡かつたけれど……せめてお好きな品だけても買つて上げたいと思つて……一昨日の朝から市へ……花を賣りに……。』

『まア光！』とばかり。母は光子がしほらしい心に何とも答ふる言葉も無くて、其の小さな和な手をジツ！と握りしめたまゝ寢卷の袂をかみしめて、わつ！と計りにむせび上げたのであつた。

可憐な子ごゝろ、別に才氣あるでもなく正直に書いて居るだけだが、母が疑ひかける處など、此作者にしては、用意がある（選者評）

○淸き愛

金澤　高安梅子

村へ入つてから凡四五町計り行くと心地のいゝ松の繁みの中に建てられた尋常小學校がある。今、女兒三年の敎室に生徒を集めて敎壇から降りて机の前に立て居る一人の若き女敎師、脊のすらりとした品のいゝ姿、濃い前髮にくつきりと白い顏色其まなざしが眞に同情の深さうな如何にも人懷こい容顏である。生徒をずつと見渡した彼の眼は今にも涙が溢れ相てある。暫時は悲しさに頓には言葉もなかつたがやがて、

「皆さん、私は此度都合があつて遂々皆さんとお別れしなければならなくなりましたの、今迄三年の長い間毎日樂しくお稽古をして居たのに最う明日からは其れも出來ず皆さんの可愛いお咄しや唱歌も聞く事が出來ないのかと思ひますと眞にお別れがつらくつて……」

と後は言ひ得ないて、はら〳〵と熱き涙を落した。

彼は香取惠美子といつて去る地の富豪の令嬢てある

嘗て女學校に居つた頃は常に級の首席でもあり且如何にも同情の厚い優しい性であつたので敎師や友達の氣受けもよく學校の花と迄稱されて居たが十八の時に美事優等で卒業した、友達の中或は女子大學に或は何ととり〳〵に益學びの道を進み行くに引きかへて、彼は全く異つた方に思ひを走せたのである　それは小學敎師なのであつた、可愛ゆき小さき子等を集めて敎ふる事の如何に樂しくはた如何に美はしき尊き務なるかとは常に心頭より絕えず考へて居たので＝彼には博といつて許嫁の夫があつた、大學に修業中なので三年經なければ卒業しないのである、こんないゝ三年の時！神樣のお惠みであると迄に思つて是非兼ねての望みを實行せて下さいと切に兩親に願つたのである。母は「何卒那樣事は止めてお呉れそれよりは學校へ入學たら如何だへ」と大の不贊成であつたが、父は一風變つた人て「ナアに其れもよからう種々の經驗が出來ていゝだらう」と直に贊成したので母も厭々ながら承知したので彼は非常に喜んで直に人に知られぬ此田舍に同窓の友あるを幸として單身來たのであつた。

若に似氣なく生徒の一擧一動にも細心な注意を拂ひ些の不公平なく熱心に敎導し愛撫する樣は眞に慈愛に富める若き母である、生徒の敬慕する事は勿論其効果は著るしきものなので、親達は實に有難い先生いゝ先生と眞に喜んで居るのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

が遂に三年は經たのである歸國て樂しいホームを作るべき時が來たのである、兼てより其嬉しい時を待て居たのではあるが、愈々別れとなると悲しさのみが胸に一杯になるので、止度なく溢れ出づる淚を制へて生徒を見やれば、

「先生、何卒行かないで頂戴！」

「先生が行つておしまひなさると眞に私寂しくつて厭ですよネエ先生！」と呼んで居たが遂に聲を上げて泣き出したのである。

彼は得堪じと堅く半巾をかみしめるのであつたが雲時の後最と淋し氣に、

「何卒もう那樣事言はないで下さい堪りませんから、何卒ね私が行つた後は尙先生のお敎に從つていゝ方になつて下さいよ私は一番それが嬉いんですからね、必とてすよ、サアそれでは皆さん奇麗に顏を拭いてお別れに彼所へ行つて澤山遊びませうね」

やがて運動場から美妙なるオルガンに連れて無邪氣

なひ聲て、「今日は嬉しい日曜日みんなて仲よく遊びましやう・・・・・・・」と唱うのが手にとるやうに。

純潔の二字、外に評する迄もない（選者評）

○我力

愛知　柳橋いと子

「寶刀爰に血を洗ひ、名譽の榮冠戴きて、」と一群の小學生徒通りし後は、一入寂しき前津通を、話しつゝ行く二人の女學生がある。

「チットモ知らなかつたは、浪さんが如何して」「實はねえ、浪さんの御父樣が米相場に手を出しなすつたとかて、あんなに御金持だつた御家も、夫が爲に借金で首が廻らなくなつて」「エ、・・・・・あの方の家が、マア、それては浪さんも、モウ、學校へ行けないの」「エそうよ、其上御父樣も夫が本て御死去なすつて、今では片田舍へ引籠て、御母樣と二人きり暮して居らしやるつて事よ、本當に御氣の毒なわ浪さんね」時に聞ゆる暮の鐘の音。

あはれ、浪子の父は五十年の間、精力を盡して築き上た富も、朝日に向ふ霜柱よりも脆く、破壞して了つたのである。水野靜子と山村浪子とは同窓の友てあつた、されど意地惡き世は、遂に二人が親密なる交りを割いて、廣島へ靜子を送つたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今しも昇りし月は野中の一本松に懸れり、星は一面にダイヤモンドを散らしたかの樣、げに麗はしい靜かな晩である、此邊は山畑へ通ふ田圃道、日が暮れてよりは全く人通の絶える所である、さても不思議や、斯る人里離れし片山里に、忍びやかに打濕りつゝ語るものは誰あらう、浪子と靜子の二人てある。

「ねえ貴方そうなさいよ、私貴方と二人てスクールへ通へる樣に御父樣に御願ひするわ、イヽエ御父樣だつて許して下さるわ、ねえ浪さん」と親切籠りし言葉に浪子は、堪へやらで身を顫はせながら熱い涙を潸々と靜子の腕に濺ぎかけて「私は、私はスクールへ通ふのは・・・・・」「那樣にお厭なの」靜子はハタと胸を打たれた、自分が幾何の心盡も屆かずに了に成つたかと、悵然として天を望むと、折からの風は颯と彼が太息を吹き去つた、其人の心許ない行先を思つては又口を開くのである「浪さん貴方の御心は能く解つてよ、御母樣に離れたくないんてせう、ねえ、及ばずながら叔母樣も」「然うぢや無くつて、何も那麼譯て御斷りするのて

はないのよ、私は……」と少し躊躇た後「アゝ最う何も申しますまい、が静子さん貴方の御深切は一生忘れなくつてよ、御父様の羽振の良い内は毎日の様に出入して居た人も最う今ては蝕の道切、本當に現金過ぎる世の中に、こうして尋ねて下さるは貴方ばかり……」まぶしい許の感謝の色を面にみなぎらして、矢庭に縋り着いた、「夫てはどうあつても「はあ、只々私の心にあるは、自立自營許てす」其儘二人は辭もなくて互に手を握り緊めし儘石の如くに立竦んでゐるのである。

＊　＊　＊

其後彼の浪子は相變らず自立自營を口にして、きのふの身を替へ誠の神の犠牲として、よしなき浮世のたのしみを打棄てゝ、やさしき母の許に平和なる生活を續けた。

此趣向は嘗て本誌の小説にもあつたやうに思はれる併し此篇も文章は一通り出來て居ろし、兩女の熱情も能く發揮されて居る、今少し兩女の問答に波瀾あらしめたいと思ふ慾もある（選者評）

（選外）

山口　名護谷淳子



○雪の郵便局

越後　水野藤波

上

夜は明けぬ、降る雪と吹かれし雪もて途は埋もれし此處縣道に沿ひし八十戸許なる木崎の里。

今しも草鞋脚胖に身仕度せる十五六才の少年、歩む足もいと力なげに首うなだれて來りしが、茲もて閭へるさゝやかなる家にぞ入りぬ。

内には五十あまりの夫婦と榮吉とて今年八つの男兒の炬燵に暖りて居たりしが、今入り來れる少年を見て榮吉はいと哀れげに口の中にて、

「又榮次郎が郵便に刎ねられて來た」と座を立ちて手に持てる串柿を、己れは食べずに差し出し、
「これ榮次郎、お前に串柿呉れるから食べらさい」と
云へば父母は目に涙を宿し。
「榮吉やお前それを食べても宜いよ、榮次郎のはこゝにあるから！さア榮次郎上ッて火に暖れよ」とて、母は圍爐裏に柴折りかさねて火を點じぬ。
此家は親子五人の家内にて兄は去年の春征露に出て、殘れる老夫婦は二人の子供を相手に田畑を耕して兄の凱旋を待ちけるに、いたましや、加治川破堤して大洪水となり穀物は皆枯れ、流されて一粒の收穫もなく、今は漸く其日々々の細き煙をも立て兼ぬる慘狀なり。

下

平生ならば、人夫を雇ふに難かりし木崎の郵便局は、昨日今日頼みもせねど、朝未きより我先にと、寄せ來る村の農夫もて、人山は築かれぬ、今日は殊の外郵便物の多かりし爲め、抽籤の沙汰にも及ばずして、皆々橇に荷膳ふて駈け行きぬ。
十分程へて、榮吉は母に連れられ乍ら、郵便局の前を通りしが、俄に足を止めて局の內部を伺ひ、人のけはひなきを、見て、
「阿母、郵便は早や行つたんだらうか」
母はふりかへり乍ら、
「オヽ皆立つて終つたんだよ」
「阿母、宜かつたネ、榮次郎が籤に、刎ねられないで。」

都會に在るものは恐らく斯かる生活法ある事は知るまい、鄙の郵便局に農家の子弟が、爭つて配送夫に雇はれやうとし、多い時は抽籤で定めるなど、何と簡單なる制度ではあるまいか、而かも其間にも波瀾あり曲折ありて、家族の喜憂は一に此事にかゝると云ふ、好詩材、文の至らざるは問ふ處でない（選者評）

○歸れ父

群馬　林　廣子

我が日本に來り見よ富士の高峯と琵琶の海!!!と威勢よく歌ひ行く八ツ許りの男の子紺絣の對がらに編上げの靴をはいて鞄を肩から下げ生徒帽を戴いた見るから可愛しい坊樣、とある大きな一寸目立た一軒家出征軍士山崎賢と新しき表札のかゝッてある門をくゞつていそいそと彼方に母樣只今、オヤお歸り早いね今日は大そう元氣だねえ、折しも下女の玉やは坊樣御歸りなさいませ、アイヨ、妨や今日よいものが屆いたよ、何母樣早く見せて、まー何ですね足もとから鳥のたつように早く鞄を常の所へ置てからさ、あーそ

ーだつたねさー母様見せて頂戴、もー出來たかへいゝの、えー皆したの、そーそれてはと云ひて一雄の前に出したのは白金のしかも大阪の一葉の寫眞、オヤ御父様のだねアレそれから西村の小父様も一所に坊はうれしいな、と云ひて手から放さず、座敷中走け廻つて喜んで居る、それからもー一ツと今度は御手紙、そいてねお前にわかるやうにつて假名て書いて下すつたのだよそらね嬉しかろ、よー母様これにね先生や母様の云ふ事をきいて勉强なさいつてそれから委い事は母様におききつて、母様いつ頃お歸り成さるの、ねー、未だよくわからないけど來月の半頃だつて云ふお話だよアレ直だね母様坊は嬉いな其の時は皆てお迎いするんだね、あーそーだよ、あ、待ち遠い早く歸て頂戴ね父様と寫眞に向て云ふて居るのである。

ヤ坊は忘れて居たすつかり、え何をね、今日て御双紙が終になつた見て下さい、ドレお見せ、なほされたのがあるね、オヤまーこゝにはこんなにお◎がついてさ、まー甲上だねフーンそして「よく書けました」つて書かれたの、そー嬉しいねーと頭を撫てゝさながら己がものかの様に、まーお見事に書けましたねーと傍から下女が、さぞ御父様が御覽成さいましたらどれ程お喜びてしよー奥様とは優しい婆や、一雄の父は少佐とやらで昨年の五月に召集されて第三軍に參加し出征以來いたつて健で數度の會戰に部下を率ゐて勇戰し一度輕傷を蒙りしのみてあつた、一雄は當附屬小學校の尋常一年生、父賢はいと嚴格な人てあつて留守中の事等も一雄の事も呉々も妻雪子に托して勇しく出征の途についたのてある、て、雪子もなほより以上に朝夕敎訓を怠なかつた故か二學期の試驗には首尾よくも全甲と云ふ好生績で第一を占めたのてあつた、さー坊や今日の御褒美はこれですよとて密柑と金米糖を半紙の上に、坊や今日は風が大そう吹くからお家において、あー、よー母様それ何、これかいお父様の所へ上げる小包なの、そー坊はお手紙上げたいな、それてはお書きなさい、あーおやみてね、あい見て上げますよ、文はさの如く、

「おとーさまおしやしんとおふみをありがとー坊はたつしやで毎日べんきよーして居ますごあんしんして下さいそして早くおかへり下さい

坊より

おとーさまへ

これていゝの　あーいゝ〳〵上手に出來ましたお喜びだろーよ坊や、さーすつかり出來ましたよ、奥様ては投して參りましよー、あーそれては氣の毒だけどね、いゝ

え參ります、よー母樣玉やと一所に行てい丶てしよね母樣ッ、あー宜しい、玉や、あー云ふから一所にね、はーッ宜しうございます、さ玉や行てこー風の子だもの寒かないや、ね玉、えーえそーですともね勢の好い坊樣オホホ丶、丶母樣行て參ります、奧樣では一寸、あいよお願ひ申しますよ、一雄は門を出るや否や、四面海もて圍まれし我が敷島の秋津島と聲はり上げて歌ひ行くよ。よー婆や御姑樣や御父樣(賢)におめにかけたいねー、へーそーでございますよ、さすがは軍人の御子樣だけあつてお強い事でございなすと兩の眼には何ものか光て居つた。

少しく、だら／＼と書きのばし過ぎて、締りの無いのは欠點であらう、着想は無論新しくない只坊やの一擧一動は首尾相應じて活躍し、出征軍人のある家などでは、讀んでホロリとするであらう(選者評)

▲更に應募圖畫に就て

前々號で應募圖畫の過大に失しそふなのを注意しました、其時の最優賞か二寸の三寸の巨大で入選して、却て應募者に惡例を示した傾があろふが、これは嘗て本誌に規定された寸法で詰まり改正前の規則である爲、その技量に對する愛惜の念と一種の同情がこれを排し得なかつた、これで應募者の反省を促し得ないて、もしこの傾向が止まない場合は、選者の不本意は如何ばかりでありましよう、今不快を忍んでこふ云ふ告の掲出を止むなくするのは、諸君からも許して頂ける事でしよう、石見國那賀郡千代延芳子君の『春日和』が二寸三分の三寸で既に入賞の價があつた、下野國足利郡長谷川夏子君の『海』は二寸壹分の二寸七分、大阪市北區上福島田中とも子君の『少女』は紙質厚きに失す、共に賞外の佳作であつて何れも沒了の遺憾を悲しむのであります。(古洞生)

○懸賞『新歌謠』募集

「咲いた櫻になぜ駒つなぐ、駒が勇めば花が散る」は何時に誰がうたひ初めたか知らぬが、今猶ほ人口に膾炙して詩味捨て難いものがある、俚歌童謠の類に我等を感服せしむる名作ある事は、往々見る處で、中には野卑淫奔な作もある爲に、俗謠として一概に排斥されるが、歌ふ處さへ高ければ決して捨てたものでない、記者玆に感ずる處あつて清く新しき新歌謠を讀者諸嬢に募る、形は右の咲いた櫻式でもよろしい、別に新工夫があれば猶ほよろしい、從來の都々逸や端唄を離れて別に一個の新詩國を拓きたいと思ひます、大體の規則を左の通り定めます。

▲懸賞方法は新體詩和歌俳句などゝ同じこと▲必ず半紙に認めること▲一人三首以下に限る▲新歌謠と書き添へるのを忘れないこと▲紙上の雅名匿名は凡て自由のこと等。

六月　女子文壇社編輯局



消息文

文學士沼波瓊音先生選

（入）

○病める友に

京都　濱部郭公女

武さん御病氣は如何？少しはよく成つて？私も一度御見舞に行きたいのだけれど試驗が有つたり又卒業式の準備などで眼の廻る程多忙しいのでね、堪忍して頂戴よ、けれど私は武さんの病氣が心配でたまらないの、昔から「病は氣から」と云つて、自分の氣の持ち樣で輕くも成り重くも成るんですからテ、氣を確かに持つて決して病氣に負けちやいけなくつてよ、私は病氣の武さんに斯樣な事云ふのは實につらいのだけれど……：武さん落膽しちやいけないことよ、人間は如何な豪傑でも學者でも身體が惡いと何にもならないのですからね、先生が先達も仰有るのよ、先生のお友達に非常に學問の能くお出來成さる方がお有りなすつて大學も一番で卒業なすたのですつてね、其れにどうです武さん、卒業するなり間も無く死んでしまつたのだつてね、是を思へば一年や二年、卒業が後れたつて何んでも無いわ、一年後れたら一年長く生きたらい、のですものね、だから決して落膽すべきではありませんよ、また武さんは何も學問が出來なくつて落第したのじや無いのですもの、今日も學校で橋本さんだの中村さんだの皆さんと武さんの話をしてお氣の毒だつて云つたのよ、そして少し隙が出來たら皆さんも御見舞に行くつて云ていらしてよ、私も手が隙き次第行きますからね、今日は又これから學校へ行かなければならないから、これて失禮します、呉々も心を痛め無い樣に而して暖かくしてね……さよなら。

（評）眞率にして、誠あり、情あり。

○菫に添へて

陸前　尾形千代子

今朝、貴宅の八重さんと正坊として摘んだ菫の花を、妾が弟から貰つて、仕やうことなしの手ずさびにこの通り花束をつくりました。

丁度七年ばかり前でござんしたね、あなたと私とが矢張あの野で菫を摘んだのは——覺えて居らつしやるでせう、そら妾のが美くしい、僕のが多いつて言張つて、散々爭つた揚句、とう〱妾が泣いて、あなたが謝まつて——、ほほゝゝいゝゝ又二人で花束を拵へて遊んだ

ことを。ほんに無邪氣でムいましたのね、思へば夢の樣な心地がしますわ。

そんなことを思ひ出して過ぎた昔が懐かしくなつたものですから、つひこの花束を――。八重ちやんにも見せて頂戴、左樣なら。

○親しき友に

神田　太田奬子

何處も何處もおしなべて、空に飜る五月幟の音、いと喜ばしく候。

まして今年は、弟健の初幟の事なれば、母上も一入の御骨折にて、上ぐるやら下ぐるやらの、毎日の混雜、それも家內總出の事とて、左程苦にも無之、妹共の健ちやんばかり大祝ひしてと、幼心にも愚痴こぼすをかしさ。誠に女は、割の惡きものに候。

昨日も、七歲になる衣子の、健と爭ひ致したりとて、妾が側に泣き來りて、何故御母さんは、私共を可愛がらないのでせうかと、涙ぐみたる聲して訴へしを、種々となだめすかして、漸く母の側に連れ來り、傍にありし健をば、いたく誡めたりしに、妹も母の心に感じ申しか、それよりは二人共睦まじく、遊び居り候。

妾が病氣も、いよ〳〵薄らぎて、今日はなにくれと、いそがはしく、花に明け花に暮るゝ此頃を、先は御便りなと承はりたく、暫しの暇ぬすんで、かくは書き連ね候。

○弟へ

北見　高橋淡水子

おゝ今もまた御手紙下され、幾度となく繰り返しお耳の遠き母樣に聞かせ申し候、御筆蹟の立派なこと、末子さんも見てお賞め下され候、なほおこたりなく御勉强下され度候、さて母上樣には今年も歲を一つ重ね申し候へ共、別條なく妾も妹も平和に暮らし居り候、夫れにつけても父上樣は、何處に正月を迎へらるゝかと思へばまた涙の種、斯く思ひ浮べては、お正月もかるた取りも面白からず候、御許には如何に思ぼし召さるゝぞ妹こそは何んの苦もなくしておひな飾りに餘念なく候、今日は父上樣の命日六日にて候、こゝ離れ小島の事とて、何事も便り少なきほんの田舍にて候へば、樂しきこととてもなく、日々髮を振りみだし母樣と同じう働らき居り候、されど女の働き故思はしからず、涙を呑むこと幾度も有之候、希くは一日も早く御出世なされ妾に御手傳ひ下さるを將來の樂しみとしてひとり心を慰め居り候かしこ。

○病院より友の許に

福島　高澤愁子

君よ、病のために懐かしき熱鹽の山川と、袂を別ちし

は去にし冬の中ばにて候ひしが、早くもタイムの小車は廻り廻りて、心長閑けき春とは相成申候。さり乍ら妾の病は日に月に重りゆきて、一日も春心地はなく、此上は一大決心を以て切断を行ふの外他に途なしと醫師も申され候まゝ、言葉に隨ひて、今日の午後一時には、白き布に包まれ、藥臭き施術臺上に於てあはれ命と病との戰に御座候。

若しも不幸にして妾の魂の緒が、其儘絕え果て候はゞいわけなき弟を不愍と思召し、幾重にも御敎養の程願上候。

尙申上度ことはみ空の星に似て、數つきず候へども、殊の外痛さ募り心も亂れて候まゝ、これにて筆止め申べく候。

最早卒業試驗にも間近きことと故、皆々樣には行末のことなど語り合ひて、學びの道にいそしみ居り候ことゝ存候。あはれ妾とても病なくば此三月にはと羨ましく存じ候。

机（選外）　下谷　井上つれ子

○妹の誕生日に友を招く

無名氏

妹花子の代筆で御座います。

金魚の姉樣（何時かあなたが金魚の唱歌を敎へておやりなすつたからてせうよ）、明日は私の誕生日てす、キツトキツト被入て下さい、金魚の姉樣だ被入なければ、花ちやん嫌よ、花ちやん金魚の姉樣と合奏するの、だから金魚の姉樣ヴァイオリンを持つて來て頂戴、福引の時にはね金魚の姉樣が御好な薔薇の簪があたる樣に今から八幡樣へ御參りするのよ、御父樣はね、琵琶に合せて、何だか歌を唄うんですと、キツト眼を明けたり、つむつたり、眉を上げたり下げたりして、大きい聲をお出しなさるわ、それから忘れて居てよ、其時にはね、花さんが演說するのよ、手をたゝいて下さい、八幡樣の神主樣のやうな宜い大きい音をさせて、さやうなら。



○里より京に

久留米　彌吉和歌子

戀しき君と去年行く秋の小萩の岡に袖を分ちてより、淋しき枕を抱きて泣くになれたる此頃、又もや君を小萩の岡に忍ぶ、慕はしの都の空や、何時の日か暖き君の御手取りて歌はん、此の小萩の一片、何とか君の心に通ひ申さん。

京より里に

情こもる美しの玉章、幾度となくくりかへし〱袖し

ぼり候、さりとても御身恙なきとか、嬉しく存じ候、まして小萩の花片、故郷の秋を忍べとの下心にや、今更野邊の様など心に浮びて、夢と過しゝ事ども懐しさのあまり、一夜花片を抱きて君の名をくりかへし申候。

行く秋を故郷戀し萩抱きて
君の情けに一夜を泣きぬ

里より京に

君の情けのしみ〳〵胸にひゞきて候、都も秋は淋しとか、まして慈愛深き父母様や愛らしの妹子を里にのこし給へる御身なれば、人情の常と御察し申候、さりとて御身にして若し病み給はんには、父母様の御嘆きいかばかりかと存じ候へば、心づよく一日も早う卒業しての御歸郷こそ願上候へ。

京より里に

天高くして殘月淡きあした、芭蕉葉吹く風の冷さ夕べ、黄菊に慕ひよる小蝶を眺めては、空行く雁ねの聲聞きては、只君や里の有様しのばれて候、御心づくしの情ある言の葉身にしみて、一日も早く共に手とりて小萩の岡に過去を語らんと、君住ます空を眺めつゝ此の繪端書送り申候。

里より京に

美しの繪端書一組、日比谷公園の夕陽、品川海濱の曉景、嵐山の紅葉、團子坂の白菊、吉野の秋風、武藏野の月夜、都の秋の風趣目のあたりに見る心地せられて、静子の君や須磨子の君二三人と集りて、君の噂に一夜を更し申候、此の松茸心ばかりには候へども、故郷の名物と味ひ給はゞ、嬉しさ此上もなく候。

○都なる姉君のみ許に

下野　早苗子

戀しいなつかしいお姉様、今宵の月の冴えてをりますこと、矢張り姉様の御書齋にも、此通りに微笑んでゐませう、けれど、北に三十里を隔てた故郷に、ひくい丸窓の下て月の光りを便りとして拙き筆を走らする私の様子はうつして下さらないでせう。

待ちに待つた姉様のお歸りもあと九日、私ほんとうにうれしくつて、まいにち日數許りかぞへて居ると、皆に笑はれてゐます、だつて待ち遠しいのですもの、仕方がありませんわ、ねえお姉様。

お着きの日には秀子をつれて停車場までおむかへに出ますよ、滊車が着いて、お互に顔見合せた時、まあどんなに嬉しいでせうと、何時も獨の時にはこんな事を考へて、笑つて居ますのよ、オゝそれから其時ね、人込みの中で、少しも早く逢はれますやうに、私あの、お好なお庭の山茶花を目じるしに手折つて、行くつもりです、花も姉様のことなら、きつと、よろこぶでせう、今から言ひ聞かせておきます。

お姉様、プラットホームにお立ちなさつた時、高く捧げた濃紅の花が、御目に止まつたならば……、お忘

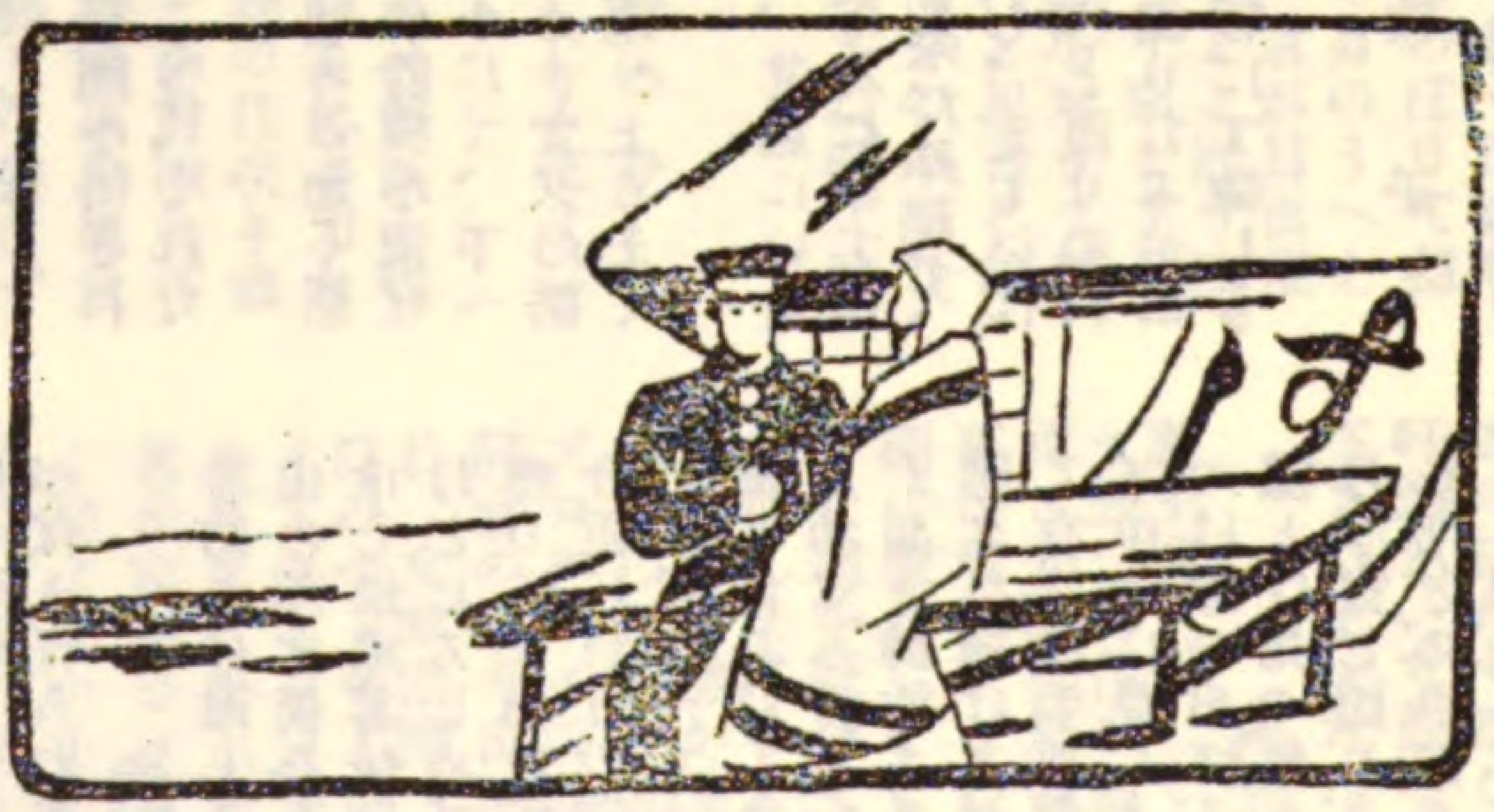
れ給はぬやう、筆につくせぬ心の中は、よろしくお察し下さい、お月様もそろ〳〵曇り初めました、先づは之にて、さやうなら。

○病院なる母の許へ

越後　小柳滿玖女

母様おなつかしうございます、彌彦山へ雪が來てから、一時に寒くなりましたね、けれ共お手紙にて承れば、大分お氣分は宜しいとの事なれば、院長様の許しを受けて、夷講には一先づ、歸宅なすつて下さい、庭の山茶花は、早や散りかゝりましたけれ共、お好きな菊は、今盛りであります、ほんとに母様月日は早いものですね、母様が日記帳に、さも愉快らしく、七月十日、始めて蟬の聲聞くと、お書きなされたのは、つひ此頃の様に思ひますが、早我里では十一月十六日に霰を見ました、母様が入院なすつてから、もう五ケ月になりますね、どうかお顔を見せに來て下さい、障子も張かへましたし、疊も敷きかへましたから、當日には妾が必ず蒸滊場へ出て、一分千秋の思してお待ち受け申します、かしこ。

凱旋（選外）　三島　村上よし子



○田舎に病を養へる友へ（都より）

伊賀　木津君子

さても、梅のほゝ笑み、いぢらしの春告鳥、世はいよ〳〵面白う相成候。御許様、御病狀如何に候や、藥の香高き一室の御籠城今更しみ〴〵察し上げ申候。

千代子様、三重子様、日毎御機嫌麗はしう、花に月に、御誘ひ給はり候事の、常ならば、飛び立つばかり心嬉しう候はんも、戀しき御許様に別れ候てより、さながら花の都さへ冬枯のそれにも似て、實にうら淋しさを身一つに、終日、家にうつら〳〵過し居り候。

去年の今頃、御許様と手を携へて、此處かしことさまよひ候折の、そゞろ戀しく、なつかしく候て、過ぎし昔の忘れ難う、懇ひに、獨り淋しく行かんよりは、なつかしの御玉草、しげ〳〵拜し候方、こよなう嬉しく候、さても〳〵、繰返し〳〵、拜し參らせ候程に、花見るよりも、胸、心、寛ぎ申候。

此の花、宿の露子様より、梅見の土産にと、賜はり候まゝ、御目にかけ候。御栞になし給はらば、如何に嬉しう候はん。

かへす〴〵も、御身いたはらせ給へや。かしこ。

○摘草に誘ふ

京都　鴨撫子

昨日參り候ふ、妹の話にては、彼の神樂岡のほとり、吉田街道の傍などは、最早、菜の花黄なると麥の青きと相交りて、美しさ云はむ方なく、さながらに大和錦を敷き結めし如く、畔には、菫、蒲公英、偖ては、蓮華草、土筆など、今を盛りと、咲き揃ひて、あまりの、美しさに、手のつけ樣もなき程にて、暫しの間に、君が賜はりし、麥藁細工の籠に、一ばい摘み歸りしが、又今朝も參り候や姿は見えず候、今日は空も晴れ渡り、いと暖かにて、實に春の中の春の日にて候へば、それ幸に、ひる過ぎより、彼の廣き〳〵

野原にて、花に止まれる蝶を追ひ、空にさへづる雲雀に唱歌の聲和して摘み草するも、氣晴れて、又愉快なる事と存ぜられ候、君にも如何に候や、斯く終日書齋にのみ、こもり給ひては、御身の健康をも害し候はん。是非共今日は御同行願ひ度、いなみ給ひては、決して〳〵親友とは申すまじく候、

○都なる友の許に

遠江　土屋まつえ

今更申上るにはこれなく候へども、遠く山川を隔てゝ朝夕拜顏を得ざれば、只癡の便りを待つのみにて、御書狀給はりし程嬉しきことは、これなく候。

とりわけ此度は、卒業式の御有樣、さながら妾もその場に臨める如く惑ぜられ、中にも維新前の參勤交代にて、諸大名の道中行列の餘興を演ぜられしとやら、そろひの軲ふみしめて、傘の槍ハタキの大小にて、下へ下への警蹕の聲いと高らかになど讀むからにいと面白く、オルガンの獨奏、または又餘興などのところによみいたれば、身も心も躍り上るまで面白く思はれ候。

都には、見るもの聞くもの、皆珍らしく且つ面白しとやら、其處にいませる御身こそ、いとうらやましく存候へ、妾よりは、御耳に入れ申す程の新しきことはなけれど朝とく起き出でゝ、雨戸押開けば日未だ昇らず、井通川の畔は濃霞深く閉して、二三の茅屋其間に隱顯出沒し、えもいはれぬ趣あり、あまりの詩的に、妾は步むともなく、中の橋にと至りぬれば、傍なる林の中にて、はづかしげに、未だ春なれぬ鶯の囀りたるが二聲三聲啼き候ひぬ、これが妾には初音にこれあり候、餘は後にて御しらせ申すべく、筆をとゞめ候。

○都へ轉任せし師の許に

小枝子

いとも御なつかしき師の君よ昨日今日いかにおはしますにか定めし都の敎子をいよゝ文の林にみちびかせ給ふらん、實に御うらやましきは御校生徒よ幸なきは當校生徒よ去る三十一日かの停車場にて露けき袖を分ち參らせし折は恰も嬰兒の母に別れし如く終日泣き暮しつばさなき身をかこち空行く鳥の後影ながめて涙にむせび申候さて御在校中はかく不肖のものをもつゆ御厭ひなく黃金とくる夏の日も木枯ふき荒ぶ冬の日もたちれの君にも勝る御はぐゝみに預りし御恩の程北に聳ゆる芙蓉の峯よりもいや高く千尋の海よりもいや深く、あゝ此厚き御情深き御惠いかにして報い奉らん今日よりは只々御敎の節々を固く守りて御恩の萬が一にもむくゆべく朝な夕な學の道にいそしみ候猶々此の後も昔に替らせられず御敎訓の水垂給はりなば此上なう嬉しう存し候未だ御寒さもきびしければ一入御身體御大切になしますく〳〵御敎育の道に御心注がせ給へかしまづはまはらぬ筆もて御禮のみあなかしこ。

○友におくる

備中　佐藤芳子

冬枯れの淋しき時に高根に見えし白雪もいつしか消えさりて影もなく野山の草木笑みを含み籬の内なる黃鳥も今はとばかりに囀づる時候と相成申し候處其後御許さまにはいかゞわたらせられ候や心には露忘りの候はれどしろしめすが如く父母の許をはなれてよりは只何くれとなくわくれ勝ちにて思ひの外の御無音仕りいかばかりかなめげ者と思し召すらんと今更に自分の罪の深きに驚き入り申し候あはれ御したはしき君樣よ今までの罪は行く水ゝ流しやり玉ひて末長く御交誼を賜り度候さるにても君樣にはみけしきさたん〳〵しう文の林に進ませ玉ひ最早御希望もほと〳〵成功せられし御事と御喜び申し上げまゐらせ候かれてより才媛の御聞え高き御許さまにおはしませばさぞかしよろづの道に御上達遊ばされ御芳名を擧げさせられ玉ふも近き内にあらせらるゝ御事といと〳〵御羨しく存じ候妾事當地にまゐり候てより日尙ほ淺く土地の情況も詳しく存じ不申殊に親しき友とては一人も之無きしだい雨の降るにつけ風の吹くにつけ思ひ出さるゝは親しき友垣と故鄉の事のみに御座候思ひかへせば君樣とは先つ年までは同じ學びの窓に手を引きて或る時は花を愛で或時は月を賞し嬉しき事は共に喜び悲しき事は共に泣き一日の別れをさへ惜みしほどの中が今は各自の目的異れりとはいへ東西に別れ海山數十里を隔てゝ相逢ふ事は中々に只々折り〳〵の御便こそ嬉れしき限りに存じ候尙申し述べたき事は濱の眞砂の數つきず候へども餘り長く相成り候へば餘は又後の便りとて書き殘しまゐらせ候かしこ。

○久しく絕えて消息せざる友に

名古屋　栗田ことゝ子

君が優しきみ言葉に慰められ、せめての心やりと致し居り候ひしに、近

頃はいかにみ心かはらせられしか打絶えて御文も給はらず、こなたよりの御いらへだに之れ無きは、明暮君なしのぶ我が身の、幸なきを歎くわらはにはいかばかり恨めしう候ぞ、よも病みていますにはあるまじ、いつぞや君が御宅を訪れし時御母君に殊の外すこやかに渡らせらるゝと承り候、されば都の美しき姫君達と交はらせらるゝ君には、かゝるいやしきわらはの事は最早忘れ給ひしならん、春は花の下に、秋は月の宴に袖をつらね、何事も君ならではと、水と魚との交せし友なるを、わらははいかで忘るべき、あはれ同じ學びやに敎草つみし頃、共に都にのぼりて益勵まんと、樂しみ居たりしは夢となり、今はかくあはれなる身のうへとは成り申候、たゞ何事も運命とあきらめんとは思ひ候へ共、君が目出度き門出を見送り候時、わらはも昔の我ならばとて、涙も盡きよと計り泣きし涙の未だかれざるに、やがて君が故郷に錦を飾りてかへり來ますかと思へば、わらはの胸ははりさけん計りに候、この悲しさも君をおきては慰めらるゝ友もなき此の身、御察し給はり度候、君よあはれと思召し給はゞ、學びの御ひまの折々には御文も給はり度、昔の御交はりのみ願ひ上げ候、筆末ながら日に〳〵増し行くこの寒さに、風などめさぬ様、御身いたはらせ給へやかしこ。

○病める友に（二號、嶺子様の返し）

深川　松永かつみ

美はしき御筆の跡、なつかしく拜し上候、まことや月の冴えたる夜は、悲しきにも、嬉しきにも、少なからず心動き申候。

嶺子の君よ、世は無常にて候よ、清き少女をなどかくは苦しめ候かと恨めしくこそ、御前様の御病氣、つひぞ怠る様も見えずとや、されど力な落し給ひぞ、肺の病とて不治と申すには、之なく候へば、春の花咲き蝶舞ひ候はん頃には、樂しかりし野邊に、またも手を携へて、御前様の巧なる水彩畫の寫生も、見られ候はん、常より負けぬ氣のお前様の御氣性に似もやらで、いと情なき事のみ、仰らるゝは、餘りに心弱くは候はずや、かくては肺の病にも笑はれ申すべく候、日頃のお手並顯はされて、病にも勝たんと御心大きう持ち給へかし、妾も御目もじ致したく心のみはやれど何やかや貧乏暇なしにて、勝手の用にのみ追はれ候まゝ、とにかく同窓會員の寫眞、御見舞にと差上候、何れ近日御伺致し、つもるお話もお耳に入れもし、お藥のお世話など致し候はん、寒の折から隨分御養生遊ばされ度、ひたぶるに願上候、失禮の事のみ申上げ候罪は、赦し給ひてよ、餘は其折にかしこ。

○なづ菜にそへて

熊本　湖畔

此純白のちさい花、此やさしげな妙な菜！

あなたの美しい御心にふれて〳〵少しも早く圖案化せられよみえ様の若い幼いみ手の内にペン〳〵コトカイナの樂を奏していたゞけよまたおち様の夜のお膳に一色そへよとてお送りします、

あの綾川て洗ひ清めて。

吁柔かい寸餘の此菜！詩もあり美もあり樂もありますすがさんすてゝは下さいますな!!!。

○茶話會の知らせ

大阪　今出溪花

嶺子様、久しく御無沙汰致しましたさぞかし御立腹だらうと存じ、謹んで茲に御侘び致します

扨て光陰は矢の如しの例に漏れず、貴姉と逍遙しました十三の堤畔に、再び昔其まゝの花が咲きました、妾は閑さへあれば堤に上りまして、緑の褥に座し、そして潺湲たる逝水の音に往時を忍びて沈吟するのですよ、早く業を終へて歸つて頂戴なそれから本月四日の日曜を利用して茶話會を催しますのよ、ホラ例の本誌愛讀會の連中十三名で！

此日山中様からイーチンク倶樂部と合併する様許して呉れとの事で承諾しましたから定めし賑やかなことであらうと思ひます。

プログラムに記された事項は左の通りです。

開會の辭今出溪花、本會の隆盛と女子文壇、山口やす子、茶話、岡島かれ、文章朗讀、松岡秀子、新體詩朗吟、吉村しげ、愛讀會歌吟手、西口みつ、ヴアイオリン、香山靜枝、（新入會員）、これて茶話會は終りてイーチンク倶樂部々長自慢の洋食三皿づゝを共に食しまして餘興に移るのです、手品光岡ふじ、離れ小島の獨吟三浦よし子、經歷談、木下慶子、其他家族合せ源氏歌留多、編物競爭、劇、馬盜人、會員總出、等です、早く聞きたいのは、慶子様の經歷談であります。

あの可愛らしい口からどんな奇な劇が演ぜられるてせうね、妾は最後劇中の馬盜甲吉に役割が定まりましたので、言語と風體とに困つて居るのですよ、何しろ具體的所作事は初めてですからね。

貴姉も一句御投書ください、いづれ寫眞を送ります故其時にてもよろしいからね。

此梅の花片は牧岡の産、永く姉が愛書の枝折とし給はゞ幸甚の至りです、先は茶話會御知らせ迄。早々。

抒情文



文學士沼波瓊音先生選

地

○離れ小島

離れ小島にて　稜子

「先生樣もう御寐みなさいませ！」
「ハイ何うぞ爺樣先に寐んで下さい。」
物寂しい離れ小島の夜は更けて、風の音、浪の音、磯馴松にざんざとよせる海の聲も眠む氣を催す樣、何處の濱の子が調べるのか、一笛の悲曲が風にもつれて絶えて續いて、又幽に流れるので……。
現なの思ひ湧くとしもなき窓の下、貝皿の燈小暗き机に凭つて、せめてもの慰藉にと都なる靜枝樣への筆取りながら、暫は頰杖の儘、深い〳〵冥想の擒となつたが、其れにしても島の夜の寂しいこと。
戀しい懷しい靜枝樣、今頃何うしてお居てなさるだらうか、今宵あたりもしや例の紫檀のみ机に、妾へ下さるお玉章でも認めてお居てなさるのではあるまいか、春だと言へば柳櫻をこきまぜた向島の花見から小金井の櫻狩、定めて面白くお興じなさるだらう、其れに引き更へ離れ小島の、春とは言へど、桃や櫻があるでなし朝晩目に入るものは青い空と靑い水、何方を向いても海許りの、内地から南に百四十里と言へば、雁の往來も覺束ないやうな……噫、何うして再びあのお座敷で、歌留多讀む事や、琴とバイオリンの合奏が出來やうか。
懷しき靜枝樣參らす、離れ小島にて稜子と書き終へた儘、筆を下にさて包まんとすれど包みかねた心の淋しさ、胸に手を置いた默想の霎時を、搖ぐ灯火に煤煙が渦を卷いた。
運命、妾は其う諦めて居る、此樣左遷同樣な島の教師の境遇が誠淋しく心細いとは言へ、霞引く海路の末に樂しい島の啼音も聞え、巖に壺菫も匂へば、胡蝶も來る、まして島の人には神樣の如く尊ばれ、兒童からは聖母の如く慕はれるものを……と其所へ氣がつくと、妾はわが冥想の怪しかりしに驚いて、最柔順に又敬虔に神に祈禱を上げた。
島の夜は一しほ更けて、笛の音も梢に遠ざかつた。
嗚呼もう何を思はう、春が短いとて花が咲かないとて身は神の思召に從ひて教育の職に殉ずるだもの、立つ

て窓を明くれば、月なき空は紺青に闇を含んで、夜霧立罩めた海は靜な眠に入つた樣、笛の響もいつしか絶えて、綿を投げた樣な片れ雲が北へ〳〵と。

雲の行末の戀しさを忘れん爲、そと床なるバイオリン取りあげて、つきぬ思を四つの緒にこめ、妾は離れ小島の一曲を奏したのである。

（評）淳朴なる島人と幽寂なる風光とを友として、神聖なる敎職に從ふ幸者の境遇、寧ろ羨むべき哉。

人

○菫

陸中江刺郡野手崎　菊池はせ子

滾々として流るゝ小川の辭りに、淸崇の姿を寫して直生せる一本の菫あり。五葉の色の美はしく圓ろかなる蕾、恥らふが如く、昨夜の露を宿して、たゆたふ風情の見えけり。

朝とはなりぬ、眩ゆき七彩の征矢を射初めて花の色も一入まさりぬ。翩々と舞ひくる白蝶は麗はしき菫の形を認め、嬉しげに寄り添ふ、あゝ美しき菫の君よ、其姿、其色、凡て傾城の美なるよ、吾と共に春の女神の裳に觸れて、暫し遊び賜はずや。

菫は打ほゝゑみて、其は難有し、胡蝶の君よ、妾は君を待ち詫びてありき、願はくは行末長く春の野邊に君と語らひ、樂しく遊ばんと答へぬ。

軟風若草の面を吹き渡り、靜かに菫の袂をゆすぶり胡蝶の鬢をなぶる、胡蝶の面白しと舞へば、菫はふし妙なる琴をしらべぬ、暫し時の移るを知らざりしが日の西山に傾くに心付き、明日の契りを罩めて、胡蝶は別れぬ。

夜は明けぬ、菫は亂れたる花瓣をつくろはんとて水鏡に姿を寫せば、こはいかに、昨日の姿の跡はなく、醜く色あせ萎れはてたる、花の顏容、菫は驚き、且つ、歎きぬ、されど愛情深き胡蝶の來なばまた慰みもやせんと、はふり落つる涙を押へ遠近を見渡せば、あな嫉しや、つれなくも胡蝶は彼方の蒲公英に戯れ此方には見向きもせず。菫は泣けり、かくて口吟せり、

僞のある世と知らで賴みてし
おのが誠ぞ悔しかりける

小川の水は潺々として流れ行けり。

（評）輕浮なる戀を罵り得て、痛快。



辻占賣（選外）　芝區柴崎しづ子

秀逸

○子守唄

鳥取　上山千重子

暮れて行く彩雲のあたり、沈む夕日のかげに、何とな う亡き父上のおもかげほの見ゆる心地して、つめたき柴のあみ戸に獨り、只ひとり佇みし時、そも誰が家の御父君かや、櫻のごとはゑある頬の、小羊のごと優さしきまなざしの、それよ可愛ゆきお子脊負ひまして、夕べの空を行きつ戻りつ、色濃き御髭に埋れし口よりは、おぼつかなの子守唄ぞ洩るゝ。あやしといへば淋しきうたの響と、折々ほとつきたまふ息の太さ。あゝされど妾はそが何故かはしらず、只やさしげなる他所の叔父樣とばかり、御姿のそゞろなづかしく、甘き情にうるほふ脊の御子のうらやましうて、さてはわが父上の一しほ慕はれて、小さき胸は千々に亂れ初めぬ。げに幸なき身よ、戀しや父上！あはれ今一度相見ん術もがな、やゝ丈けながの此の黒髮を、大人ぶりしと稱へたまはずや、父上よいかに、御影なりとも示したまひてよ。

「かの世を遠しと人こそいはめ、心の通はぬ里はあらじを」

小聲に讃美歌誦して、さて妾は戸がくれに泣きぬ。明る夕も其次も、うするゝ方にたゞずめば、例の叔父樣悲しき聲に、脊の子あやなしつゝ、唄うたひて行きかひたまふ。怪しみて人に問へば、さるべき役所に通はせ給ふ某の君、先つ頃奥樣失ひたまひてと鼻うちかみぬ。さては福祉ある君と思ひしも、形見のお子か、叔父樣もまた幸薄かりき。あはれ天にいます人の子の父よ、母よ、かなしき唄をしろし召すや否、あゝあのちぎれ雲、この唄の聲をのせていづくに行くか西へ／＼……と。

（評）悲しき子守唄をきくもの哉。

○君が影

豐前　清水南溪女

春まだ淺き一夜ぬば玉の夢路ふかくたどりぬるに森の下陰をなき友の御後姿によく似たる人の彼方に行くを見ぬ、急ぎ聲かけむとする折しも、目は覺めぬ。

あゝいかばかり口惜かりけむ、かゝる折こそ日頃好める海の景色に氣を晴らさむものと、磯に出てつ。

弓手の方に中國の山々は遠くうす墨にゑがゝれつ、海の香高くたゞよひて、寄せては返す波は曙の光りを受けて、ほの／＼と白み渡れり。

忽ち我名を呼ぶ聲きこえぬ、再びかすかに聞えぬ。

あゝそはなつかしき亡き君の御聲なりしよ、見返れば

夢に見し時とは變りて、御姿いと明らかになづかしの友は立ちませり、聲かけむとすれば感きはまりて聲出てず、かの紅葉の如き手握らむとすれど、亦心にまかせず、あせるうちに、おぼろ〳〵に御姿は霧のまぎれに隱れ給ひぬ、あゝなづかしの君はなほ叫ぶ哀の我を見ずてゝ消え失せ給ひぬ、それよりぞ、朝毎に磯に出てゝは、その折の御姿を思ひて、涙に泗びつゝ君の名を呼びぬ、されど答ふるものは渚に寄する浪の音のみ、君は打ちよする波と共にや來りまさむ、磯吹く風にやのりて見え給ふらむと、たのみ難き事をたのみて、哀れ苦樂を共にと誓ひしわれの呼ぶ聲もしわがれて出でずなるまで、君を呼べど遠き天つ御空には聞え給はぬにや、なほ波のひゞきのみぞ高き。

あゝ波よ、汝の立ちかへる折に、君をこひつゝ血になくわれが、雨ふりしきり、風ふきすさぶ日も絶えず磯邊に立ち出てゝ、天にいのり地に願ひ、君をまつと傳へてよ、いかで再びなれの磯によする時、なづかしの君の御手とりて誘ひまゐらせてよ。

（評）亡き友戀ふる多くの文中嶄然として頭角を拔けるもの。

○鐘の響

大和　田村霞江

曉の鐘聲、紫の霧を劈きて餘韻ゆるうひゞきて、わが夢は破れたり。あゝそれの音——思出ての音に、わが小さき胸のいたく躍りつ、亂れつ、紊れ迷ひて遂に柴の扃を押して、星の晨を楊枝銜へしまゝ、安藝寺の境庭に歩を移しぬ。

そは昔の友なる姫君の偲ばれてなり。

しら樫老杉、欝蒼として繁り、洵に俗塵を離れて幽寂たる淨地に、珍らしき笛の音を響かしゝ姫君今何處ぞ、安藝寺の庫裡に菰かづける鐘つく翁と、馴れて人怖づることなき、あゝかの君の心は純潔なりき。思へど今は其君を見ず。

《姫は都のさる尊き人の胤なり、やがておん身らと共に遊ぶの日、自ら消えん》と、彼の時言ひし翁の言も後に思ひ合はされつ。あゝ姫は鄙に在るべき風俗ならぬを、何の親心ぞ、佗しとも又淋しき此尼寺に、神の如き乙女を遺して去れる。われの解し得ぬ謎なり。初は路踏み迷ひし旅人に似たる心にて、其謎に迷ひぬ、されど心の奧には、物柔かき音してわれに語るらん如き思のせられつ、竊に此寺の春懷しみぬ。

鐘鳴り響けば、驅けいでゝぞ門の柱に凭る、日の殘光が投げし金色の艶を浴べる鐘樓半ば森の蔭に藏れ、强き鐘の音庭におちて、匂ふ櫻木搖れ落花繁かりしなり。

翁に代りて纖手に椶櫚の苧繩の痛々しくも、撞木の音のをかしさに、早鐘つきて叱られぬ、と笑ひて語りし愛らしき聲、なほさだかに覺ゆ。

われ此美しき人を思ひ、鴿にとて厨に走り、杜にとて椎の樹蔭に寄り沿ひしこと數知らず、み堂の椽に、洗

水の花崗石の臺に、こよなき樂みに醉ふを見ては、翁は羨みしならん。妾は十二、姫は十歳。

學校の往き歸へり、必ずや此寺を訪ふを常とせりき、一日姫は一群の女に圍れ、香の烟立罩めたるみ堂に座し居たり、翁は妾を遮りて云く〈今日よりは姫は佛となり給ふ故御身が共に遊ぶ日は消えたり〉。あゝなど情れなき言ぞ、我心は俄に曇り如何にして家に歸りしか、室に入りて俯伏し泣きぬ。夕の鐘は此時鳴り渡れり。悠々とひゞき〱て胸線にふれ、絶え入る心はしどろに紊れぬ、是より鐘の音を哀れに思ひぬ。

父は榮譽高き人とは云へ、子寶に滿ちては、稚きに、愛着の衣を斷ちて、墨染の法衣に煩腦を包ましめんとす、あはれかの君今は何地に花の蕾を過せる。一度姫のみ堂の人となり玉ひてより、妾れは寂しき此山里に殖えし都人の、いと珍らしく懷かしくて、慕ひ〱し果漸く笑顏に親みを交はすに至りしも、それは只一時の夢なりしか、後の日、墓によりたる鬢白き翁泣いて云ふ——姫の事は問ひ玉ふな——淋しき言よ。かくて妾は終に、彼の謎とかで今年亦春を迎へんとする。

朝日は登りぬ、若葉蔽ふ姫籠り居の堂の徑に若草もえて、白壁射る光青う映り、締もて立ち玉ひし比丘尼の影は亡し。折しも讀經の聲高く揚りぬ。

（評）何等の悲慘、何等の冷酷。

○母の離別

無名子

吁々妾はなど幸なき身なるや。

かゝなふれば早や三年の昔とはなりぬ。慈愛深き母君と露置く袖を別ちしより。花笑ひ鳥謡ふ溫き春は向はず木枯すさぶ冷たき世の荒風にえ堪へて。袖絞りし事はそも幾度ぞ。

掌中の珠簪の花と愛で給ひしも。思へば。あゝ。十有二年の間なりけるよ。

好きが上にもよかれかしと。み心を碎き給ひて。結び與へ給ひし下げ髮の。己が心に叶はずとて。引きほどきしも。そゞろあるきの歸り路にリボンよ簪よと。母君の袂引きしも。あゝ。そは皆。夢なりしか。

爾來妾は親鳥に殘されし雛鳥の如く。朝に行く雲を仰ぎ。夕に月を眺めては。母君はいかにして居給ふや。遠き北の縣と聞きつれば。尋ね參らせんと。心は矢竹にはやれども。纖弱き雛の身の翅立たず只通ふ千鳥を羨みては。つきぬ涙にくるゝのみ。

冷たき泉のそれならで。溫き愛の泉より湧出でし。母君の情ある言の葉。實ある惠は。小さき胸に滿々と泌み渡り。冷まさんとして冷めやらず。去らんとして去りやらず。見るにつけ聞くにつけ。一として母君を思ふの種とならざるはなく。今宵妾は孤燈のもとに編物

のすさびせんとて手にせしが。此糸此針。皆母君の買ひ與へ給ひしものなるよ。母君と泣いて別れを惜みしも。三年前の今月今日なりしよ。など。過ぎにし事ども思ひ浮べば。胸も張り裂けん計り。あまりの悲しさに。氣も狂ほしう。ふら〳〵と彷徨ひ出てゝ。何れの道を辿りしかも覺えず。冷氣襟元を刺すに心付けば。今此小川の橋上に立てるなりき。あゝ。思出多き此小川。母君のつきぬ涙を灑ぎ給ひし此水。共に渡りし此かけ橋。皆神の惠のもとに。昔のまゝなるに。など。妾は幸なき身とはなりし。眼を上ぐれば月は朧に中天にかゝり。星影まばらに。四邊寂として。幽かに犬の遠吼えの聞ゆるのみ。あゝ母君は彼の月彼の星の如く遠き縣に居給ふや。さるにても母君の御顏の見たさよ、つもる思ひの語りたさよ。空を仰ぎて嗚咽すれば。足わなゝぎて。え堪へずなりしまゝ徐に橋の片へにもたれぬ。淙々と流るゝ小川の水も。妾が涙の滴か。

（評）孤筇零然、人生の悲痛を極む。

○軍馬

本郷　佐藤隼子

小雨そぼ降る春のある夕、一群れの軍馬は我家より程遠からぬ濱邊へ着きぬ、降りしきる雨に駒の嘶きもの悲し氣に聞えて、何となう哀れの心地せらるゝにぞ、せめての心許りにとて、少さき弟と二人日の丸の旗を振り立てつゝ、濱邊の方へと行きぬ。見れば今しも沖の方より漕ぎよせし一艘の小船より赤、黒、栗毛等とり交ぜて十二三頭、くがへ上りぬ、ォ、其の姿のやつれたる事よ！、雨に風に小草の花のしぼみたる風情。



畫（選外）越谷　平浮文子

されどそを色にも見せで、只管、君の御爲め國の爲め血潮の流れ屍の山を蹈み越え、險しき山路も朽ちたる橋も、走りに走りて平地を辿るが如く、或は怒れる波まを横ぎり、或は空に架したる如き坂路を下り、林を出てては林に入り、或時は敵の軍舍を蹄にかけ、或時はたけにも餘る茅原の中に奮ひ戰ひ、畑の間に隱れつ見えつ、美事敵影を滿洲の野に絶たしめ、勝利の月桂を冠して、懷かしきふる鄕の地に歸れば、迎へん人の影だに無くて、空しく農夫のしりへにつかんとす、あはれの軍馬よ！

たとへば匂ふ櫻の樹かげの菫——晨の嵐に等しく散り逝けど、見ん人の仰いで稱へん語はあれど、俯して灑ぐの涙あらず、空しく櫻の盛名に掩はれて枯れん運命

の小さき菫！それにも似たる汝れが身の上！。
あはれ人の子は、輝く勲章を胸に飾りて、名譽に包まれ歡呼の聲を押し別けて家路に向ふに、汝が行く處松風の音だになし。感慨深うして我袖の涙に重く、迎へん聲も空しく唇の内にひそみつ。
忽ちけたゝましく呼び立つる萬歳の聲に、弗と我に歸れば、駒は何思ひけん一聲高く嘶きて墨繪の如き松原の中に隱れぬ。

（評）　單馬のいはんと欲する所を言ひ得て、妙。

◎工女を哭す（弱者の聲を讀みて）

但馬　小西すみれ

皇國二十萬の紡績工女よ汝は何處より如何にして此苦境に沈みしぞ汝は答へん身は薪刈る山賤の世の様も知らざれば優しう勸められし都人の甘き言の葉にそゝのかされ涙もて止むる父母がいさめも厚き友の情も振り捨てゝひたすらに粉黛を施し身に綾羅まとはん果敢なき榮華を夢み僞の人情なき人血なき人涙なき人鬼の如き人とも知らで行末樂しき明暮を心に畵き山河遠き花の都に上りしもあゝ田舎家にすら見得べからざるむさくるしき寄宿舍に勞れし身を横へし時よあゝその時の夢やいかなりし。

されど猶一縷の望みは小さき胸の一隅に輝きしを。
あゝ……戀しき故郷の夢さめて工場に出でし時は、あゝ。
おそかりき、天に哭し地し伏して叫ぶも、我悔悟はおそかりき、今は如何に歎くも悲むも、もだゆるも、我萬斛の血涙を灑ぐも如何にせん、身は十重廿重のくろがねの扉も及ばざる工場に起臥して立上る烟を羨みつゝ如何にもしてと有らゆる術を廻らすもその甲斐なく生きたるむくろと成り了れるなりと。
可憐なる汝工女よ汝は斯くして資本主の犧牲と成り天與の命を縮め貞操を傷けられ遂に無慘なる死の宣告を受くるなり。
薄倖なる乙女よ汝は朝に夕に喧しき機關車の響に耳を破られ細糸と油に身は汚れ然して世人に遠けられ鬼畜視せられ酷薄なる資本主が叱咤の下に清き少女の生涯を終るなり。
可憐の兒よ世は僞りぞ汚れたる世ぞ飾りの世ぞ血なき世ぞ涕なき世ぞ信なき世ぞ塵の世ぞ夢の世ぞはかなき人の僞善の袖にすがらんより神の御手によれ神は賤しきも貴きも同じく惠を與へますなり僞りの涙受けんより聲なき神の御言葉に耳傾けよ。
其所に聲無き慰藉其所に影なき自然の友有り。
薄倖なる兒よなれが機關の下に倒れ伏す時ぞ苦境を立

出て天帝の御腕にすがり美しき神の子と成るの日よ。

（評）沈痛にして同情に富めるを取る。

○母の墓前

横濱　菫子

噫御母ァ樣只今歸りましたが私は御母樣がよく歸ッて來てくれたと云つて喜ばしく私を迎へて下さいませぬのが誠に〳〵悲しう御座います私は只今あなたの墓前に跪いて御話し致しますから何卒よく御聞き下さいまし御母ァ樣あなたは私等の爲に數限り無い御心配下さいまして私は今思ふと誠に御悼歎くつてなりません私も其の時分には幻な心に御母樣の御心の中も知らず隨分御困まらせ申しましたが何卒御宥し下さいまし、がんぜなしの小供を二人も三人も殘して御父ゥ樣が黃泉の人と御なりなすつた時の御母樣の御心は何んなに何んなに悲しかつたでせう其れさへあるに間もなく兄樣（姉の夫）が御亡りなさる其から一年も經つて姉樣が聞くも恐しい肋膜炎とか云ふ病氣に御なりなすて長い長い間煩つて遂々御亡くなりなすつた時には何んなに悲しく何んなに御辛らかつたでせう其でも天は私等の家庭に幸福を與へて下さらぬのか或は御見捨なすつたのか又姉さんがお亡くなりなすつた噫御母ァ樣は斯んなに苦しい悲慘な痛苦な辛い〳〵、小說の二冊も三冊も出來得る程の苦みの中にお亡くなりなすつた御母ァ樣私は一度御目に掛りたい夢にても來て私に逢て下さいまし私は御母樣が御なくなりなすつてから東京の女學校へ入つて修業致しまして只今歸りましたし兄上には昨年二月戰地に赴むかれ先月目出度凱旋なされましたがいとしい御母ァ樣や御父樣が無いのが誠に悲しうございます噫!!!月は曇るともいつか下界をてらします花は散るとも再び咲き匂ふ時がありますされど御母ァ樣は一度逝きて長く御歸りなく御母ァ樣がかたみの寫眞は日に〳〵うすくなりますが私の心にあります面影は長へに消えません明け暮れ御母樣の御恩を思ひ出しますと今にも身が裂ける思ひがしますあゝ悲しいかないたましいかな。

（評）措辭拙なれども眞情の露はれたるをみる。

○卒業

神戸　春浦女史

某の學び舍に入りしは昨日とこそ思ひしか年波の流れ易く何時しか五年の月日たちて五十餘人の友垣と共に卒業と云ふ榮ある日とぞなりにたれ師の君の待たれしも今日なり親同胞の待たれしも今日なり嬉しとも嬉しきよされど思へば己れ始めて此校に入りし時同じ級の友垣も知己の人とては稀なりしを花芳ばしき春の日を菫蒲公英摘みとりてかざしともなしつ月影淸き秋の夕三十一文字にたゞへ五月雨の夏の日雪ふる冬の朝慰め

られつ慰めつ交りは深くなりていとゞ樂しう暮しゝものを明日よりは西に東に立ち別れ何日か復逢ふ時あるべき瀞頭遙かに烟を上げて浮べる艦はやがて竹馬の友を乗せて吾を泣かしめんとし、瀛笛高く叫ぶ火輪車は吾親しき同窓の君を乗せて別離を惜ませんとす咲き匂ふ梅の花も此時のみは悲しう見られ谷の戸出る黄鳥の聲も此時のみは哀れに聞かれきあはれ來ん花の森納涼の夕月澄む夜半雪の朝誰と共に眺めん誰と共に賞せんさは云へ今日までは師の君の懇ろなる導きによりて來りしものを明日よりはゆくへも知らぬ世の海に舟出する心細さ思へば思へば嬉しき裏に悲しみあり又の逢ふ瀬の其時は今の姿の儘ならじ婿の君ある人赤子を抱ける方さては學生姿の活潑らしきが家政の爲にやつれ給へるなぞいかで今日の無邪氣なる樣のあるべきさればいと樂しきは今日限りなるか無邪氣の話は昨日までなりしが殘り惜しのことやされど花月に風雲あり浮世の事は何事も思ふ儘にならずとは云へ心おくれ給ふな忍び給へ耐へ給へ忘り給ふなよ寒暑を厭ひたまへ五年の深き契り忘るることなく雁の音信こそ願はしけれあはれ卒業の祝ひあはれ別離の悲しみかへす〳〵もつきせざるは今日の思ひ。

（評） 喜ばしくして而も悲しき情趣。

◎新年の領

奈良　葭江女史

軒端に照る旭日の御旗。鮮麗の光に浴するみくに。松緑なるくに。新玉の若水汲む池塘の魚は鯉。囀る軒雀は忠と誓ひ。孝を唄ふ庭の鷄。昇る炊烟は平和の息で、焚く雜煮の味は新年のみ領なのであります。年波ひとつよせて、嬬の稀手に成つた餅。それに交へる人參の赤いのが赤誠。白い大根は潔直。牛蒡の黑いのが勤勉の印。それらは翁が額の汗に獲た尊い賜もの。

松、竹、立てゝ祝ふ家の門に、尾を掉るのは義の犬。むすぶ〆繩の太くて、吊す橙の世を繼ぎて目出たし。優しきは南枝咲ふ早梅、されどまた、鶯來なく趣はいつの新年の領なることとや。

神代の雪を戴く富士の山と。ノタ〳〵と据の塵を洗ふ太平洋の新潮と、これやこれ第廿世紀扶桑國の元旦の靈てはあるまいか。

（評） 滑稽の趣あり。

◎都なる友を懷ひて

長門國　　子

あはれなつかしの信子樣、今は某の學舍に、通ひ給ふと、風の便りに聞きつれど、雁の音さへ、打ち絶えて、へだつる、山海幾百里、相見むすべさへ、あらざるを、思ひ出せば、去年櫻笑み初めし頃、空に昇れる雲雀に歌はれて、親しき君と手を取り、唱歌うたひつゝ、松は翠の長汀曲浦に寄せては返す白波と戯れつ、或は城山の麓、指月の公園に、ほゝ笑み初めし、櫻花を愛てつゝ、宵の根の長き春日も、短かしとかこちて、樂しき一日を、かり暮せしよ、ある時は、君と共に、舟を、阿武川に浮

べて、櫻江の宿に遊び、大照院の晩鐘に驚きて、夕榮の美麗はしき、景色惜みつゝ、歸りし事もありにしよ、他にはらからとても、あらぬ身は、胸の苦しみ、分たん友もなく、晝はひねもす、夜は終夜、君の事のみ、案じわびつゝ、短きあしの節の間も、忘れし日とてはあらざるを、やさしき君は朝夕に、たらはぬ妾を何くれと、敎へ導き玉はりて我等は永は に、變らぬ姉よ妹と誓ひてしより、親しき中は一層濃く厚くなりまさりて、いつも春の海のそれの如くに、平和と自由は、我等の命なりしよ、さるを過ぎし彌生の末つ方、花も名殘を惜む頃、學びの爲めにとて、遠く出でませし君は、早此清き故郷を忘れ給ひしか、月に一度は是非共筆に云はせてと、契りし事も、あだなれや、都とは遠き東路の、まだふみも見れど、斯くも厚かりし、友の情をまで、奪ふ樣なる、恐ろしき所なるにや、否君には、さる浮きたる、御心にては、あらざりし、定めて文の林の、事繁き爲めならむ、再び春は音ずれ、百花開きて、鳥歌ひ、秋は再び來りて、月清く、虫は千草にすだけ共、君いまさざれば、我一人、また何の樂みかあらむ、千里もなほ一里となす蒸滊車、夜もなほ晝の如照らす電氣燈等、夢にだに、見る事かなはぬ、便なき山里なれど、自然の神の惠ある、清く美はしき、山川や、作られど、千草咲きにほふ、野邊はあるものぞ、あゝなつかしの君よ、君なつかしさに泣く妹を忘れ給はで、一度はこの清き片山里に錦を飾り給ひてよ、などて君には此清き契りを、忘れ給ふべき、妾は堅く信じて止まぬなり、あゝなつかしの君よ、高き希望と、清き理想に包まれて、此故郷に歸り來まさむ、其日其時や如何に嬉しき事ならむ、妾は早胸もせまりて、目は露さへ帶びぬ、あゝ今し弦月は中空に懸りて、秋の思ひを、愈々深からしむるよ。

久し振（選外）　京都　壺松緻子



○凶作地の月　陸前　うゑ子

春風寒うして殘雪冬の名殘をとゞめ、朔風未だ止まずして破れし板戸を打ち、炊ぐ煙もいつしか絶え果て、喉を通さん糧も無く、口を濕す汁はなし、あはれ宮城の民草、かゝる運命の下に二つと無き命をすてゝ三尺の柩にもむくろを隱す能はずして見苦しき藁蓆につゝまる、之を聞て誰か涙なきものあるべき。

あゝ妾が家とてもかくあるを如何にせん。屋は漏りて床板は朽ちたり妾は深き思に沈んて、朽ちたる椽に腰打ちかけたるなりけり、夕ぐれ告ぐる鐘も絶えて撞かず、暮色寂然として此の悲慘なる下界をしづ／＼と遂に奈落の底に陷らしめ終はんぬ、暫くにして東の空を見やれば次第々々に明けく輝きて木立並ぶ山の端よりまろぶが如く出てける月、あゝ月よ、汝の光はいつも平和なるものよ、變らざるものよ、あはれ月、心あらば汝の平和の餘片を此の悲慘なる下界に與へ、變らざる光に妾等が前途を守護し、せめて現今の悽慘なる此等人々の心を慰めよ。思ひ起す數年の昔は如何に年豊に家富み、或は酒宴に、舞踏に、未だ其の喜びの聲の耳底より消え失せぬに、あゝ變り易きは人生の運命よあはれ去年の秋、冬の用意にと、親と共に椎の實、橡、栃、の實拾ひに行きし山、草を摘みし野、あゝ今や其の糧も將に盡きなんとす。何たる慘、何たる悲、此の糧盡きたらんには、と思へば少女心にも涙の出づるぞ是非なき。聞く由には西根(奥羽山脈の麓)のほとりにては早や、餓孚ありとかや、噫妾等も今やこの運命に接するなるか、吁!!!月は玲瓏として益々さやけく、人家は寂としてかすかに破れ障子を透して燈幽かなり。

○家路　長野　山田くに子

「ハヽヤマヒ、スグカヘレ」の電報、雨細々たる寄宿舍の窓に開きて、溢るゝ涙おさへつゝ、取る物も取りあへず、漸く三番列車に走り乘りホッと一息。

彌生の頃、花見の歸るさ、早きをかこちし此汽車も、今日は牛よりものろき心地して、一人氣を急きつゝ幾度も車中を、往きつもどりつ、漸く目ざす停車場に下車。

相も變らず兩側の茶店にて、お世辭タラ〳〵下女の呼び聲、人の悲しみも知らずなど、一人腹のムカ〳〵として、車に飛び乘り泥を蹴立て走り出した、こゝから私の村迄は四里。此夏歸省の車上では、美しと眺めやつた某山は、今日は更に美しからず、車夫の、白き笠の下より、タラ〳〵と玉汗かきつゝ曳き行も、氣の毒とは思へど、心は只々母上にのみ飛んで……。漸く入た村の境、雨もいつしか降りやんで、淡く夕月が紫の空に浮び出た。いつも弟と日高あさり、名無川に、紅葉した柿の葉が、三ッ四ッ二ッ流れてくる、アヽもしや母上も、此流れ行く柿の葉の如……いや〳〵そんな事は有るまい……が然し、めつたに病をもらし玉はぬ母上の、珍らしくも電報打ち玉へるを思へば……あはれ母上よ、頑是無き弟一人に、病の身を任せ給ふ御胸の中、ゆるし給へ妾の不孝を……、今此走る車夫の一歩毎に、玉子が近付き行くものを、み空に輝く星の數漸次殖え行く度毎に、御傍近く成りますものを。涙に濕しハンカチーフ、早絞らんばかりなれど、日の光の薄くて、干さんはいとゞおぼつかなう……アヽ惡に浴みし妾の身も、母上の御看護は、思にまかせざりけるよ……。身も世も有らず湧きくる涙を、わづかに含みしめ見上れば、早我家は目のあたり、微に淋しくもるゝ燈火の光……あはれ母上やいかに臥しますらん……。

○凱旋

米澤八千代

此頃はめッきり寒くなッて、それ綿入などゝ騷ぎましたが、今日はそれと正反對て、吹く風も和かに小春日和のほか〳〵した暖かい日です。さすがは秋てすから、天が高くすんで居りまして、何となう物淋しく、春のうらゝかな事とは全く違ひます。

妾は袴をはきまして傘を片手に、停車場へ急いて行きます。兩側の家々は皆國旗を立て、空をかける鳥も今日を晴と歌ッてゐます。停車場に着きますと、其處此處に袴をはいた殿方が多勢いらつしやいまして、旗が幾本となく立つて居ります。妾どもは凱旋兵士を歡迎に來たのてござります。

昨日見ました女子文壇に、「つよきこと言ひて別れし故郷の、父母戀ひし秋の夕暮」と、言ふ和歌が御座いましたつけ、ほんとうに滿洲に居らつしやる方々の御心はどんなてせう。胡沙吹く風に其の面を吹かれまして、漠々とした廣野の中獨り月ても眺めましたなら……ほんとーに〳〵、察せられますよ。それを考へて見ますれば、此度の凱旋する方々が御心は、實に愉快て御座りませう、しかも戰勝の光榮な身に負ひまして、全國民歡迎の中に、愛の父母ある、兄弟ある、妻ある、子ある國に歸りますのですもの。

かう考へて居りますと、凱旋兵士の面影は、ありありと眼に映じて來ます、軍服てせうか、和服てせうか、又は誇の顔色て來らるゝてせうか、或は謙遜のおもゝちてせうか、笑顔てせうか、きッと淺黑い顔色に、笑がみち〳〵てござりませう。

此の方々が歸られまして、月の光は決して悲しくはありませんてせう、蟲の聲は遂に歡呼の聲と變つて、物淋しかつた此の秋は、光明の秋と變りますてござりませう。

汽笛の音がいたします、と、みると汽車は轟々やつてきました。凱旋兵士を滿載しまして。

汽車の人達は降りました、其處此處に萬歲の聲がいたします、妾の歡迎に來た御方は、軍服て豫想通り、滿面に笑を含んて、藹然として來られました。此方ても萬歲が始まる、妾は思はずハンケチを振りました。當の御方を見ますと、引しまつた樣な顔に、謹みの色を見せて、感謝に耐へぬおもゝちをして居られます、其の目？其の目には露がほの見えて居りました。

旗を先きに、はでやかな樂隊の音と一所、妾共は其の御方を御家まで送つて行きました。その御方の父君母君は外に出て居られました、家の前に行きまして、亦々其の御方の萬歲を三唱しまするど父君は頭をさげて居られました、母君の御目には清い露が閃いて、後て御袖て顔がかくれてしまひました。此の瞬間！ほんとに好畫題てござります。

歸るさ二階を見上げますと、うら若い御方が乳のみ子を抱いて居られました、あの方の喜はどんなてせう。



敍事文

文學士沼波瓊音先生選

天 ○花見歸りの雨

小石川區東青柳町二番地　近藤愛香

霞がだん〳〵深くなると思ふと、霧の樣な雨がしとしとゝふり初めた、妹が紫の深張傘に自分も頭だけ入れてつひそこの山下から、手折つた桃の一枝を、雨にぬらしてはと氣がゝりなので、もみうらの袖にかくしながら、赤い紐の結付草履に紫の裳小高くかいどつて尺に伸びた麥畑の細道を辿り〳〵、村境の櫻を目あてに、とぼ〳〵と走りくる里川のほとり、これも花見歸りの雨に追はるゝのであらう、菜畑を通りすぎる白手拭のいくつ、面白い唄の節はないが、長い麥畑の間から、ちら〳〵と見える紅い衣片、後からつゞく櫻の枝、雲雀の聲は猶霞の中にこもつて居る、とんとんと足音をかしく打渡る板橋のはづれ、水の流れが面白う耳元に響いて、つひ足を停めた堤の上、いく本の柳の枝が静かに水の面に垂れて、其傍に、木瓜の花であらう、濡色の一しほ紅いのが水に映じてその波紋と共に動いて居る、向ふ岸の濃い霞から現れくる幾羽のつばめが、水面をかすめては又同じ霞の中に、ついと消えてしまふ、下の石橋、欄干をのみ殘した上に、幾圍の霞がおしよせてきた、と思つたのは車につまれた緋桃の花束であつた、雨がひどいわといふ妹の聲に驚かされて、めぐる堤の端、藁屋根の休むには頼りよき田舍家の軒に走りこむ、鷄が、濡れた長い尾を、散り亂れた桃の花の上に引づゝて椽に飛上つたと同時に、腰を下した、つひ今向ひの板橋を渡つてくる、蛇の目傘の後から、白い蝶が二つ、やがて其れを越えて、家の前の菜の花畑にかくれた、軒より落つる雨の滴りはポツ〳〵と、いと淋しげに、桃の花は絕えずこぼれてゐる、椽に上つて袂を拂へば、もみうらの袖ひるがへつて、ハラハラとこぼるゝ、桃の花櫻の花、椽臺の山吹椿と相混じて宛然五彩の錦をひろげたやう。

（評）絢爛眼を奪ふ。

地 ○ほとゝぎす聞かぬ記

播磨國姫路市道筋延末町　矢島ほくと

妾は今年十七の歳を迎へしが、いまだほとゝぎすと言ふもの聞かねば、血に啼く聲に腸たつ心地ぞするなど、ものゝ文にて見るにつけ、いと口惜しくまた恥かしく覺ゆ。

去る日山家に住み給へる友垣より、この頃啼き初めたればとく來たまへ、と言ひ越せるまゝに喜びて赴きぬ。

夜ふくるまゝに、そゞろ歩きするに、空はなんとなう雨氣を帶びて、うす墨の如く山くろく樹くろくして、岸のほとりの卯の花の白う咲けるは、さすがに雪のつもるとも覺えねど、晝さらしゝ布かと見あやまたれぬ。繁りあふ若葉青葉の樹のなかにわけ入り見れど、たゞ物凄さのみ加はりて、まだ一聲だに名のらず。葉かげすかせば、くねる道のみ白うして、はるかの奥にともし火またゝくなど言ひしらずをかし。聲とゝのひかねたる蛙の聲さわがしきのみなるに、うみはてゝ家に戻り、いぬるともなくまどろみぬ。友の呼び起すに心づけば、今の一聲聞き給ひしやと問ふ、否聞き侍らずといへば、あれほど高くなのりしものをといふ、そは惜しきことしてけりと、見やる空に、かた破れ月のあざむ如くかかれり。ほとゝぎす啼きつる方を詠むれば、たゞ有明けの月ぞ殘れるとは、實にかゝる景色ならめど、あはれその一聲を聞きしならば、いかばかり月もあはれに眺めらるべきにと、今は心ゆるみてまたねむりぬ。枕の上にこたびはたしかに聞きぬと、立ち上り見れば、東雲の空やゝ白みて朝鴉一聲嘲けり顏に啼き過ぐるこそ、いと腹立しかりしか。

（評）あけの鴉の鳴く音、何とか聞きたまへる。

人

○花かげ

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

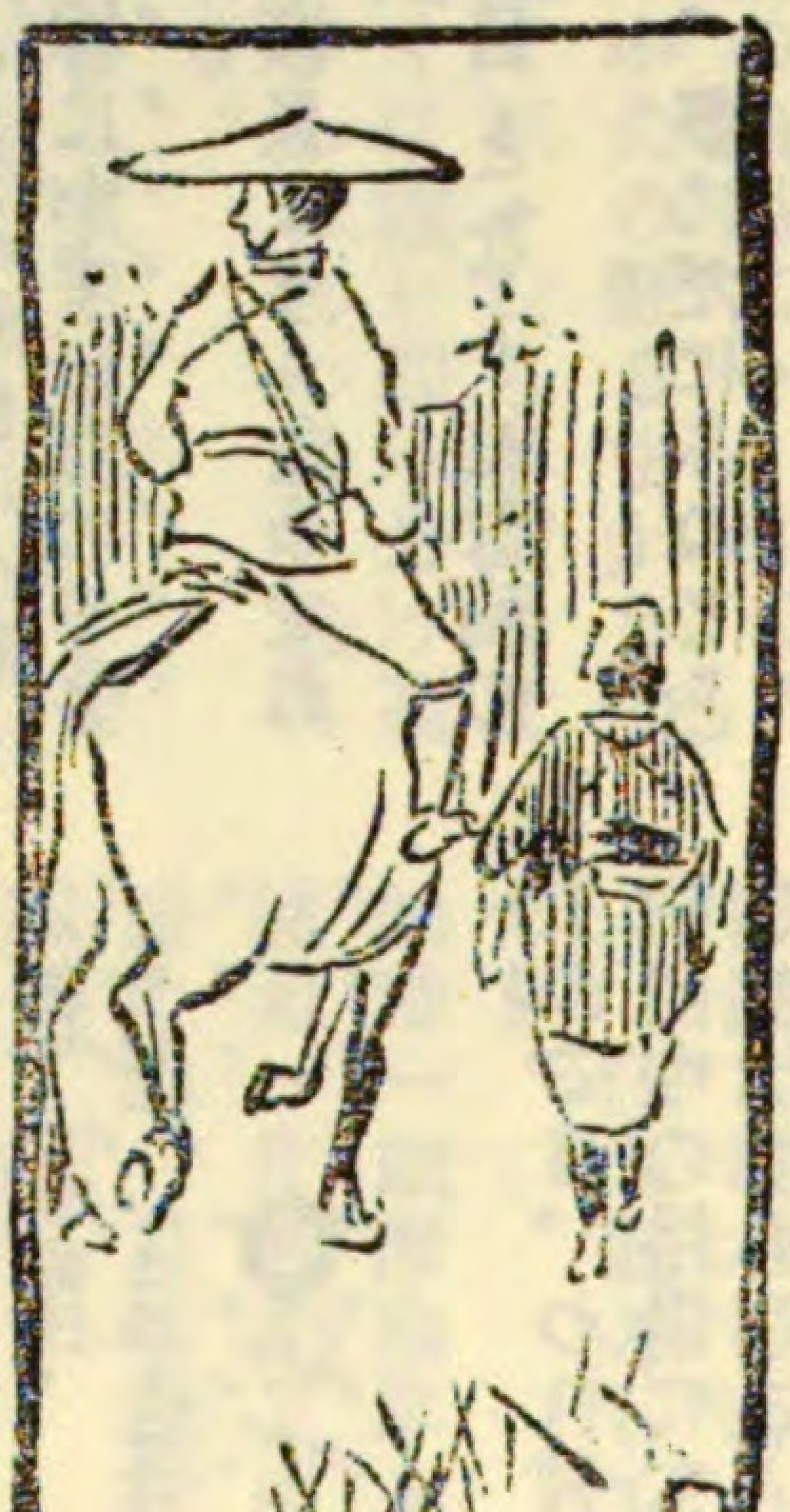
「あれまあお孃樣御覽じませ、緋桃がくれの八重櫻、三つ四つ七つお花が殖えましたよ、丁度御手々のとゞきそうな低い處で御座います、さ、また清とお花のかげて、飯事遊びでもいたしませう、オヽ御利潑なこと蝶々も羽袖をかへして、お孃樣の御出でを待つて居まする、もう〳〵決してお泣き遊ばしますな」。

さくらさくら、咲いた櫻になぜ駒つなぐ……。

妾は昔覺えし里唄に、いぢらしき幼な主人をなだめつつ、朱塗の小下駄そと塵拂ふ。されどお孃樣はなほ咽びたまひて。「清、母樣が…母樣が私を…」と、こはれし稚兒髷かなしげに撫てゝ、「でも私が惡かつたのね、玉ちやんの鞠を借りたまゝ忘れてゐたもの、あゝ

清、母様にお詫してお呉れな」。おいたはしや妾が破れ袖にすがりたまひて、ほろゝとばかり露か……あつき涙を。あはれ如何にして奥様には、小羊のごと優さお孃様にかくもつれなきぞ、おもへば〳〵たゞならず胸をどりつ、妾は無言のまゝ可愛ゆき君をしかと抱きて庭に下りぬ。はれ渡りし空の何處ともなくおぼろ氣に見ゆるは、春はやよいの花のとがゝ、暖き風、萌え出てし柔葉をはらひて、涕の頰をかすめ去る、折しも母屋の方にてお玉様の鞠うたの聲……のどかに霞みて聞ゆ。「清、私も鞠がほしいわ」、「エヽ清が買つて上げますよ」。花の下かげいつしか胡蝶影消えて、櫻一ひらみだれ散りぬ。

（評）纖子のいぢらしさと、忠婢のおもかげと、兩つながら巧みに寫されたり。



旅（選外）　眞岡　月笑女史

秀逸

○春の巻

能登　池野白百合

○さゝながれ

草小橋

夕こえて　心づき——

花束をもつたまゝ、美はしい唄聲に振りかへつた。散り舞ふ花も蝶になりさうな麗日。汀には菫、蒲公英、踏むには惜しい蒲若草が一面。舞ふ蝶の影がちら〳〵映つて、柳が二三本、薄紫に綾う流るゝ里川堤を、傾きつゝ行く繪日傘一つ。

わたしは恍惚として天使の樣な其後影を見送つたが、やがて菜の花の畑にかくれてしまつた。けれども唄聲は優しう幽かに……さゝながれ、草小橋——。

げに春の日の花やかなることよ！

花に眠る蝴蝶の姿をみてさへも恍惚となるのに、甘露の樣な柔かな風が絶えず吹きくるので、美はしい理想の國にでも誘はれて行くやうな心地がする。神話に名高い『靜かの森』は神の綺羅の樣な霞につつまれて、裾がきえて宙に浮いて居る趣、眞く繪にある蓬萊の通りで、一羽づゝ紫の光に包まれて鶴があらはれいづるやう……。

あゝわたしは恍惚として。戀知れと軟ぐるやうな春の柔風を眉や頰や、紅唇にしみこませて、綾うながるゝ小川のほとり、伏目になりつ、もしもあの夕空を飾る

美はしい彩雲に捲れて眠つたら、其れは什麽に可いだろう……

〇

曉の影ほのかにゆれて、春の夜は又音なく明けぬ、花のいきさへこもるやと思はるゝ薄靄の間を縫うて、静かに流るゝ紫の光に裏の梅園雪さえそめぬ。あはれ花の褥に身をよせて、夢美くしき金衣公子の雪解の水に足をぬらして、ひとり身を侘ぶるいぢらしさ。

〇

櫻貝拾ひあつめて星の數と、くらべてもみぬ島の夕暮。

下京やつゞみの遠音水に落ちて、柳にかすむ春のつきかな。

わが戀は月美しき島の磯のへの、櫻貝よりふとうまれけむ。

歌の會や人戀ひそめて春の宵、伏目となりぬ雪洞のかげ。

次の世もはかなかるべきわが戀か、夢にだにみぬことぞかなしき。〇

さながらみ佛の肩よ！、舞袖の山、霞につゝまれて夢の如くに仄見ゆ、月影白き曙花捨川をみぎにみて菫咲く野をさまよへば、眉に優しうしめりおぼゆるにぞ、指もてなづれば香露一滴、アゝ！花の香のこりしにあらずや、言ひしれぬ床しさにうたれて、われはそと、佐保姫の化粧の料にと、小草の葉末におきぬ。

〇

唄の聲優しうきこえ。里川堤繪日傘ひとつ。

かぜなきにほろ／＼と。櫻散る川書の月みゆ。

〇

波の音が静かになると、暮靄がほの／＼と立ちこめて衣神社のみ灯が夢のやうに仄めく。磯山櫻がちら／＼と散る。星のお母さんが、天降りなすッて櫻貝をおみやげにもつていらつしやるのは、こんな宵ださうな、あれ鹿の聲！。

（評）才華亂發。
（又曰）いま少し文字の誤なきやう注意せられよ。

〇いでゆの春

山城　井上らい子

去ぬる日、われ胃腸を病みて醫士のすゝむるまゝ、加州山中の浴湯にものして、汚れたる腸を洗はんものと旅の仕度もそこ／＼に、雲雀なく柴の枝折戸立ちいでて、長閑けき春の風に吹き送られつゝ、夢静かなる山中の人となりぬ。

朝の浴みを終へて立ち出づる山の岨道、聲高らかに呼ぶ鶯の音に誘はれて、山深く谷の細道たどり／＼て橋のほとりに浮れ出てぬ、げにや久方の春の光長閑けく、野づら山づらに滿ち渡りて七重に八重に湯煙白ふ打煙りて朝日の光をさへぎり、山も家も樹もいと朧げに見

ゆるも面白し、水車きしめく柴橋の袂、五つ六つ立ちならぶ草家の軒、ひるげのしろや炊ぐらん、煙ゆたかに、立ちのぼりて、桃咲く窓、孫の春着をや織る、梭の音かすかに洩れて、深山につゞく裏の麥畑日影のどかに、雛をひきゐる親どり睦まじげに打群れて遊ぶなど、げに心ゆく眺なるに、巖間を走る谷川の水清くして、さゞれ石の數も見え透き、底の玉藻に小鮎の游ぎ行くも珍らし、苔むす岩かげなる青柳の糸風にそよぎて、醉へるが如き緋桃の花、二片三片小犬の眠るまがきの下に散りかゝり、耳を澄ませば近く淙々たる谷川のせせらぎ何をか語り何をか呼く、遠くは霞を踏み分け高嶺の雲に眞柴刈る乙女の鄙歌、かすかに雲の帷を洩れて浮世の外にさまよふ心地ぞすなる。げにやかゝる深山の奥にして生涯を二頃の田畑によせて、樽打圍みて一家の團欒を樂む山家住居よ、いかばかり嬉しく心安けきことなるよ、あはれ懷かしき山中の春よ、あはれ面白き山中の眺よ。

＊　＊　＊　＊

われは再び故郷の地に歸りて、塵多き都の巷に錙銖の利を爭ひ、果敢なき夢のゆきかひに僅に懷かしかりし山中の春を忍び、面白かりし遊びを思ふのみ、あはれ春深き山中の眺やいかに。

（評）淸閑なる山中の春景色いかに深く君が心にしみわたりけん。

○夕暮の江畔

豊前　すみれ子

千鳥なく暮江の秋ふけて、蘆花白き汀の邊、一葉の孤舟夕波に漂ひ、楓を欺く櫨樹一本、堤上にありて紅葉滴らんとす、樹下に白髮の翁あり、横臥して華胥の夢を結べり、斜陽鮮かに櫨葉を照し、深紅恰も火の如く樹影倒さに水に落ちて、小魚水面に飛びて銀鱗金波に輝く、江上寂として波平らかに、白鷺一羽孤舟の邊に立てり。

此時一旅僧向岸より舟を呼ぶ、答はなくて鼾聲聞ゆ、櫨葉一片風なきに散り、流れいと靜かに落紅をのせて去りぬ、日は漁村の柳にかゝり反照江に映ずる處、彩霞低く迷ふ。

旅僧は二たび呼びぬ、三たび叫びぬ、されど聲は空く水に響きて、夕の靜けさを破るのみ、渡守は何處に行きしぞ、舟邊の白鷺既に去りて影もなく、中洲の邊蘆荻戰ぎ、鶺鴒一つ、水を掠めて飛ぶ。

江風一陣櫨の梢を吹けば、はら／＼とこぼるゝ紅二つ三つ、あなや翁が白髮にかゝりぬ、されど夢はさめざりき。

旅僧尚ほ向岸にあり、孤影蕭條として彳めり。

日既に沈み、晩霧漸く藍色の江山をこめて、漁舟の影

も朧に、こゝも又淡烟一抹、輕く堤上の樹をつゝみぬ。暮雲江に落ち、魚又飛んで水中靜に聲あり。鐘寒く黄昏の空に響き、何處ともなく讀經の聲幽に聞ゆ。

(評)江畔の景を描きて幽又寂。

○草ぐさ

讃岐　しげ子

朝あらし

短き夏の夜の月はうすく夏山の松が枝にかゝりぬ。郭公の一聲空に消えて。曉まさに近し。曉風松が枝を拂いて、露落つるところ、苔滑かなる岩ありて、美しき水をたゝへたり。岸には、薊、山百合、其他名も無き草花咲きみだれ、たかき香は、しめやかなる朝の露に匂へり。

朝顔

藁屋のうら、朽ちたる井戸の側、からみつきたる朝顔のつる、しげき葉影より、紫の花、白の花、紅の花、美くしき花數輪、水に影を落せり。

老母朝餉の片づけものにや、うづくまりて物を洗ふ、長き桔槔の棹に、鶺鴒の尾打ふれるが、水田に映つれる、いと面白し。

橘のかをり

家の南の古き橘、高き薫りの滿ちみてる夕間ぐれ。遠寺の鐘の音、淋しき大氣を振はして、餘韻は橘の香にまじりて、そこにいふべからざる愁怨の色をたゞよはしぬ。

風なきに花はら〳〵と、夕の月をかすめて散りぬ。

夕のそら

はなやかに匂ひし夕空も、漸くあせて、薄紅となり、紫となり、雫滴たゝる葡萄色も暫くにして、今は薄き鼠色となりぬ、それよりやつれにし少女子が、臨終の床の上、それにも似たらん淋しき色は、畑の小溝に映つりぬ。

遠近に鳴き初めし蛙の聲ぞ、いと淋しくもまたあはれなり。

ゆふづゝ

中山湖畔、夕の露を踏み分けて、そゞろ嘆の涙に袖をぬらす人はあらざるか!!!

夕風いとゞ身にしみて、岸の草間になく虫の聲、たゞそれのみ古を偲ぶよすがなりけり。

夕さゞめく波の間に、ほのめき出でし夕づゝの、そが光に、千古の恨をひそめ、流離轉變きはまりなき浮世の樣を嘆くが如し。

(評)緑陰深く、風清し、まさに別乾坤。

○日の出

紀伊　淺利貞子

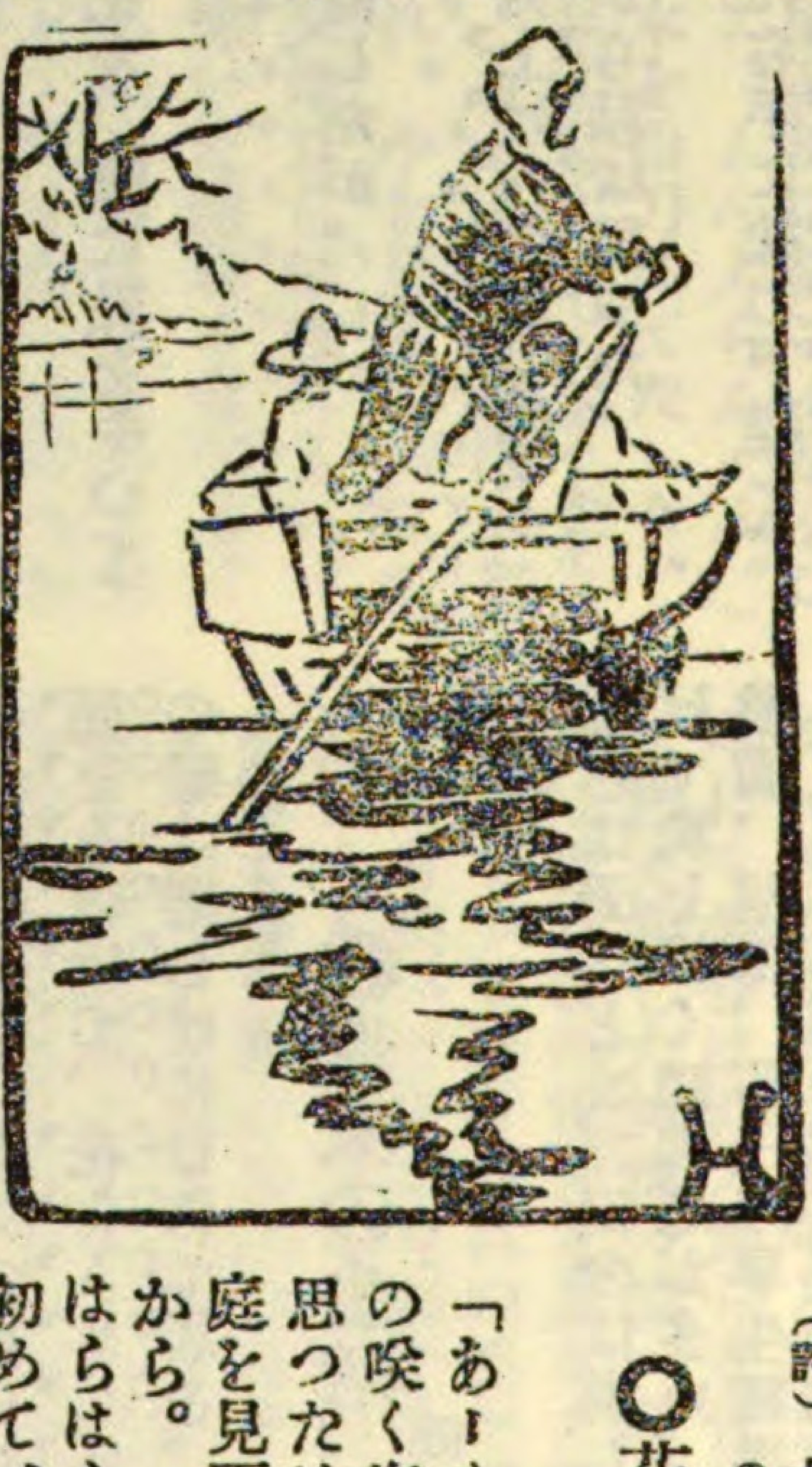
鬼熊笹の一群がガサリ〳〵摩れ合つて、朝寒の風が何

處ともなくスイ〳〵吹いて來る。ハッと頭を上げて見ると夜は全く明け放れて、もう臺所では下女はトントン朝飯の準備してゐる。オッと遲れたと思つて早速裏なる濱邊に出で立ちつ。

渺茫たる千里の熊野灘は、まだ紫紺の朝霧の中に眠つてゐる。那智山が頭を擡げ出して飛瀑が白綿のやうにみゆる。やがて霰たばしる露の白玉がホロ〳〵落つる磯小松原を分けて行く。いつしか氣隨氣儘の柔かな銀砂金線の上を東へ〳〵進む。此時不意に水平線上が赤らんで來た。さては今日の日の出かと能く〳〵見詰めて居ると、今迄フワ〳〵洋上に浮んで居た紫桃色の雲が恰も花の開くやうにパッと擴がつて、一天見る〳〵眞紅に化したと思ふ瞬間、炎々たる大旭日、水線上に半身を顯はす。と同時に金色の征矢が幾條となく下界を射た。潮樫岬と云はず旋轉電燈と云はず、ウネリ〳〵津荷茅屋褐舍の後を繞り行く串木白布の古座川と云はず、唯もう一面の金線、風伯作威、堅艦不支、使臣雖沒、聘問始斯、勒諸貞石、以表痛悲、自分は今更思ひ出したやうに、彼のトルコ軍艦オスマンパシャ以下五百有餘名の沈沒悲慘の當時を追想してゐると、裏の納戸の傍から、阿孃樣朝飯が出來ましたとの下女の聲。

ア、壯勇偉大なるかな熊野灘の日の出。妾は毎朝故鄉なる裁縫補習學校に通學すべく、朝起るとすぐ食前運動として、此の偉大なる海岸の、日の出を拜するのである。

（評）大景をよく寫されたり、敬服、文脈の續き工合に今一層注意ありたし。



渡塲（選外）　備前　近藤英子

○花吹雪

靜岡　石神若菜子

「あゝもう花が散るわね、この櫻の咲く迄には、是非快くなつてと思つたけれど」と獨言つて、私は庭を見下した、日當りのよい窓から。

はらはら〳〵止もなく花は散初めて、池の面に雪とばかり、と等つて緋鯉まごひが、跳ね躍る可笑さ、私は思はず恍惚見入つた。

正午近い暖さと、けふは別して氣分のよいのとに、珍らしく手づから、八丈の搔卷を窓の手摺に持出して、日にあて置き、寢着の上に、ふだん羽織を被つて、そろりそろり庭に出た。

「お嬢樣、御散歩て被居いますか」。

聲に心づいて振返ると、築山のあなたて、庭男の安藏が、葩を掃いて居る、オホヽ、紺盲の半被が、恰ど小紋染のやうよ、落花て。

「姉樣、ねえ樣」。

妹田鶴子の愛くるしい呼聲、どこだらうと見廻すと、汀の岩の陰に、長い牡丹色の袂が……。

「こゝだわ」。

と進みよつて、につこり、手を把た、鯉に麩をやつて居たのて。

「姉樣、けふはそんなに快いの」。

ふくよかな頰に靨を刻んて、莞爾したが。

「でも、疲れやしなくて」。

や、愁をふくんで、斜めに私を見上げた面ざしが……亡き母上にそつくり、と今更ながら私は思つた。

「大丈夫よ」。

強いて快活に答へて、やせ細つた右手に妹の下髮を、掻い撫てた、去年、私が結つてやつた時から見ては、數寸ものびた、それだけ、自分の玉の緒は縮まつたのてある。

「ねえ樣、今年はとーと、そろつてお花見しなかつたわね」。

本意なげに云つて、妹は梢をふり仰いだ。

折から風につれて花吹雪が一しきり、斜めに、ふたりが紫の袖紅の肩を、まづ白にした。

「あらまあ、こゝにもよ、こゝにもよ」。

姉妹はかたみに手をあげて、拂ひ合つた、くるりとあち向いた妹のリボンに、まだ三ひら二ひら殘つてる、夫を私は掌にのせて、つくづくと見入つた、恐らく、來ん年の花吹雪をば、冷たい石になつて浴びて、田鶴子が涙の手に、拂つてもらふのであらうと。

顏をそむけて、花よりもしげく散る露をはらつた、池の鯉は樂しげにむれて居る。

（評）多恨の春。

◎農家の生活

靜岡　福井美智子

第二月

春とは云へどまだ田舍は淋しいので、山奥に煙りをあげて炭を燒く鐵佛連が多い、其他農具の修繕、苗木の整備、胡瓜、茄子の早生種播き。

さて四日が節分、當日妾地方の行ひ方は、此日の朝長き竹竿の端に籠をかぶせ、入口の廂に立てかけおく、晩は五穀飯とて、米の外に麥、大豆、小豆、豌豆など少し入れて飯に炊き、ちよつとした菜を煮て、山椒の箸をそへて御飯を神佛に供ふ、人も皆山椒の箸にて食す、夕飯後面白い俗なまりがある、炒豆を撒き鬼は外福は内と唱ふ、此豆を炒るに茄子の木、ぐみの木、繩

など焼きて炒る、さすれば一年中、茄子の木ぐみの木細など焼きても神佛に恐れ無しと云ふ、其又豆の中へ香の木の葉を入れ、暖めて臍に當てると其年風邪におかされないといふ、さて先の山椒の箸を二つに切り、髪の毛、葱、鰹節とを燒きて刻んだ箸の端にてすりつぶし、之を入口毎の戸或は壁の間に挿して鬼を除ける其時の唱へ言は「やい案山子の候高田の婆さん屁をひつた、しやらくさいなア臭いなア、ぷんぷらぷーん。」とこんな言を唱へる、此夜柿の木を山刀にてたゝき、「柿々なるかならぬか、ならぬと叩き切つてしまふぞ」と云ふ、他の人が「なります〳〵」と云ふと其年澤山なると云ふ。炒豆を三粒茶釜へ入れ、中を見ずに杓にて出し、食べた人は福が授かる、又炒豆を紙袋に入れ、竈の上に釣し置き、春雷の音を聞いた時皆々食べる。

右は妾地方のなんくせとして昔しから傳はつて居て毎年行ひます、又八日には山の神とて此日山へ登るべからず、朝餅を搗きて神佛に供ふ、十一日紀元節、各戸國旗を掲げ、主人は報德會、兄弟は講習會、などに半日費やす、十五日お釋迦樣、寺院では釋迦佛涅槃の御畵像をかけ、藥粉を供へ參詣者に振舞ふ。

さて食物は一月と同樣、果物は大方盡きて無し、下旬には鱒、田螺を捕へて食す、魚類の如きは臨時の膳にも上り兼ねる。

（評）田舍の習慣迷信は趣味あるものなり。なほ繼けて投ぜられたし所々自己の感想なども入れられたらば更に趣味あるべし。

○ちーちゃん

金澤　越野芳子

ちーちゃんとは妾の内の坊チャン、チヨーチ々々、アワ、ヽの時代は去年と過ぎて危險盛りの今年は三ッ、年にも似合はぬ大がらな骨相に肉附の豊かな乳色の肌は稍々熟した林檎の樣、通つた鼻筋、黑目勝ちの圓き眸は涼しさの塊とも見えて薔薇の蕾の樣にしまつた口元はいつも盛りきれぬ笑を漂はせて兩頰には小指の頭で一寸突いて出來た樣な笑くぼが現はれさう、父にも似ずさりとて母にも似ず如何してこんな可愛らしい生きた市松人形が生れたのやら。

メリンスの荒模樣の改良服仕立の袷を丈け短く褫附の白き西洋前掛の下よりは赤色の靴下微見せて網上げの靴穿きたる足元辿々と此間御文ちやんに京都からのお土產に頂いた海軍帽をあみだに被つた其の凛々しい無邪氣な姿で妾の袖へからみつき、淸き眸に玉を浮べて「チーチヤン」、朝出る時は淚ながらの其姿、歸つた時は樂し相な得言へぬ笑を湛ふる其姿、妾は可愛いやら、嬉しいやら、此爲には如何んな不平も、憎惡の念も、怒りも、恨みも、亦如何なる不快の念も立所に消えて：：否寧ろ餘儀なくされるので自然自分も何所となく

神聖な神々しい心地になつて今迄有つた魔神はいつしか其姿をかくし清々とした氣持になると直ぐ抱き上げて暖き頬に接吻するのが常て有る、てすから歸りがけに御友達の所て頂いたお菓子なんかは食べないてお土産に持つて歸るので袂へさへ手を入れゝば直ぐに御辭儀をするので出して與へる時は亦ひとしほ嬉しい感がする、併し此最愛のちーちやんは御氣に召さぬ事があると非常な惡戯をするので殆んど毎日御母さんに御小言を頂戴するのてす。

或る日曜日起ると直ぐいつもの通り接吻を與へ朝飯をすましてちーちやんは御隣のお孃ちやんと外へ遊びに妾は二階で机に向うて作文を作つて居ると何うも好い文句が出ないので目を閉ぢ横になつて考へて居ると下では御母さんの聲で「御二階にはオバケが居ますよ」、續いて階子段を上る小さな足音とん／＼、枕元の襖を開けてニコ／＼しながら枕元に正しく座り込んで兩手を膝に、「チーチャンオッキ」妾はわざと知らぬ顔をして殊更いびきを高く狸寐入をして居ると段々顔を突き出して遂に生暖な、やはらかな鼻息が妾の頬へかゝる迄近づいて矢張り「オッキ」を繰返して居たがもう駄目と思つてか、矢庭に机に向つて驀進！と思ふと早や我多犇と音がするので是はと思つて起きて見るとまア：：：赤インキの瓶は轉覆されて邊りは一面唐紅の其中に前掛にはいくつも日の丸を畵き、紅の兩手を振り上げて「チーチャンババヽヽ」まさか怒る事も出來ず三ッ々四ッの男の子の惡戯するのは寧ろ當然の事、わけて大きな番人が居ながら：：言はゞ自分の不注意、よしやさうでなくとも最愛のちーちやんだもの妾は指一本指うとは夢にも、：：ちーちやんと妾との間は益々親密を加へるばかりてす。

（評）　幼兒の態見るが如し。

○忠僕斑

姫路　濱田さゑ子

「吾が宿に誰か來ぬらん飼犬の門にとがむる聲のきこゆる」思ひ出づれば去年の春なりき。父君に伴はれて總社のあたりに、花見せし歸るさ、城南練兵場の中程のいと大なる榎の木のもとに、四五人の童手に／＼杖を持ち罵り騷ぎ居るに、何事にかと立ち寄り見れば、あなあはれ、一匹の小犬を取り圍み繩もて頸のあたりを縛め幹につなぎて、恐れおのゝけるを打てるなりき。妾はあまりの憐れさに如何にもして助けとらせんものをとて、父君に訴へ幾何かの銅貨と替へてぞ伴れ歸りける。名づけて斑と呼ぶ、そは天鵞絨の如き背に、眞白なる斑毛の三ヶ所計り散りたれば。斑や、長じゆくまゝにいと可愛く、妾が朝な／＼の登校には必ず校門まで送り、退校の時となれば又門におりて迎ふると少しも變らず。黑き天鵞絨の背白妙となりゆく雪の旦も、白く短き足の泥に沒する雨の日も。

或る時、妾友がり行きての歸るさ、福中橋を過ぎあやまちて木履を流しぬ。こは如何んせむと思ふ折しも、斑忽ち一聲高く吠え、身を躍らして流れに投じ、浮きつ沈みつ、遂にからうじて拾ひ來りぬ。頃は霜月末つかた。

又或時妾風の心地にて打ち臥しけるが、斑履脱石の上にひざまづきて去らず、頭を垂れて憂ふるものゝ如く時々妾が枕邊を望みて細く悲しげなる聲に鳴くさま、いと哀れ深く、さながら妾がいたつき如何と問ふが如し。病癒えし朝自ら起き出でゝ雨戸打ち開き斑、斑!!、と呼びし時、木の間よりまろび出でたる彼れ如何に喜しよ、恰かも狂せしが如く、高く躍り低く吠え西に走り東に馳せ、庭下駄穿ちて下りたてば頭を振り尾を搖し裾にまつはり足を甜め、妾が朝餉たうぶるを見て、初めて彼も食事しぬ。斑が妾の爲に心力を盡すこと、概ねかくの如し。

嗚呼斑よ汝は今宵何を認めてかくはとがむる。餘り咎めて惡童にな憎まれぞ。汝は我が愛犬ぞや、汝心せよ斑。彼等は汝に仇せん。汝打たれなば如何に妾は苦しからん。妾は汝を庇護せん。誓つて。身にかへて。

實に〳〵汝は恩を忘れず、妾がためには命をも顧みざるの義僕なり。實に汝は妾が家門を守衛するの忠僕なり。たゞに犬の龜鑑たるのみかは。權掌侍稅所敦子刀自の歌にいはく。「ねざめして門もる犬の聲きけば、人はつとめにたゆみけるかな」。

（評）歌を首尾に置きたる興あり。

嚴島濱蒸岩（課外）　大坂　今井千代子



○夕暮の數分間

紀伊　森井春圃

身に墨染の衣をまとひ、口に稱妙となへつつ行く雛僧あり。今しも麥畑のつくる所に見ゆる古寺へ、白き胡蝶に追はれつゝ門内に入りぬ。

長閑にてらす春の日は、今や名草山の一角に殘りて、うるはしく天地をいろどりぬ、アヽうつくしの夕の空かな。飛び行百千鳥の、塒求むる其聲は、この夕を告げわたるが如し、西の山の端をちぎれ〳〵の雲は、赤に黃にあるはむらさきに、夕日影にいろどられて、いづくともなく馳けりゆく、其のゆく衛こそげになつかしけれ。

あはれ其夕の雲よ、汝こいろしあらばしばし妾を、打のせてこの塵深き世の中を逃れ出でゝ、浮世のちりに

まみれざる、空とほき淸き光のある所に、つれ行きくれずや…。

日はいつ沈み果てけん、夕映はやくもうすれて、東の山の端より鉛色を襲ひて、一刻一刻、西の方へとひろごり來りぬ、暮煙は淡くわが世をつゝみ、山々は灰色になりぬ。折しも眠よりさめいでし、宵の明星は、光つめたく空のあなたに輝きそめたり、遠く消えゆく白帆のかげ、のどかに眠れるかもめの群れも消えゆきて、西の夕燒も叉雲の光も、漸く銅色にうつりゆきぬ。このうるはしき夕暮を、ひとりさまよふ妾は、聲はりあげて歌うたはんと、日頃好める夕暮の詩を、うたへば、こだまはかすかに尾を引きて、かなたにて人の應ずるが如し、かくてこゝの林、かしこの村、さては名草の山も、和歌浦も、全く暮れはてゝ、み空には星の亂れ出でゝ、そこに靜けき夜は來りぬ。

（評）春夕亦悲感を誘ふ。

○哀れ白菊

岐阜　靑木勝子

强記の諸孃は、去年文壇の一方に其秀才をほのめかしたる白菊女史の名を聞き給はじ、思ひ起し給はん事もあらん、さても哀れ、女史は深き悲みに蔽はれて、今は雪降り積る信濃の山奧に、音信すらも絶たれて朝夕を、送る涙も凍る世の冷たさをかこち居給ふぞかし、女史が世に絶ちし最後の筆の痕。

其一、せめて一目…えゝそれすら…、例の事共悟り給ひし繼しき母君には、一刻も猶豫ならじと聞も及ばぬ山深き國に伴はせ給ふ、今黑うなり行く上野の森に對うて妾は云はう樣なき、悲しさを覺え候、それにつけても思ひ出づるは彼君が得意の琵琶歌…「王照君は今は早や、涙と共に花の都を立ち出でゝ」許し給へ、最早や目が見えず相成候…彼君に宜しく傳へ給ひてよ…、住み馴れし都に名殘惜みつゝ○○女

其二、愈よ今より山四つ五つ越えて寂しき牢へ…、之れが筆にて御目にかゝる最後かと被存候昨夜も知らぬ夜鳴鳥の聲を曉の鴉と聞き違へ申候彼君に宜しく……

長野にて其方に走る滊車の煙眺めつゝ○○女

其三、けたゝましき梟に、眼はいや冴えて萬籟聲なく、幽寂の苛責に妾は氣も狂はんばかりに候、彼の厭しき死も恰ど今の妾には、如何に心安く候はむかと被存候、只心に御姿を書きては消しつ、消しては書きつ、いつ又誠の御姿に…。

何卒彼君に斯くと、すがるは君の御手のみぞ！

見れば懷しき救の神、郵便脚夫にそと托しつ○○女

涙に浸りし血の文字！吾れが犇と相抱いて泣きしより秋は逝き冬は來り、冬は暮れて世は梅の香充ち、柔

き春の風吹けども、そよとのたよりだになし……、あな哀れ……。

（評）いやらしき節無きにあらねど兎に角同情を起さしむる文。

○鉛筆の愛

姫路　い　も　子

私は米國から來て舶來店に出されると貴婦人に買れました何と云ふ幸でせう、壁に落書の憂目も見ずに。私は出來る丈忠義を盡さねばならぬと思ました處が歸と直彼人に上たら何程喜ぶかと云はれた、アラ何處へかと私はガッカリしましたが直に思ひ返し何處でも忠實に働けば此人の譽ですと思ひました、朋友「ペンごむ」と一處に包れて二日後愛ら敷孃樣に是失禮よと渡されると、有難開て見て！あ嬉い、香しい胸に抱れて暫時夢心地、運算や筆記や、其樣に用いません、大事に君と思うてと云れました、ペンは筆立にゴムは其儘。私は孃樣の懷に何時も、時々貴婦人も眼て莞爾なさる孃樣は稀に私を一人殘されませぬ又何程親い人にも私をお貸なさいません、一月計後私を削てなさる時何か惶忙しく呼立られて其時切私を置て行かれました早く歸て下いと待つ中に待たぬ高樣が此れ借ると懷に、走るとたんに滑り落たは流し許の溝の中。一寸先は暗の夜、實に私は此樣辛い事になりました、其寄か孃樣が何程捜ておいてかと思ふと溜りません、漬物の水や生臭汁が流て來る毎に懷敷き懷を慕て泣ます然も若孃樣が落なされたら其こそ大變、若私が代つたのと思へば悲い處でなく感謝です、五日許過て料理人が此樣好い鉛筆がと拾て洗て吳る時丁度孃樣が、アレ！どんなに探したらう、金具も此樣汚くなつて、あら割るわ、でも金嵌して置ば持事丈出來る用ひずとも。何程私を愛して下さるか勿體ない膠が離れて御用に立ず汚た水が浸だ私を矢張懷に抱かれて。お湯の時机の引出に置れた後へ小二郎樣が來て出して二に割て心を小さく小さくめちや／＼に折られた。私は思た萬分一も盡さぬ内に此樣無殘な事計り、是皆私の運命と斷念しますが孃樣が今に何程お嘆なさらうかと在るにも在られぬ思がします。

（評）新趣向。

○松ある海岸

神田　小林櫻花

東の空はほんのりと、紅を刷いた如く艶て月姫は山の端に現はれた、妾は今宵君子樣と希望ある濱寺の海邊に遊ぶべく前週の日曜に約して置いたので御宿を音づれて共に門を出て海邊の方に足を運んだ、海は靜でサラサラと磯打つ波は十日餘の月に照らされて銀を解して流した樣で其きれいさ……後の松原は畫繪の樣で向ふの方には友が島の燈臺の火がチラチラ見えて風なき平和な晩であつた、君子樣も妾も此景色に氣を取られて塵外の世界に來た樣に默つてしまつたが君子樣が急に口を切つて「松原の方で音樂がある樣ですれ」自分も耳を傾けた「全たくだわれ、松原へ這入つて見ませうか」一條の松原へ通ずる小路を辿つた、浪の音は

微かになつたが音樂は近く聞えてきた「向ふに人が居ますよ」「どちらに」姿は松の頂より斜に照らしてゐる月光ですかして見た、何たる詩的な事よ美しき可愛き少女が淋しい此の松原で樂器を弄するとは、と胸中で思つてゐた、友の心も大方さうであらう、君子樣は太息をついて「あゝ」と仰つた聲が少女に通じたか同時に樂は止んだ、去年の秋君子樣は妹樣に別れし事を思ひ出されて今の少女は妹樣と瓜二つと云ふので急に首はうなだれてしまつたのである、君子樣はさぞ悲しい事であらうと我身に引き較べて、もらひ泣をした。

◎雲

本郷　大伴　夏子

月の艶なる、花の美はしき、とりどりに、おもむき、あるもの、なれど、また、雲こそは、げに、すぐれて、見所多き、物なれ、おぼろの、空に、匂へる月を、口無色の花雲漂う、こめたる、などは、優しう、ほゝゑめる、天津乙女の、佇む、にやと、ゆかしう、もながめやらるゝ、又富士の高根あざやかに、夕映せるあたりに、金色のちぎれ雲、軽うゆらげる、遠山の端に紫に棚引けるを、光れる桃色もて、ふち取りたる、秋の氣殊に、すみまされる、あたりを、五彩のあやに、流れたる、さては、暮れはてし夕の空に、紅ときたらんやう、一筋の名殘を、留めたるなど、朝に夕に、月に風に、おもむき、さまざまの眺めを、動き行く雲の姿のおかしさよ、いかでか、月にも花にも、劣るべき。

◎春の小品

滋賀　辰井　琴子

春宵

練りの薄絹に包んだ樣な朧月は、何處よりともなく吹く軟風に花の香を傳へて、そゞろ青春の人を惱殺する、此の春の女神の御姿も拜まれさうな春宵を、郊外に憧憬れ出づれば、誰が子が奏づるのであらう、微にかくれた花の蔭から幽かに笛の餘韻を送るのである、おゝ平和なる人なつかしき春宵よ。

晝

春の女神が人の子の見ぬ間にと朝疾く臙脂を融いた御化粧ひの水は、桃櫻などの花に滴つて、春光暖かにみ空一面紫の帳に掩はれる頃には、露と成つて輝いて居る。陽炎は地に燃えて緑の若草に映じ、雲雀は高く天に讃歎を誦し、雄蝶は雌蝶と共にこゝ我が樂園と花に戲れ、霞は烟の如く楊柳をこめてゐる。

春がすみ

眼を擧げて彼方を見ると野に山に一樣に靉いた霞は、平和の春光を籠めて、近くにある菜の花や櫻の花のために彩られて虹さながらである。

桃

濃艶を極めた桃は言ふまでもなく、深き春を代表してゐる。

梅

淡雪降りかゝりたる中に凛として高潔な花を着け芳ばしき香りを薫らしてゐるおゝ氣高きは梅よ。

◎春のあした

讃岐　茂子女史

曉の鐘にたのしき夢路も破られつ、日さむれば、きのふの細雨名殘なく晴れ渡り、あり明の月かげ淡く峰頭にかゝり、背白き星の南に北に殘りかゞやくもいと心地よし。玉蕾ほころびて暗香あたりに浮動し、鶯のふしおもしろう鳴くもおかしく、翠を含む柳の露の滴らんとして微風に亂るゝ態、さては山、澗、里、草原といはず霞のたちこめつそがうへに朝げの烟、むらむらのぼる景色など、いとゆかしき心地ぞする、やがて靉靆たる紫色の雲間より朝暾の光りかゞやけば朦朧たりし江の水澄みわたりて燗紅をたゝへ、鷗閑かに浮きつ沈みつ、戲れ遊ぶも面白し。遠くかなたの長堤をたどり行く女兒は若菜摘みにやたのしげに、歌口吟み行く姿最と艶麗に、こなたの翠柳の邊りには、低けれどやはらぎに滿ちし家一つ、老媼の糸績ぎつゝ、舞ひ狂ふ蝶を眺めてほゝ笑めるもおかしく、そゞろ醉ひ心地に眺め居けるに、いづこよりともなく欸乃の斷えつ續きつひゞきくるに魂も消えなむかとぞおぼえし。げにたのしきは春のあしたにこそ。

◎友の便り日記

北海道　白菊子

十一日——雪を欺く白薔薇のやゝほころびた花の下に「けがれなき此花の樣に身も心もあやかり度候」優しき君よと心にほゝ笑むで表打返せば、東の都にて寧子よりとのみ。十二日——哀れ鈴蘭草の花も殘りなく散り果てた夕、病の床に果敢ない

身の上を思ひわづらうて居ると、郵便!!交際家の操子女史より勢ある文鋒の跡は快くも飛び立様なみ言葉、終りに「みゝずのダンスお笑ひ下さいまし」こよなき慰藉を得たので胸の痛も稍うすらいだ。

十三日——花の姿に晴小袖、羽子つきかはす乙女子の美々敷絵葉書に「今は早七度の春秋を空しく過した昔の貴女と妾の姿なのよ」明けて十九の春を迎へられた瀧子様より。

十四日——神の化身の白鳩、其嘴に小きフォールゲットミーナットの花睇める床しい絵葉書に「姉様よ此花の意永久に愛して下さい」

白菊子様　撫子より

十五日——見るかげもなく痩せ細つた此手に封切つたのは古里の友、安子様のみ文、慕敷き御水莖の跡かぐはしく幸うすき身に心同じうし給へる優き、涙もろくも御文けがして。寒國には珍しいてせうと封じ込め賜ふた梅花の薫床さに醉ふ心地して夢路に入つた。

○田舎の春

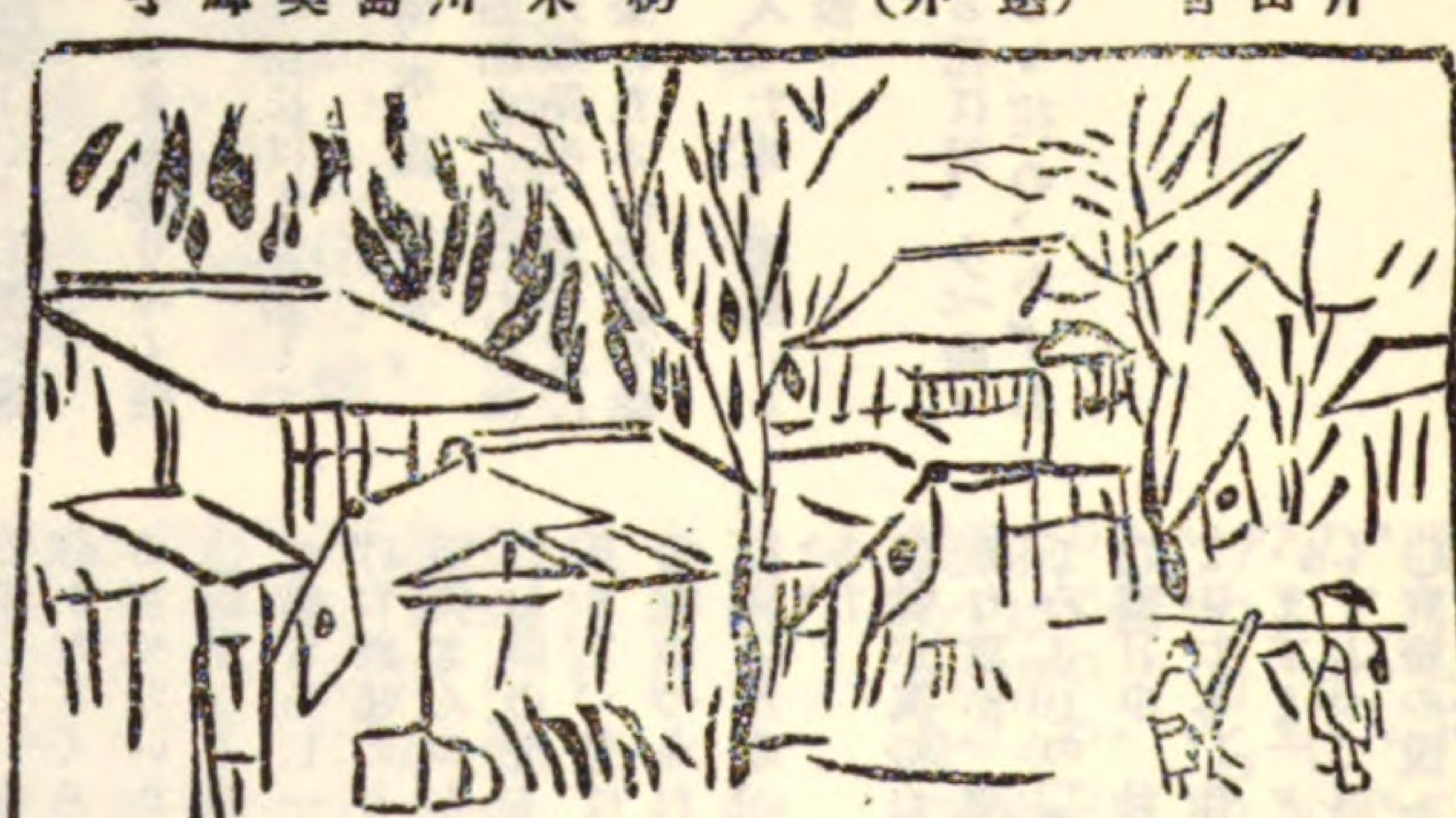
尾張　秋の蝶子

今日は日曜日なり安息日なり、殊に空晴れて暖かなれば、心も浮き立ち、如何て室内に蟄居して讀書せんとするも、心此處にあらんや、降りつもりし白雪のそれの如く、つもる鬱をば晴らさなんと、飄然家を出て、田舎路を辿りぬ。

天色清麗塵雲なく、春風駘蕩微薫を送り來る、朧圃一望涯りなく、麥浪しきりて恰も毛氈を布きたらんが如く、一條の流れ其間を迂曲す、彩霞遠山をこめて、糢糊たる、何ぞ其好景なる。

長堤十里百草は嫩芽を萌し、新柳は微風に媚びて招かんとする如し、招くまゝに其方に行けば、垂れたる枝もて我頬を弄ぶ面白さ、行くうちに黄鳥の睍々清音を弄するを聞く、ふと見れば、誰の住むらん雅趣多き家、垣根に添ひて老梅樹數株、吹く東風を忘れもせて、咲き揃ひ清香馥郁たり、黄鳥幽谷より出てゝ此梅を訪れしか、吾は玉をころばす如き美音に恍惚たりしが、彼方の細道より、まだ浦若き手弱女が、馬追ひつゝ來りしに驚きて、恨めしや黄鳥は飛び去りぬ、吾は呆然として乙女を見送るに、乙女も振り返り見ぬ、其の頬豊かなる林檎の如く、目許飽くまでやさしく、手拭を姉様冠りしたる風情のしほらしさ、やがて乙女は一町程過ぐるや、黄鳥にも劣らぬ清き聲はり上げて、追分唄ふなり、あゝこれ吾への謝禮か?。吾は乙女の見えずなるまで見送りやがて吾にかへるや足運ばせつゝ、とある森に出てぬ、見れば姉弟ならん幼な子二人、砂地に何やらん書きては睦じく笑ひ興じて遊ぶなり、忽ち一羽の胡蝶ひら/\と飛び來るや、二人は追ひつゝ戯れ遊ぶ、其天眞爛熳にして無邪氣なる様、二人も蝶と共に天國へ上りて遊ぶならん。やがて日の西の山に入る頃、家路をさして歸りぬ。

片田舎（選外）　栃水　川島美輝子



○春光斷片

和歌山　奈加谷　とも子

野に山に霞たな引きて春は來ぬ。さればにや冬籠の翁も吹く風に誘はれて、孫の手とりつゝ野づらに出てゝ遊ぶなる。何處ともなく逍遙へば、奇しき香の鼻にせまり、樂しき聲の耳に通ふ。げに春の賜にこそ。天使あまた下りきて暫し花に眠れるひまに、そが靈のぬけ出てゝ胡蝶とこそ化せしか。沈默にして姿の優しければなか/\に愛せらるゝぞかし。蜂はその臀におそろしき毒刺をかくしたれど、花に舞ふ折はさるものとは見えて、長閑かに唸りつゝ足を長くたれたる様こそ却て興あれ。雲雀の高く雲に消ゆるは、エデンの園にや遊ぶらむ。やがてエデンの美をたゝへつゝくだりきて係らふ處には紫の菫あり。アヽ雲雀やいつの頃よりかこの花を見そめけむ。聞かまほし。

薔薇の花は美なり艷なり、其顔の美しきに似て劍を秘めたるはにくし。美なるに迷ふ人々心せよ。白き牡丹の結目正しき庭に開けるは聖人の面

影あり。椿の赤きは田舍娘の化粧したらむ如く何處となくいやし。されど藪かげなどに咲き出てたるは、さすがに見すて難くこそ。最も人の心を動かすは櫻なり、そは此花の盛の短ければなり。綻びてはすぐ風をまちて亂るゝ最後の潔よきは武夫にも似たりけり。げに櫻の譽は一時に咲きて一時に散る處にぞある。賤家の軒に笑へる桃は長閑けく、花甕が籠に入れたるは哀なり。見るもの聞くもの何れ面白からぬはなき春を、見すてゝ立ち去りゆく雁の心こそ解し兼ぬれ。

かくなん記し終りて推す窓に、花の香は馥ひきて、み空にはうす絹もて包める如き朧月ぞ圓やかなる。

○御花畠

福井　橋本喜代子

妾等が、白山登山の際、光りに滿ちたる、一幅の、畵帖と、思つたのは畵帖に非ずして、妾等の、弱き足を慰めさせ給ふ、天堂界の、惠て實に錦の様な、お花畠であつた、で思はず「あゝ夕日に榮えたるお花畠を眺めずてやは」と、さゝやいたのである。

また、實に、謝すべきは、妾等が、此の天堂界に、入つた時、蜜雲いくつともなく、ちり／＼になつて、二すぢ三すぢの銀箭！

仰てこの靈あり俯して如何。

天童あしたに迷霧を破つて銀箭を射、神にさゝぐる花は何、夕べ皓々たる月光を、たどつて、なよらなる汝が手に手折らるゝ花の、かずかずは。

紫に匂る花冠は、白山薊。

紅にいためるは、小百合。

そよ／＼となびけるは、黄なる蕾くろき百合。

白山女郎花や、小櫻草。

折りに交るは御山旗竿、白山桔梗。

われらが、知れる色彩はこゝに措されぬ。

これらの花が雲に霧に、たてぬきに織られて、汚濁なるわれら俗界のもの〻、前に展開せられたこの瞬間、心のいつはりは、もはやないのである、心のなやみは暫し忘れられたのである、しばしはこの壯美の感にうたれて身動きもしなかつた。

やう／＼心づくと一行は、ずつと先にすゝんだので、いや／＼こゝをはなれたのである、五色岩に達すると御花畠は見えなくなつた。

○落葉集

麴町　重田葉流子

○見ると、庭を掃いていらッしつた父様の、琉球紬のお羽織の背中に、細かなざくろの葉が五ッ六ッついている、取らうとしたら、「しやれてゐるぢやないか」、と父様おわらひなされた。

○親愛なる婦美子さんと二人、野へ遊びにいつて、小川へ落ちたところて眼さめた一夜、眠られないので、玉ランプをつけたら、違間庭からあげた鉢植のもみぢの一葉が、黒い机の上に散つてゐた、あしたおきたら婦美さんのところへ封じてあげよう。

○お隣の愛ちやんが、何かきいろい物を頬へあててこすつてゐるから、見ると、黄ばんだ柿の葉、「すべつこいのよ」とすましたもの。

○夜のつめたい氣が身に迫るので、ぢいーと肩をすぼめて、限なき月を仰いだ時、皓々とした月の光をさへぎつて、ひらりと高い榎の葉が落ちた。

○霜が眞つ白に庭をかざつた朝、窓を明けて見たら、すぐ前の錦木の眞赤な葉が、澤山落ちてゐたので、奇麗なのを拾つて來て、歌を書いて、よみさしの「ヴェルテル」の間へ入れた。

○饗日中、妙に煙つぽくて、火のもえる音が聞えたから、裏の方へ行つて見たら、作平が一人て落葉をもして焚火をしてゐた、「あつたかうございますよ」といふから、そばへよつてあたつてゐたら、「折角白い顔が、くすぶつて黑くなるよ」と父様が窓から首を出して……。

○宵暗の道を一人郵便出しにいつてかへつてくると、母上が「前がみに松葉の枯れたのが一本ついてゐるよ」とおつしやつた、「詩的だわ」といつたらおわらひなすつた。門のわきの松だらう。

○詩集手に、庭のお池の岸にたゞずんだ夕暮、桃の枯れ葉が水に浮んだのを、二疋の緋鯉がつゝついてゐた。何とはなしに興を覺えて、思はずほゝゑんだ。

論文

文學士沼波瓊音先生選



◎地

○感化

神戸税關官舎六號　勝田かつ子

一

我家の向ひに菱の家と呼ぶ料理屋あり。日夜化粧せし浮れ女の出入絶え間なき有様なり。

或る春の一日、見知らぬ年若き一人の女が、二楷の欄干に寄りかゝりて、いたく物思ひに沈み涙ぐみし眼に、淋しく夕暮の雲の様などながめゐるを見たりき。

憂多き顔の殊更青きまで白う、房々として濃き黒髪、羊の如く優にやさしく愛らしのまなざし、決してかゝるいまはしき場所に生ひ育ちし人とは見えず、いづれ堅氣の人の子なりしならんも、家の貧しき爲め親など助けんとて、やむなく身を賣りたりし人ならむと思はれき。

二

春雨のしと〳〵と小窓打つ朝夕、彼女が涙にくもる聲張り上げて、心にもなき三味などの稽古なせるを聞きぬ。折には抱主の意に滿たぬことありてか、物などなげつけられ、言葉きたなく云ひのゝしらるゝをも聞きぬ。

我は常々此聲此音を聞く毎に、社會の冷酷なるを叫び、彼女の身の上をあはれと思はざることなかりき。

三

其後我は物學ぶ身となりて家を去りき。都にいてゝ後も折にふれ事にふれては、あはれなる女の身の上を思ひ出して、その如何になりしかを氣遣ひゐたりき。

此年の暑中休暇再び我が家に歸りし時も、かの女の消息を聞かんものと心懸け居たりき。

三味箱たづさへし男を從へ、褄高々と取上げていそいそといで行く姿、我はわが眼を再三疑ひぬ。されどされどそは我が眼の誤にはあらざりける。

變れば變るものかな。涙もてしめり勝ちなりし彼女の顔は、今はうるはしう白き粉もて彩どられ、不幸をかこちし唇はあでやかに臙脂をさゝれたり。

昔涙もてたゞずみし二楷には、うれしげに鏡に向いて

化粧せる影朝夕見られぬ。

昔と云へば昔、僅か數ケ月の日子の間に、人は周圍の感化の如何に由りては、かく許り心の奥の奥まで變り果つるものにや。此れを思へば我等も知らず知らずの内に、友人の暗示家庭の感化を受けて。日一日と其性格を變じつゝあるならん。嗚呼此の感化の力は善に於ても惡に於ても、恐るべく偉大なるを思ひ浮べては、轉た身に粟するを禁ずるあたはず。

（評）一女子を捉へ來つて感化の力の偉大なるを說くところ、流暢にして輕妙。

人

○悲觀すべからず

長崎縣南松浦郡福江女兒小學校内　山田ぺん子

人世決して悲觀すべからず、悲觀する者には、希望なく、光明なく、理性なく、心中全く闇黑なり、身躰のみは、動くとも、精神既に死せるなり、此の世の人と言ふべからず、かくて形骸のみ現世に長らふとも、亦何の益かあらん、むしろ、形骸と共に死すに如かざるなり。

五十の人生、一炊の夢といはゞ言ふべきも、年毎に花開き雁來る、思へば又短きに非るなり、而も運命の神は、よくこの人世を支配す、我等は、終にこの運命の支配を脫する能はず、さればこそ、世は憂き事も多きなれ。

親を失ふあり、子を失ふあり、夫に別るゝあり、妻に別るゝあり、病に惱むあり、貧に困むあり、あはれ、この時に當りて、人誰か淚なからん。

不幸に悲み、不遇に泣くは、人情元より然るべき所、我は、之をしも惑へりと言ふに非ず。

されど思へ、天は決して人を悲哀の淵に沈め去りて、枯木冷灰たらしめんとする者にあらざるを、又思へ、我等をして、奮勵せしむべく、常に刺激を與へつゝある事を。

されば、一度は泣くべし、悲しむべし、されど、再びは泣くべからず、一度泣がば飜然として悟り、決然として發奮すべし、而して悲哀を轉じて快樂たらしむべく、奮勵せざるべからざるなり。

苦あらざれば、樂もなしとか、一度悲しみし者にこそ、眞の嬉しさは解するを得るなれ、故に、悲哀は快樂に進むの第一歩なる事を、決して忘るべからず。

（評）くだらぬ事に煩悶し懊惱し悲觀する女子多き今の世に、かゝる金剛不壞の大勇猛心ある女子を見る、慶すべき哉。

秀逸

○信仰

茨城　石塚靜江

心に惱み悶えのある人、世にあはで住み佗ぶる人など信仰心ありたらんには、いと〳〵心安けく憂かりける現世も樂しくなりぬべし。神にまれ佛にまれひたぶるに信仰せよ。抑神とは何ぞ、佛とは何ぞ、そは吾等の胸底にうつれる全知萬能の絕對者なり。影もなく形もなし。名こそ異なれ、其實は相等し。吾等はこれを信仰する心によりて偉大なる慰藉と深嚴なる訓誡とを聞くを得べし。妾は彼の神主僧徒等の如く神と佛とを分かたず、兩者の別を認めず、故に神と佛とを合せて單に神と名く、或は世の所謂神佛以外の者なるやも知るべからず、妾は前にも云ひし如く、人間以外に靈妙なる全知萬能の絕對者を認めて、そを神といふなり。



やしろ（選外）　肥後　服なほ子

社殿の奥深く齋き祀れる御幣以外に神なく、寺院の本堂に安置せる佛像以外に佛なしと思ふなかれ。神は何れの處にも照覽ましﾏす。晝となく夜となく寢ぬるときにも起くるときにも、常に吾等をはなれ給はずして終始誡め且つ慰め給へるなり。妾は神を信ず。人は笑ふとも嘲るとも罵るともまゝよ、只々和けく嚴かなる神の御啓示のまに〳〵、その御手にすがり、神の給ひし業を勤みつゝ、世を終らなん。變幻極りなき運命の手は、何れの處に吾等を拉し去るも、吾等は常世に變りなき和けく嚴かなる、この神の御啓示を聞くを得べし。

あゝ妾はまことと神によりて生きぬ。體胖に心寬なり。あはれ世の人々よ。心に堪へがたき惱み覺ゆる時、つきせぬ悶えあるとき、靜に默して神を信ぜよ。只管に神を念ぜよ。さらば其憂惱や煩悶や立ちどころに消えん。しかして後神の賜ひし啓示のまに〳〵に進め、全力を盡して進め。そこに極樂はあるなり。常春華やげる天

國はあるなり。

(評) 健全なる宗教的信仰ある處、そこに安心立命あり。

○理想の死につきて

京都　三島吉子

四時に咲き出てゝ、野邊を飾る花の中に菊を愛する人は菊こそ花の中の花と云ふべけれど。蓮こそはと歌ふ人も世にはあるべし。人の心の咲きいでて、文學に科學に哲學に宗教にとりどりある其内の一を捕へて。全能と云ふは嗚呼の業なるかな。されば文學に趣味を有する人は一莖の筆もて鬼神をも動かし。星學に心を寄する人は兆里の外に遊び。聖經を手にする人は地上の叫を天上に響かしむべきなり。妾等の望もその性に適する者を選ぶこそやがて人の務なれ。實に父母の命に從ひしならば。ラインの河邊に麗しき自由の歌人は出でざりしなる可く、科學者ガリレオなくば羅馬人は永へに地球は動かざるものと考へしなる可し。しかはあれど酒に趣味を有する人は、酒に死ぬをこそ人生の意義を完うしたる理想の死と云ふべけれといふに至りては、妾はその似而非本能主義に驚かざるを得ず。

明日のことを憂ふるなかれ、一日の苦勞は一日にて足れりてふ聖句は。いと尊き教なるを、今日の日課を怠る者共の唱へて高しとするが如きは、偏に讀む人の罪なるべく。氣高き想もて平易の辭句に眞理を示さんとする緋百合女史の君の、前號理想の死の如くば夫いかに。妾は父母の下を去りて二年。舊き都にさすらひてもの寂しき時の姉達の尊き文は時に妾を慰めもし。時に妾を勵ます料ともなり。獨り樂しみしが。春風谷間を渡り、結びし氷も解けそむるまにまに。文の林の片隅に此の拙なき文をものし。誌上の姉なる緋百合女史に呈して教を乞ひ。併せて文壇の門出とす。

(評) 理想の死は情の聲なり、この文は理性の聲なり、ともに理あり、人は總ての事に就てこの兩つの聲に聽かざるべからず。

○女子の幸福

羽後　みどり

妾從來女子と生れたる者を不幸と思ひしが、今や其の幸福たるを覺れり、其は女は世の美たるものの一なればなり、故に美人と云へば直に女子たるを表す、是れ獨り男子の爾思ふのみならず女も亦然り、然らば則ち女子の愛せらるゝ男子に比して優る事萬々たり、其譽れ、其快き、何物か之に如かんや、凡そ人日夜營々として、勉むるは保生の爲めたるべしと雖も、汲々として善を欲し、惡を避くるの念あるは、他に愛好せられんが爲めなり、好し愛好を目的とせざるも少くとも厭ひ嫌はるゝを忌むや明かなり厭ひ嫌はるゝ時は社會に

加り居るを得ず又人格にも害あればなり、今夫れ厭ひ嫌はるゝの反對は即ち愛好せらるゝ事なり、是れを以て之を言へば愛好せらるゝは即ち滿足の一にして確かに人間目的の一半なり、而して女子其の德を自然に得たり豈特別なる幸ならずや、例令アリストートル氏の「愛するは愛せらるゝに優る」の言眞理として女子の愛さるゝは男子の之を愛するものたるに一歩を輸するとするも、先づ多くの人をして愛情を發せしめ依りて以て人を活動せしめ、愉快ならしめ而して自己も亦愛せらるゝに依りて、愛を發し、互に慶福を增す。抑人自ら他を動かす、何の樂か之に如かん何の貴きか之に及ばん、若し夫れ其の躰質軟にして被保護の地位に立つが如き、誠に男子に輸する處とするも、前の優長なる處ありて之を補ふ、未だ餘りとせざるも亦決して男子に劣れりとするを得んや、女子たるもの其れ自高うせよ、而して決して美に誇る勿れ、敢て其れを賣ること勿れ、眩惑する勿れ、誇れば天理に背き眩惑すれば美を汚し、又自己を損す。愛は神聖なり、私にすべからざるなり。

（評）この人一種の眼あり、意味の聞え難き所あるを惜む。

○罪

赤坂　齊藤棠桂子

最愛なる女子文壇！親密なる愛讀者諸姉！

此雜誌の生れし時われはいと嬉しさに文の師とのみならず、心の師とも思ひつゝ親しみし、此雜誌！誌友の君たちもさは思ひ給はずや、さるを此花の誌上に黒きみ名を出し給ふとは：：他の人の心こめて作られし物を我物にして賞に入り給うて、うれしく思ひ給ふやげに其心のいやらさよいかなるみ心にてかおはす？一時の利を得んとてか、はた、一時にても、誌上に歌はれんとてか、げに其御心のあさましさよ。

必ず！其君たちの御心は虛榮心にみち給ふらん、されば其社會に活動し給はん時も、己が利の爲めには、道にはづれし事もなし給ふらん、犯しゝ罪の知れずと思ひ給ふや、ォゝかくれたるに居ます、全智全能の神樣は見給ふを！はや罪くひませな君たち！神は許し給ひてみ心にやすきを、あたへ給ふよ！誌上に投書なすは皆己が修業のためならずや、たとへ、選外沒書になるとても、己が心一つにて、熱心に作りし文のいかに、潔く美しきよ！社會に活動せん時も、正しき道を進み行かば心け高くなりぬべし、いかに財産名譽は高からずとも心は常に安らけく、之より、潔く高き位はあらざるなり。

（評）眞に然り、余は不正なる投書家の多きを寧ろ不思議に思なり、彼等は好んで「たのしみ」に遠ざからむとする輩なり、但しその不正なるを看破し得ざるは選者の恥とする所なり。

○剽窃詩文投稿者に

八重子

剽窃文續々と誌上に顯はる。憎む可き仕わざ也。賤劣なる仕方也。躰のよき盜賊なり。法律上の制裁を受けざる大罪人也。

初めて剽窃文を投書せし晩、必ずや寢醒め惡しかる可し。如何なる鐵面皮なり共少し位は心配な事なるべし。運よく天賞にても入れば蔭でベロリと赤き舌を出して居るなる可し。されど其れが幸に他人の眼にふれざればよく〳〵惡運の强き者なる可し。

剽窃するのが好きな人は遠慮なくどん〳〵するが好かる可し。他におかまひなく威張つてなさる可し。唯自分が恥をかきて人に笑はるゝ迄なり。原作には一寸も影響を及ぼさぬもの也。一度出た名を二度も三度も掲載されて却つて其の人の爲めにはよきなる可し。名聲が餘計に多くの人達に知られてよかる可し。

若し自分が面目を失つて原作者のお爲めを思ふ人はどしどし剽窃文を投ぜらる可し。我等はあらん限りの力をつくして其の化の皮を引きむくにつとめん。さらば諸嬢よ幸に健在なれ。

（評）大に引きむくべし

○花

下谷あきつ子

花、あゝ花程世に美しく優しく人に慰藉を與へる物はないであらう。實に花は世界の裝飾である。若し花がなく世界が綠の草木計りであつたなら、いかに無味乾燥で殺風景であらうか。花には皆特性がある。例へば梅は高潔で氣品高く、霜雪を恐れず節操を全うし、櫻は春の生命と迄歌はれても、誇る榮華は僅の間、一朝散つては昨日樹上の花今日は地上の塵とまみれて人に無常を悟らしむる等、其他各特性を發揮して人に歡樂を得しめ、又自ら比喩となりては人に敎ふるが如き、我等人間の感謝に堪へぬ所、そして花は色計りでなく香も持つてゐる。風が傳へ來る梅、木犀の香、佳人が愛する薔薇、菫の香、誰か好まぬ者があらう。

夕逍遙に興を得て詩情うたゝ止難き里川のわたり、其時岸に色美しく咲いてる撫子があつたなら、誰しもまあ可憐なと思はず好詩材を得たのに微笑みを禁じ得ないであらう。連れもなく一人、淡い夕月、寂しい空の色、哀れな氣が迫まる黄昏秋野を過ぎる旅人の、道の傍にしほらしく野菊が咲いてるのを見た時の感慨は如何、必らず疲れた身をも忘れ、優しい花よと手折つて寂しい旅情を慰めるであらう。

幾多の勞苦を忍で育てた稲に花を見た時の農夫の喜。病む時友より温情を籠めて贈られた花に對する感謝、實に花の前には虚僞なく、邪念なく、人の心は此瞬間程清い時はない、誠に花は人心を清くさせる徳を持つて居る。或は崇嚴、或は高潔、或は濃艶、或は優麗、或は質朴に、皆夫々人に快樂、慰藉、詩情を與へる花、あゝ實に花程貴ぶべき愛すべき物はない、而して誰か又花の如くならん事を願はぬ者があらう。否必ず學を究め、智德を磨いて花の如き精神を發揮し、芳香を放たん事を心がけねば成らぬのである。

（評）情ある文なり。

○風　　肥前　すみれ

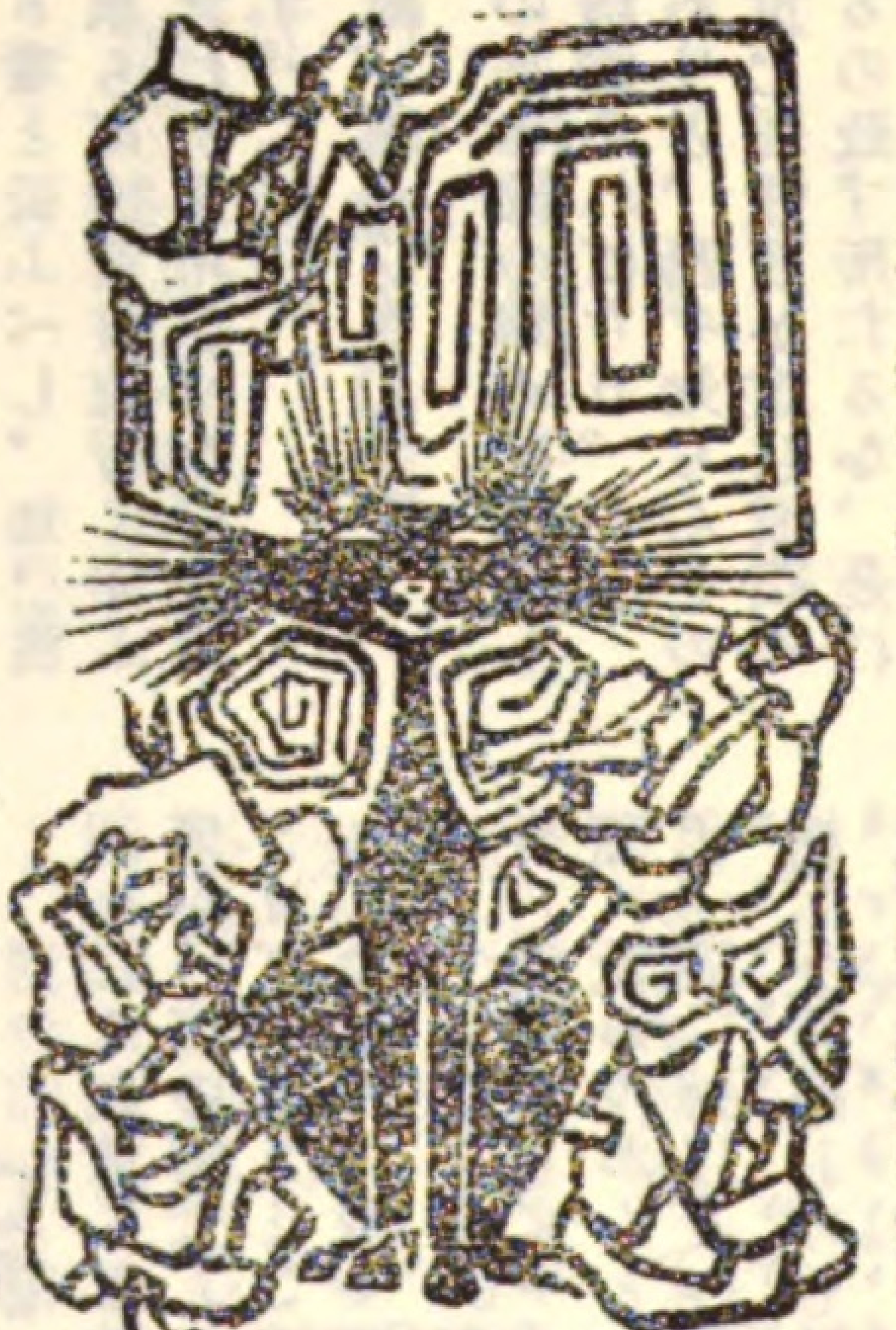
風なるかな、風なる哉、駘蕩として綠野を吹き、颯々として紅葉をはらふ。若き心の樂しきは、嘆き春風なり。老の身の悲しきは、冷なる秋の聲なり。

風なるかな、風なる哉、汝は冬のつきぬるを告げ、秋の至れるを語る。山は汝によりて春を知り、水は汝によりて夏の去れるを覺ゆ。

風なるかな、風なる哉、汝はかつて小見のために風車をまはしぬ。汝はかつて濵の松が枝に無絃の琴を發てぬ。而して時に汝は家をこぼち船をくつがへしつゝ、海にあれ、陸にくるふなり。

風なるかな、風なる哉、汝はいづこより來りて、いづこに行く、常に行けども行く所を知らず。絕えず來れども來るところを定めず。靈なるかな、妙なる哉。

○硯の雫　　武藏　野本ます子



猫（選外）　京都　秋山すゞ蘭

宇宙の森羅萬象一として詩文の好材料とならざるはなし、何を苦んで古人の糟粕を嘗めむ、などゝの慨慨は吾人の往々聞く所なり、されど之れ云ふは易く行は難し、誰か陳腐を知つて自ら是をせんとする者あらむや、畢竟作物の陳不陳は根本的識才の優劣に支配せらるゝものなれば、到底單純なる便法を以て陳套を脱却すべきにあらず、而して陳不陳の主因とも謂ふべきは、主材着眼の敏不敏と認識の活動如何にあり例令好箇の材料目の前に山を成すとも、着眼し得て認識するの力なくんば駄目也、須く清新なる材料を捕捉して健全なる認識に訴へ、更に自己特殊の才氣を注入して文章を潤飾するを要す。然り而して、文運の勃興今日の如きにありては、實際正直に捕捉せし材料も、詮じ詰むれば概れ先輩の後塵を拜するの觀ありて、陳套の範圍を脱する能ばざるものゝ如し、物數多なれば類似の物隨て多きは之れ自然の理也、故に嶄新なる主材を得んとせば、勢ひ趣向着眼銳敏ならざるべからず、噫、眞正の好作家たる又難ひ哉、妾は今玆に理想の上乘として比較的好材料を得る法を知れり、何ぞや曰く新聞紙是也。現今の小說家美文家にして新聞紙の所謂三面記事に注目せざるなし、之れ小說は浮世の狀態を描寫するを主眼とするが故に、取材と搆想に於て得る所僅少にあらざるなり、又論文の如も新聞紙に採るべきもの頗る多し、吾人は斷言す、大新聞は、文章家の見ざるべからざる寶庫なりと、噫常に文題に窮して煩悶しつゝある者、乞ふ一種冷靜なる文士的觀察眼を以て日々の新聞紙に注目せよ、嶄新なる好材料は滾々として泉の如く盡くる事なけん。

○繪葉書流行の得失　　千葉　田村たき子

近事繪端書の流行殆ど其極に達し。風景に風俗に其他萬般の事物。一として畵題とならざる者無く。新を競ひ。奇を衒ひ。苦心慘憺。刊行世に行はるゝ實に幾百千種なるを知らず。是れ果して喜ぶべき現象なるか。文運の隆盛交通頻繁なる現社會。交際の用具趣味の發達上亦必用なる事は論を俟たずと雖も。而も使用上。實用實利に遠ざかり爲に一種の弊を

條成するに至りては、果して賞すべき趨勢なりと云ふを得べきか。一葉の端書に數金を費して悔らざるものあるは、驕奢なる惡弊と言はざる可からず。夫れ繪葉書の趣味たるや。美的思想の嗜好に投じ。筆及ばざる所畫を以て之を示し、未見の地理風俗を通ずるに於て、文亦遠く及ばざるの利あるべし、將又文學美術上の趣味を加ふるを得て紀念書信として、好適物なりと雖も、徒に奇を好み。驕奢に流るゝは、非とせざる能はず之が蒐集の方法に至りて。殊更に、高價辭美を誇り。之に對する返信を求め、受信者に惡感情を與ふる事なき能はず。或は未知未見の人にまで發送を希望するもの頻々増加の傾向を生じたるは、目的を誤れるの甚しきものと云ふ可きなり。如何に粗畫拙筆なりと雖も自ら筆を取りて花木風景を寫生發送するに於て殊に一段の趣味を得たる者と云ふべし。知己親友より送られて始めて紀念ともなる可し。數へ來らば繪葉書流行に伴ふ惡習慣を釀したる事實亦少なからざるべし畢竟之れが亂用を愼み可及的實用に近づき奢侈に流れざる樣使用するを可とす。

○死を怖れざる精神　下總　越川さき子

吾大日本帝國々民は能く忠に能く孝にして、君の爲め國の爲めには身をすてゝ戰ふ、是れ全く我が國民の死を怖れざる精神あればなり。外國人は曰く、日本人は好んで自ら死するの風ありと。爲ぞ知らんこの風なるものは、この觀念の感化する所吾義務を重じ吾體面を重じ道義の以て狂ぐべからざるを知り、死を鴻毛より輕ずるの致す所たるを、是れ固より世の事に當りて死する事を知らざる歎腸男兒の見て以て奇となす所にして我國人の見て以て怪まざる所也、我が國古より武を以て國を建つ、尙武の氣煥發する所、死を怖れざるの精神萬古に一貫せり、浩々たる乾坤漠々たる宇宙死を怖れざる精神の熾なる嘗て吾國の如きものあるか。英や佛や、いかに任俠剛毅の質ありとも、何ぞ吾國死を怖れざる精神に勝ることあらんや。

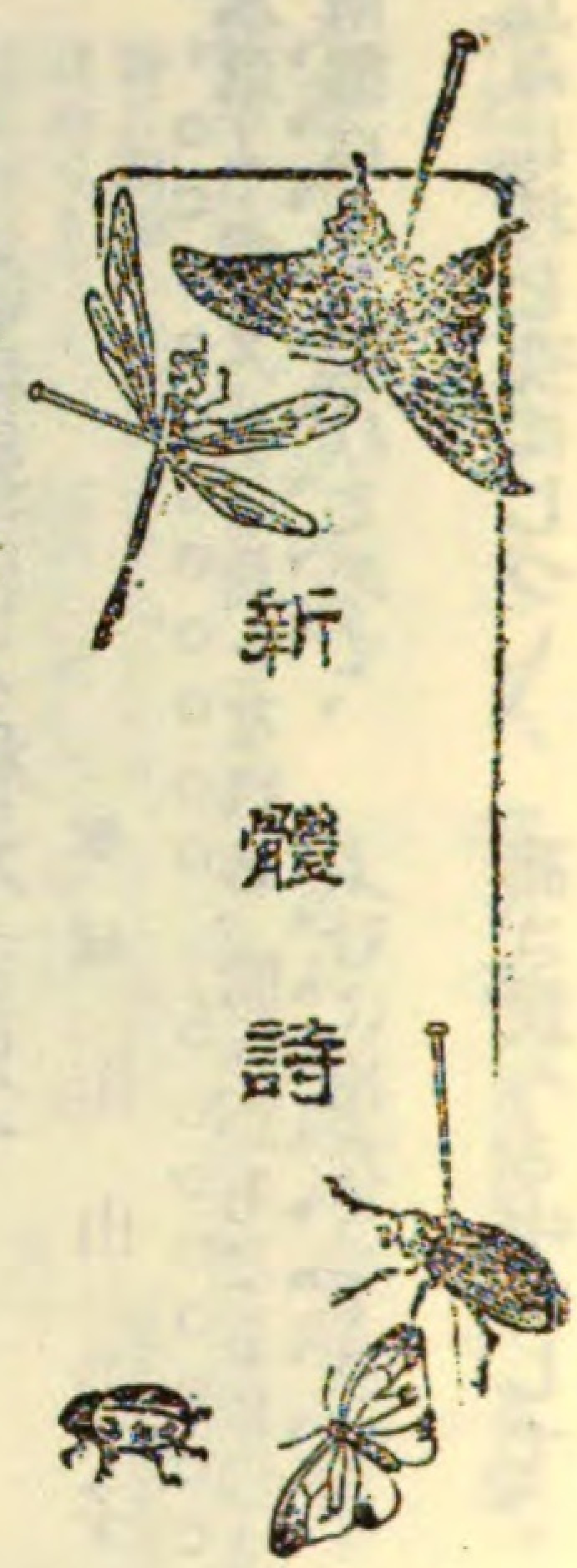
○淸少納言　長門　竹葉女史

捲き上げたる御前の小簾には、唐土の知らぬ山さへ見ゆる心地やせん。許さじと云ひし逢阪の關には、鷄のそら音や耻かしかりけん。年頃おもひ立ちし初瀬詣、いかに心ゆきけむ。元輔が後と云はれぬ身ならばと答へまつりし折、いかに面たゞしかりけむ。時鳥たづぬる路の卯の花垣、いかに面白かりけむ。花にまがひて散りかふ雪、げに春來ぬと思ひしならむさるは又花や蝶やと急ぐ日もと賴ませ給ひ、入相の鐘の聲ごとに慕はせ給ひし折いかにかたじけなかりけむ。實にこの皇后の御爲には、火にも水にもと思ひかしづきしならむ。さてこそ皇后の宮の御覺もめでたかりしならめ。さるを中關白殿失せたまひ、皇后かくれさせ給ひなど世の中あらぬさまにのみなりゆけど、他し君にも仕へずて、終始その操を正しくせし人を誰とかする。

こはこれ一條天皇の御代、定子皇后に仕へ奉りし淸少納言なりけり。

○涙　近江　始子

汚れたる此世にも猶淸く美はしき物有りとせば其は涙也と答へむ、涙!!!僅か一滴の雫天より落ちしにもあらず、地より溢れ出でしにもあらず、されば何所よりこぼれたるにや、此露、火桶かこみて冬の夜を、翁の物語きく少女の、漸々兩眼にたゝふる露、哀れ同情の涙に有らずや。小萩ちる夕、丸窓の許に詩卷ひもどく若き詩人の目に輝くつゆ、實に淸からずや、優しからずや。罪惡の行はるゝ世サタンの手に握られ刻一刻墮落の淵に沈みゆかんとして、煩ふ時、神の御聲をきゝて溢るゝ涙とゞめあへず、膝における一雫悔悟の露、あゝ尊からずや。嬉しき時悲しみし時其極に達する時、其瞬間人の心のいかに高く淸きかな、其たかく淸き心の表出は實に涙也。



新體詩

河井醉茗先生選

天 ○磯べに立ちて

香川縣大川郡三本松町字北町　松永茂子

男波女波のむつれよる、松の磯べのさまよひや、
明星淡くまだいきて、さゝべり紅き紫の、
雲の帳のあやにしき、ゆれて靜かにあけぬれば、
天の光はほのめきぬ。
曉の潮湧く瀬戸の海、輝の黄金の漣波に、
無限の幸をたゞよはせ、底の宮殿のたをやめは、
平和の曲を奏でけり、あはれ、夢よき島姫よ、
さめて鷗と舞へよ海。

瀬戸内海は多く詩人の舞臺となるやうですが、海をめぐりて、悉く詩化される時があるてせう(醉茗)

地 ○告天子

上野太田町入町大沼方　曉　奈美子

日影おぼめく春の野の　綠の草の香に醉ふて
うまゐ装ふ艶人や　若きが性に煩ふる
人にきけとや告天子　あゝその歌よ其節よ。
東風吹くまゝに勢ひ得て　草の中より舞ひ上り
自らなるたかぶりに　歌ふ歌さへ誇らしう
下界を眺めて幾かへり　巡りめぐりて雲に入る。

人 ○戀

上總千代田村岩山蠶絲傳習所内　靜枝

例はゞ春を司る　天つ御神の使人と
天のぼりつゝ下りつゝ　日影に榮ゆる容装は
榮華に飽ける人の世の　幸ある子らに似たる哉

詩人出てより、吾自然界はますく威嚴を添ゆるやうですが、此雲雀の如きも其一つ(醉茗)

蛟龍くるひ鰮怒る、千ひろの海の底にだに、
きよき玉藻につゝまれて、すゞしくひかる眞珠あり。

まがみはさけび虎ほゆる、五百重の山の奥にだに、
玉をちらして岩間より、したゝりいづる清水あり。
嵐を孕み雲おこす、すごきみ空のをちにだに、
よるの帷のあひだより、ゑまひをもらす星ぞある。
いつはりうらみ愛きねたみ、あつまる人の胸にだに、
などてか神のさづけたる、戀のひかりのなかるべき。

終の一聯あつて、首尾活躍、氣韻流るゝが如しとも言ふべく、全く好い詩てす。なほ附言して申しますが、本紙上最も忌はしき剽窃家の多い地方は、千葉縣も其一つてす、千葉縣或は茨城縣の投稿て、少し目に立つ作だと思うて、能く見るとおぼえのある、人の作を盗んだものてす。此作者は然う云ふ事はありますまいが、千葉縣の方と云ふと、用心をして見るだけても、眞面目な作者には損てすから、千葉縣下の投稿家は、全體に其風儀を改めて下さい、イヤ之れは飛んだ餘事に外れました(評者)

秀逸

○櫻抱ける枯木を見て

磐城 作山美子

木兎よふくろうの巣となれる、暗みがちなる杉のもり、
雨雲ひくう垂れこめて、ふむに冷たき下草や。
互みに枝を交はしつゝ、高さ競へる中にして、
十抱あまる大木の、梢枯れしが見ゆるかな。
枝や病みたる根やかれし、幾千年の雨風に、
强軀ほこりし汝はしも、今力なき姿にて――。
衰えし身の果は皆、草木のそれも同じきか、
鳥も巣くはぬさびしさに、白けし幹は苔もなく。
さあれ洞の中朽に、僅に生えし遠山の、
山のかげなる珍木の、二葉の光新らしう。
通ふ樵夫に、里の子に、見はぐられしをうれしみて、
乳母振して今日も亦、はごくむ汝は仁者かな。
身にほこるべき濃綠の、衣は天にうばはれて、
よそほひ無きも悲まず、默して立てる貴さや。
たとへばあはれ大聖の、差引く汐に合はずして、
英才の士を敎つる如、「權は無なり」と語らはで。
「枝なき葉なき汝なれば、斧の刀なくもたほれん」と、
利には目ざとき山の子が、あざわらひつゝ立てる時。
聽とも言はで「中朽の、枯洞に抱きし珍木の、

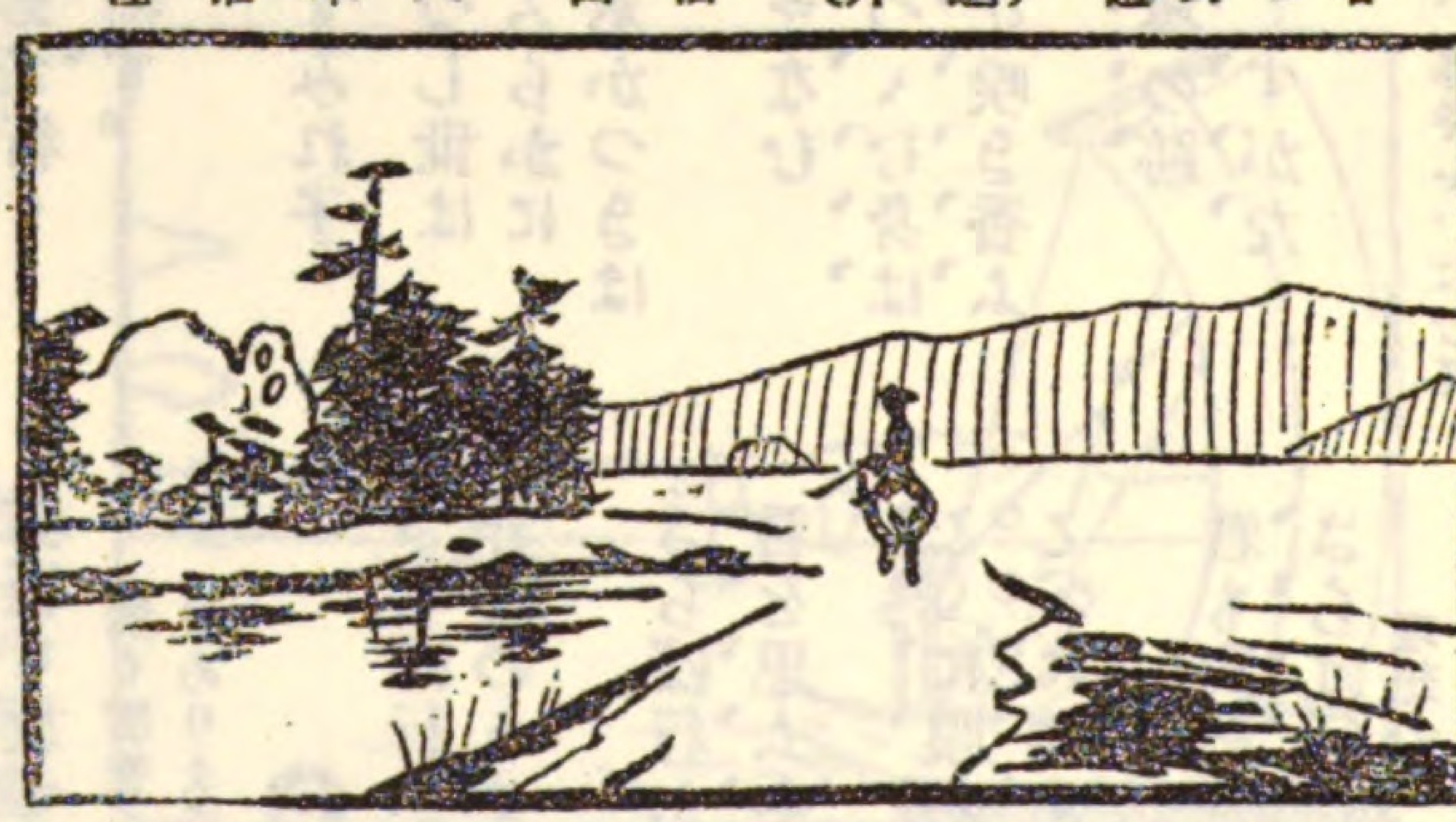
育たば我も本意なり」と、空をかしきを忍べるか。
色も香もなき杉の木の、　それにも似たる我も亦。
彩雲常に湧くといふ、　其木たのみて共に待たなん。

詩に經驗ある方の作と見たのは、よも僻目ではありますまい、詩語の据え方、句の法、勿論其材料も凡て初心ではありません、規則に外れて長いから賞中には入れませんでしたが、本誌に在つてはづかしくない作です（醉茗）

○蛙の歌　房　枝子

雨暖かき朧夜を、
山吹の散る古池に、
初めて蛙聞きしより、
友得し如く覺えしか。
夕さすらひに畔見れば、
み空仰ぎて雲に鳴く、
遠に昔の宿見ゆや、
母を戀ふ子の風情かな。
稻葉しほるゝ夏の日の、
撓まぬ聲は雨乞の、
遠き太鼓の音にまじり、　我が手枕に夢誘ふ。

春の野邊（選外）　松山　八木稚桂



たゞやすらけく野に生ひて、榮なく埋れ果つ身には、
皐月血に啼く鳥よりも、　汝が歌こそ嬉しけれ。

昨日か櫻の詩を選び、今日は蛙の歌を見る、春光九十、夢の如くに去つて、詩の上に知る時のあわたゞしさ（醉茗）

○少さき天使　新潟　姫　百合

荊棘ふさがる世の路を、
ふみこえんとて勇ましく
生れいでたる此小足。
昨日の雨に萠えいでし
薔薇の芽よりも美はしや
一手の握り倚たらぬ
清淨無垢の此小足。
如何なる道をふむやらん
未來のさだめ如何ならん
榮擧の峰をゆくやらん
罪の谷底行くやらん。
晝の神よ夜の神よ
導きなせよ此小足。

ソーダーの中にてもありさうな詩です（醉茗）

○朝雲暮雲　讃岐　香川　みさを女

鳥のなく音のいやしげく　岸の柳に月うすれ
やみは我世を捨つる時　紫ふかく色そめて

そらにたなびく朝の雲　そはよろこびの影宿す。
野に捨てられし犬のごと　北に南にさまよひて
ゆふさり頃は西ぞらの　山の尾上に消えて行く
うすくれなゐの暮の雲　そは悲みの影宿す。

發想の方が能く出來ました(醉茗)

○行春の賦

高知　野中　すみれ子

眉うら若き佐保姫の　はらう袂にうつし世は
長閑に春の薫りして　野は若草のまろらかに
やり水ゆるう流れしも　落花地に散るあかつきは
世は永劫にかなしみの　千尋の淵に沈まなむ
戀にはぐれし若人や　詩にもだえをつゝむ身は
胸にうれひのひゞきあり　見ようましげに咲き香ふ
花はいづこに通ふらむ　こは美はしの夢の跡
さめし朝の扉によりて　霞がくれに行くすがた
ながむる思ひなからずや。

古人は多く暮秋を悲み、今人は多く暮春をいたむ、暮春をいたむは若き人の愁いで、暮秋を悲むは、おとなびた愁ひでせう、まことや今の詩人は多く若い(醉茗)

○春のうた

陸中　菊池はせ子

雲井の宮の曙に、　春の女神のうるはしき
呼吸の凝りては山霞、　野に陽炎と燃えにけり
聽てみ舞の衣召して、　台の袂をそと振れば
匂ひこぼれて風となる、　いざや小籠の鶯も
雲雀も放て吾領の、　下界に少時降らんに。

鶯も雲雀も天なる籠から放てと云ふのでせうが、一寸聞えにくい處があります(醉茗)

○さらば行かん

紅扇子

さらば行かん君と我、　二人想ひの翅かりて、
非時のうまし花さき、　薫香みつ想の國に。
さらば行かん君よいざ、　君を見るあだし目なく、
君を思ふあだし人なき、　天地に二人の國に。
こゝに眼ありいと若う、　君をおきてあだし物を見ず
こゝに胸ありいと小さう、　君よりあだし物思ひせず。
君も我を見んと云ふや、　嬉し此君がなさけ、
さらば行かん海の彼方、　常春の想の國に。

理想の戀、いつも美くしき、いつも春、若き女に此熱情あることは怪みません(醉茗)

○思ひ出て

伊勢　葉津惠子

たとへば小さき駒鳥の、　手飼ひの籠をぬけ出て、
春の光にあひしごと、　君が行衛の美しき。

雲井はるかにとぶ雁の、思ひは遠きみんなみや、
うたに榮えある紀の國に、筆とる君を夜々思ふ哉。

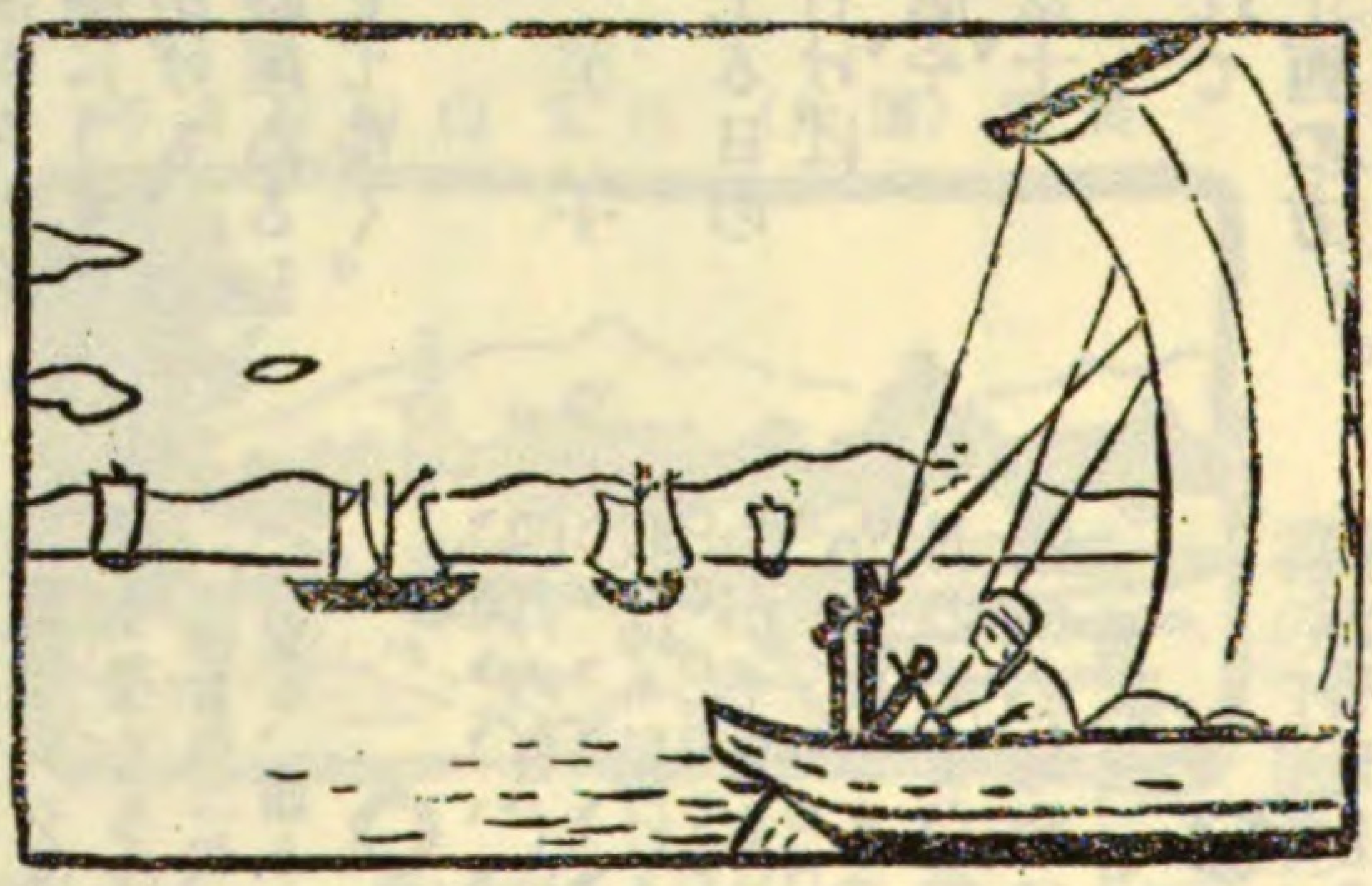
飛ぶ雁は無用でした(評者)

○春の歌　下野　新井琴子

白光ゆるゝ夕雲は、
聖者の夢と流れつゝ、
百里の大野草萌えて、
歡樂の花岸に充つ、
小川の流れ末遠み、
神の淨衣の御裾の、
花の小草に灌ぐべく、
敷きしに似たる水の色、
平和を語るさゞめきに、
霎時我世を忘る哉。
冬の魔神が木枯の、
猛けきにおぢて蒼然と、
凱歌を告る將軍の、
春を讃ずる裝ひと、
見よ濃綠の色榮えて、
小鳥の春を歌ふ聞け、
たのしみの曲愛の譜に、
巨人の如き杉の森。
塒の森に集りて、
霎時我世を忘る哉。

春の歌としては力もあり威もあり、少し奮發すれば、作詩の上手になりませう(評者)

春の海（選外）　姫島　重光幸子



○朝暾　遠江　由井よし子

譬へば夜の大殿すべりて、館に歸る美女百人の
それにも似たる天の星姫、そよたる風の御輿に乘りまし
天津御座を旅立ちますれば、
寂靜を破る里の諸鷄。
紫雲たなびく天の扉ゆるれば、
女波男波のさゞめくあなたに
金絲銀絲の征矢すべらせて、
青蘆繁れる夜のふしどを
妙なるふしの鳥のしらべに、
靜かに出でます日の大神よ。

諸鷄と云ひ、蘆のふしどゝ云ひ、少し配合が劣りました、今一いきで好くなる筈でした(評者)

○ゆく春　名古屋　宮地すみ子

春のみ神は紅の、
春の衣をぬぎ捨てゝ、
花は空しく散り果てゝ、
聲もかれてぞ聞えける、
去るや何處に誰が許に、
綠に迷ふ鶯の、

行く春の姿を此處に見る(評者)

○雲のうた　長野　飯塚ぎを子

まだ〳〵ひまにわき出て、　むら〳〵迷ふ浮雲の、
あした崑崙北峰に、　夕べ萬里の蒼海に、
嶺をめぐりて谿をいで、　ふもとをかこみ海に入る、
天のはてより地のはてと、　みる〳〵重りひろがりて、
風をばおこし雨をよぶ、　くしきは雲よ汝がちから、
世もとこやみとならん迄、　空よりわきて空にうす、
あゝ莊嚴のくものわざ、　月の光も日のかげも、
やがてはうせて襲はるゝ、　そこに無限の詩趣あるを、
雲をあふぎてうた人の、　心もそらに馳せてゆく。

每號必ず雲の歌があります（醉茗）

○朝の富士

本鄕　山崎美子

彩雲流る東の、　波のはてより上る日の
光は淸き紫の、　靄の掛幕落ち行けば
紺碧の大空背に負ひ、　前に見下す山脈や
玲瓏として白玉の、　淸き姿よ朝の富士

夕の富士

綠色濃き木も草も、　闇の帳に包まれて
淋しく暮るゝ夕暮や、　たゞ此の時――西の方
ひかり輝く夕雲の、　燦く帶や金銀の
冠り頭に頂きて、　連なる山の其の上に
偉なる姿の仰がれて、　夕の富士やいとも崇高き

富士の詩としては今一段の光彩と尊嚴が欲しいものです、これては諸國にある小富士ぐらゐてす（醉茗）

○山行者

豊前　すみれ子

雲寒しあかつきの星。　岩高し白百合の花。
冬ざれの信濃路深く。　槍ヶ岳君し登れば。
笠に落つ落葉松かさ。　笻に觸れ竹の實こぼる。
二萬年人をゆるさぬ。　天の原星の棲所を。
殘りなくきはめし君は。　眉若き行者よ君は。

起首の二句には崇高の感が浮びます、我友小島烏水、能く槍ヶ嶽に登る、暗らん哉、この詩（醉茗）

○美人草

德島　桂花子

四月の日ぐれ片田舍、　少さき庭の閑靜に、
我はゝ見けり白露に、　すこししをるゝ美人草。
やがて日くれぬ初夏の、　月の光にらふたけて、
かはゆきものよ夢に見る、　少女のやうに立ちにけり。
月の光よ白露よ、　よろしき夜よ只ひとり、
我醉心地窓に居て、　小さき花に思を寄せむ。

美人草、名だけでも女らしい（醉茗）

○神廟

佐賀　久原秋紅子

梅が香奇しき湖のほとり　黒うそびゆる天堂の
聖のしづくを祭りてし　て丶靈臺に詣てゝき。
そは春あさき睦月や　白うてりしくみ光りの
杉の繁間を洩るゝとき　母のいたづきいやすため。

神の御座の御前に
ひざまづきてし瞬間や
かすかに祈る聲やなに
「病みし我母救はれよ」と。
燈籠風にゆられつゝ
やがて降りふく雪あらし
二たび三たびひれふして
祈る我聲いとふるひけり。

最も平凡になり易い詩材を、能く此れだけに活かせました、眞摯の氣あればです(醉茗)

○眞闇扉

麻布　廣瀬菲子

雲のさゝべり黒き魔の、
毒焔もやしはた吐きつ、
矛戟うち捧げ進み來る、
憤怒縱橫冥渤の、
天つち今はあなどりの、
王魔が搖する高ぶりに、
娟嫉の領はひろごりて、
肉を爭ふ醜業の、
鬘をば知らぬ血潮の酒、
集ひ／＼の群みなが、
座を金剛と繞らしつ、
笑ひ興ずるさゞめきの、
窟眞闇扉の隙洩れに、
捷てりと叫びからからと
那落にどよむ響根を、
失せんは實にや何の世か。

少し混雜すると要領を得ないやうになりそうですが、幸ひに生氣は一貫して居ます(醉茗)



農家（選外）　三重　山田ひさ子

○春の夜

廣島　中村葭園

京人形をさながらの
形清らの舞の妓に
狐がこは野の道を
我せがませてもどりけり
花の下道美しう
ほろ／＼散りし花葩を
雪よとざれて紅絹裏の
小袖かぶりし春の宵

心にくき筆づかひ(醉茗)

○蝶とならばや

讃岐　香川みさを女

蝶とならばや我逝かば
若草萠ゆる春の野に
長閑けき光身に浴びて
葉の床をなつかしみ
戀しき君の來ましゝ時
君がたもとに止りなん

○梅花

大阪　しろ子

夕のとばりそと蹴りし
女神尊き御姿を
今紫の雲にのせ
月の宮居を訪ふや
逢覺が時の風あらく
かざせし銀の白玉の
下界遙にこぼれ落ち
碎けて散りぬ梅の花

○春寒

奈良　まこと

ゆめには鐘の曉を
雪いさゝかの京の窓
梅が自慢の井の端に
甕の氷のさむきかな。
唇さむき京紅の、
雪にこぼれてくれなゐや

紅は流れずこほりつゝ、　さけて小皿の甲斐もなき。
冷えしをあつきそのいきに、　とかんすさびの京薫
裂けし小皿に雛姫が、　鴇の花ちらす朝化粧かな。

○春の野　栃木　寺内まき子

雲雀はあがる天までも、　春風に散る櫻花、
菜花にまよふ蝶々や、　春野にあそぶ我等かな。

○筆のすさび　信濃　山浦楓月子

○
若菜摘　芹なづな　蒲公英　籠に充てり
風暖かく　蝶西に飛ぶ　乙女は東に　日は黄昏るゝ。

○
桃の花　散り初めて　川瀬に　櫓の音高し
橋の上の　人影消えて　あたり靜けく　月朧ろ。

○みなし子　小石川　田中住江

幼な子の母にすがりて、　吾が父はいづこととふに
そが母の言葉はなくて、　はら／＼とあつき涙を
春花は咲きにほこりて、　人皆のめづる櫻の
散る頃や父はいづくへ、　年は早や二十年すぎて
今も尙花は咲くなる、　されど吾が戀しき父は
散る花の心や父か、　歸ります時だにあらば
ほこらむに此の血此の胸、　小さしとも父よりうけし
精神いつかたれにおかさむ。

○友の墓にて　周防　小澤千惠子

彩雲西に漂ひて　夕の色のせまるとき
友のみ墓を訪れて　哀しき花を捧げたり。
み慈け深き御神の　み袖に今は包まれて
薫り清けき樂園に　發き理想や歌ひます。
墓をめぐれる百草よ　かはらぬ色に咲き出てゝ
靜かに眠る我友の　靈をば永久に慰めよ。

○朝　石狩　小川はつ子

軒端にさわぐ村すゞめ、　起きよさめよと唱ふなり、
昇る旭にはじらひつ、　柔き衣の褄あはす、
庭面にゑめる花すみれ、　葉末に光る玉つ露、
そと手にうけて薫よき、　とくおしろひやこぼれぬる、

○泉の水よ　丹波　栗野幸子

淸き泉をながれ出て、　岩に思をくだきつゝ、
ちりのちまたに行く水よ、　戀は淵瀨になるなかれ。
男のむれにいだかれて、　思ひの川に身を沈め、
なみを枕にねぶりたる、　女のおほくあるものを。
春は花なき蝶まふて、　いましが胸にうつるとも、
夏はこがれて飛ぶほたる、　いましが胸にもゆるとも。
秋は千艸の色めきて、　いましが胸は動くとも、
冬は時雨のむすぼれて、　いましが胸にこほるとも。
あつく燃ゆる若人の、　ちしほをながす事なかれ、
神にさづかる汝が友は、　たゞ松の風月のかげ。

○水の歌　信濃　坂田緻子

稲花川の黃昏を　手に匂はする薔薇の花
高き香りを身にしめて　姿うるはしき花の君
あゝ彼の君は今もなほ　己が親しき友ならば
共に歌うてあゝ如何に　幸いと多き我ならん
さゝやく聲に水の歌　絕えて岸邊にさゝやけど
あゝ彼の君のそが歌は　今や何所ぞ知る由もなし

○花　肥前　すみれ

降る春雨にやしなはれ、　花はいつしかつぼみけり、
その春雨のしづくほど、

やよひの空ののどけきに、
空はかすみにこめられて。
吹く春風にいざなはれ、
庭ははだれに埋もれて。
朝の雨に咲き出てゝ、
行くへを誰か憐みし。

○卒　業

榮行く御代の敎へうけ、
故郷にかへるたのしさよ、
さはさりながら親しみし、
敎への君や友垣と
袂を分つ悲しさよ、
さらば別れんいざさらば、
今日別れての向後は、
いかに此世を過さまし
楫なき海士のそれに似て、
世の波風をいかにせん
小さき胸にきざみてし、
深き敎へをしるべとし
身を立て名をば起さまし、
いざやはげまんひたすらに
さらば師の君姉逹よ、
今日にかはらず御心の、

○小村の暮れ

止まず降り來る綿雪の、
白雲低う北の空、
利尻の山の塒めぐる、
眺めうるはし冬の山、
餌もとむ鳥の影もなし。

花はさかりと咲きにけり。
花はもろくも散りにけり、
夕の風に散る花の、

長野　吉田しげ子

八とせのわざをふみ卒へて
さらば別れんいざさらば

志磨女（選外）　伊勢松浦靜江

敎への庭に別るとも
はしにかけてよ千代までも

北見　高橋專子

暖が伏屋を埋めけり、
九月の小村は風あれて、
林に雪のしろ〳〵と、
風も靜かに日はうすれ、

○希望の春

のどけき空にいやみちて、
庭にも匂ふ櫻花、
彩色る野邊のあちこちに、
舞へる胡蝶もそよ風に、

○すみれ

舞ひゆく蝶の末遠く
いかに悲しくながむらん
花の香りはあるものを



霞む干る珠滿つる珠
その島陰にかくれては、
ひがたに遊ぶうなゐらは、
うかれて拾ふ櫻貝、

○歸へらぬ君

つばめは來り雁はゆき、
花のあしたに月のよひ、
おもひはつきず玉鉾の、
君の姿は見えずして、

大阪　辻野よし子

輝く希望の春の色、
その香その花いとたのし。
うたへる鳥の聲わかく、
春の榮を欣べり。

ふ　み　子

霞の袖にかくるゝを
葉がくれに咲くすみれとて
蝶はなさけを知らぬかも

春はきぬれどこゝのみは
れむれる蝶もなかりけり
すみれの花の長しへに
深き思ひにしづみゆく

春○の浦邊

牛込　林安津子

伊のが浦わの朝ぼらけ、
綠につゞく松原の
梢の風の葉の音は、
天津乙女やかなづらん
海原遠く見渡せば、

またも見へ來る白帆蔭
喜び笑ひ打ち興じ
見るものどけき春の浦

久保　梅田子

鳥だにもとは忘れぬに、
なにとて君は歸へらざる、
道を眺めて門にたてば、
わが憂さのみは增りきぬ、

朝の髪なかいなて、、
痩せたり皃なわが姿。

○すみれ

つみし菫の一花を、
あした野原の若草を、
衣なびかす楽しさよ。

○青春の怨

静かに暮れし春の夜や
そゞろ寫經の筆とりて
若き法師は逝きにけり
伽藍の壁を彩れど
寂しき夢をきこしては
嗚呼おごそかにさわやかに
御袈裟の蝶の夢に見し

○行く春の慰め

しらじらあけの東しに、
詩の小窓に姫神の、
くち紅かるくたゞよひて、
かよふ息吹のあたゝかう、
美しうもこゝに花咲みし、
樹々の小枝にゆきかへる、
擘うら寂びし春の聲。
白ふ花もゝ散りはてゝ、
榮ゆる緣りに死そむる、
『行く春』せめてなぐさめの、
雲にや擬ふ濃紫、
命うるはし藤の花。

○蝴蝶よ

鏡にむかひうち見れば、

近江　竹村たけを

ほつれし髪に簪して、
わけて辿れば風ゆるう、

本郷　中島綾子

地に曳く彌陀のみ姿に
たかき思に耽りたり
小雨の跡の虹の橋
解く人もなき鉄寶の影
香爐の灰も冷ゑ果てぬ
説きし御法に幸はあれ
うすき運命を如何にせん

徳島　小川なみ子

めぐる『恵』みの光りさす
ちさきみ胸に『春』ふくむ
そゞろにもるゝ戀の息。
緋桃白桃ほのぼのと
たけなは春のうつろひて
歎ぐちしめす鶯の
冠冕とかざる青若葉
小窓に春の日はおちて
見かへる死にいみじうも
名ごりとゞめし様しの

徳島　佐藤きん子

御簾降されし瑠璃宮に
雪の片頬を紅潮めて
やさしの歌に瑤琴の
み歌の聲にあくがれて
ぬけや出でけむ——小さきもの
舞ふよ『蝴蝶』よわが春の
静けき下界に降る時
花に宿世の汝が身の

○高し一千五百尺

仰げ人の子よ北の空、
天そゝり立つ伊勢富士や、
朝、歌無き身を恥ぢて、
詩篋呼く如、神柱、
夕、悲運の身を懐きて、
幸無き子等を慰せん如、
あゝ悶えある子よ詩の子よ、
天の默示の神柱、

○松露掻

松吹く風の音絶へて
少女も兒等もうち連て
節もおかしき鄙唄を
砂に敷ける散松葉
籠にもあまれる家土産を

みどり髪濃き姫神が
綾の長袂にほゝ笑みや。
奇しくも顫ふ絃の音よ
花染麗のみ裳より。
雙の彩羽の美はしう
野をやよそはす神使。
背に默をのせにつゝ
そこに詩人生れいづるよ。

津市　松尾はな子

白妙の冠うるはしく、
高し一千五百尺。
沈みし眉を上ぐる時、
高し一千五百尺。
愁の眉を上ぐる時、
笑を含める童形。
來りて芙蓉峯さながらの、
仰ぎて幸を求めずや。

千葉　田村瀧子

磯山續き日はうらゝ
肩には熊手籠持ちて
うたひつれつゝ遊ぶなり
掻けば松露のころころと
ほこりながらに歸り行く

姿は遠く霞みけり
興ある里の遊びかな
都の人の得も知らぬ

○鐘樓守

下野　新井琴子

櫻亂る丶夕暮や
若き尼僧の弱足に
悲哀を胸に抱きしめて
登るもつらき鐘の樓

涙濕る美しき眼に
ふるふ腕に執る撞木
暮れ行く里か眺めては
『使命を果てよ若き人』

さなり慰安の鐘打つに
浮世を捨てし佛弟子の
ふさはしからず我涙
嗚呼恩はじな罪よ戀

さらば打たんと立よれば
散りしく中に蹶然と
墨の衣に花吹雪
姿はいやに崇高くして

諸行無常の音は遠く
青光さつと投げかけて
大氣は澱みて聞こゆれば
その春月の影淸し

○流る丶水

豐前　林みさを

ながる丶水の路遠み、
あした岩間の苔の下、
幾千年を流れ來て、
根芹をあらふ春の水、
あゝ逝者は似たらずや、
末はいづこに到るらむ、
ゆふべ大洋の空のうへ、
いく萬年にそゝぐらむ、
落葉をのする秋の水、
流れてやまぬ此の水に、

○蓼川の邊にて

但馬　菫子

旭の光きら／＼と
ゆるう流れて行く水の
自然の業を眺めつゝ
世の人皆はおろかしと
唯か知るべき幸の身と
きり晴れ渡る蓼川の
岸べに香ふ名なし草
朝に鉄を下すとき
冷き笑に見返るも

○低　唱

播磨　玉島隰子

あれさお見やれお山の松を、
松はこみどり姫松男松、
まつにこがれて濱へ出て見れば、
女浪雄浪が睦まじさうな。

わたしや片羽のつま無しめ鳥、
小夜の寢ざめに戀唱ふとて、
とがめしやんすなこればつかりは、
神が許した歌じやもの。

○白菊乙女

茂木靜子

忍びあるきの君なれば、
旗ひるがへる城の戸を、
如何で知るべき國君と
一人や出でゝ來ましたる

背戸の黄菊と白菊と、
見給ふ物もなきものを、
こけらぶきなる宿の外
しば／＼來ますうたてさよ

ふんじ紫色も濃く、
いつわり酒に醉ひまさば、
戀にたゞへし人戀の
あはれ貴き玉の身の

仇し心につけ入りて、
おすより絶えて菊の扉に、
鵑神呪詛やはじめなむ
訪れ給ふことなかれ

黄菊白きく亂れさく、
崇高く淸く美しく、
庭に花輪は作らずも
常少女にて在しませ

○牡丹殿

神田　太田葵子

牡丹の艶の薫ずとき、
寄りそう雌蜂と諸共に、
雄蜂は羽を治めつゝ、
甘き蜜には醉ひにける。

一時を誇る其花は、
紅の袖翻がへして、
奥殿靜かに若き妃の、
君に侍らう朝なれや。

春殿やせて香なく、
夏も暮れゆく其頭を、
霜父老ひて寵深し、
閲ゆる姫の身や憐れ。

○子守の歌

尾張　犬飼雨園子

味氣なき世の逆潮に、
人に知られぬ子守りとて、
父も見しらず母もなく、
二十年こゝにくすぶりぬ。

げに孤兒の果敢なさは、
波のまに〳〵漂へる、
寄るべもあらぬ流れ藻の、
その姿にも似たるかな。

てん〳〵太鼓に笙の笛、
里川づたひ逍遙へば、
歌ふも今は懶かしく、
みな音高く風さむし。

げにやかしこの板橋は、
家のあるじに敎はれし、
われ母上に捨てられて、
處と聞くも袖ぬるゝ。

○湖水の夕暮

本間　滋子

水のそよぎも眠りてか、
かすかにひゞく鐘の音、
みぎはのあしの聲も無く、
心無く散る花吹雪、

浮れの魚の夢の上、
おぼろに見えし野も森も、
奇しきもやに包まれて、
一日の業をなし果てゝ、

彼方に遠きふゑの音は、
家路に向ふわらべ等の、
平和の胸のさゝやきか。

○花すみれ

山口　山内靜子

菜畑につゞく松林、
靜に眠る小羊の、
道の小芝に春たけて
空遥の夢の長閑なり

牧場にとなる麥の畑、
飛び交ふ末にわれ一人、
なになき戀にわれは泣く、
白き胡蝶の二つ三つ
胸の惱みを歌にして
よしや豔麗の我袂

紅き涙に朽ちるとも、
紫匂ふ花すみれ、
神のさだめの野の戀に、
君よやさしの胸あらば、
我慰めの友となれ。
あゝ我戀はなる期なし
清く崇く汚れなく
塵の浮世もたのもしう
果敢なき戀に身をうれむ

○行く水

松山　山脇幸子

縱橫の下行く水に、
落花は烟をかすめつゝ、
春爛熳の花に泣き、
つれなく痩せし我影の、
影をうつしてうかゞへば
あゝたゞよへりながれけり。
秋玲瓏の月に病みて
アゝ行く水に細きかな。

○野菊

土屋　琴子

床し谷間の一本野菊、
花の雫を酌まんとすれば、
其色背くつやあるもろ葉、
朝日照る時打ち傾きて、
霜に踊りて幽に香る
おしと松風悲げに吹く
白うみだれて氣高き花は
やさし小蜂と何を語るか

○もだえ

但馬　すみれ子

冷たき神の手にふれて
君は何とや見そなはす
想ひたえせぬ痩せし身を

厚き御情ゆめにだに
さすがに胸のおのゝきて
仇せんとには有らざるを

戀ふる心はかわられど
さすがに若きわが心
慕ふ心は切なるも

只淡かりし夢と見て
若き心と見そなはせ
許しませ君少女子が

○我が身

富山　松木繁子

短かき春の夢さめて、
霜にさらばふ蝶々の

幸なき身とはなりにけり、
ありし昔の偲ばれて、

み墓深き垂乳根が、
夢の未來をたどりては、
我世の嵐得も知らで、
あゝ幾年を送りしや

夕愁にかきくれて、
我れ前栽を逍遙へば
かすかにすだく蟲の音も、
父母のみ聲とあやしまれ
此の世の中に居まさじと、
いかで思はん思はれん

思ひ出れば今更に
涙に濕き袂かな
あつき情の木下陰
縮かに笑める事もあり

○夕暮磯にたちて

紀伊　泣月女史

夕まぐれ磯べさまよひ、
ちからなく沈む日みれば、
うらぶれの果しもしれず、
いろ〳〵の思ひぞみだる、
眞帆片帆風のまに〳〵、
かすかなる船うたのせて、
おもむろに島のかげより、
あらはれつ又もかくれつ、
うつりゆく空のあなたに、
夕やけの雲のあやおろ、
金色のはえはうすれて、
あたりしづかに東の山より、
刻一刻と沖よりくれて、
うかびいでけり十六夜の月。

○夕暮の富士

向島　すみれ女史

華やかに七彩色どれる夕日、
里の小川に夕日殘し、
自然の景をぞ畫きける、
けるか彼方の富士の峰、

黄雲白雲湧き出てぬ、
金波銀波さゞめかし、
一人御空を眺めやる、
白衣の姿いと優しく、

平和の瑞氣取りかこみ、
氣高き姿天に高かく、
川面吹き來る夕風は、
いと心地よく袖をうつ、

いよゝ故郷偲ばれぬ、
あゝ故郷の父上母上よ、
あゝ故郷の同胞よ、
今や如何におはすらん、
折しも飛び交ふかはほりの、
枯れし柳にかゝるかな、

牧場（選外）　徳島　静子



○炭燒女

牛込　小島はま子

うすき煙りの薄れ行き、
小山々風一しきり、
かの若楓の折り枝の、
炭燒く竈の夕暮や。

袖爐小琴の試樂さへ、
倦んじ果てゝは亂れ勝ち、
病の一日を破れ窓に
想ふは竈の勞か。
燃えゆく楓の燃片の、
女、深山に侘住居、

○谷の草

上總　小川とり子

火影は暗く[illegible]びて、
膚は日々に黑うなり行く。

我は悲しき谷のくさ、
鳥の鳴く音と水の音、
日影さびしき山陰に、
外に語らふ友もなし。

春風ぬるく世に吹けば、
我にも色は萌ゆれども、
ねよげに見ゆる若草の、
人し知られば甲斐もなし。

春のすさびのさくら狩、
櫻尋ぬる人のきて、
さすが淋しき山かげも、
やさしき君を我は見き。

水流るれど鳥飛べど、
猶も淋しき谷かげに、
我は悲しき草の身の、
のこりて今は友もなし。

◎君がのぞみの　　熊本　大友湖畔

君がのぞみのそれゆゑに、
とげをかくせる花うばら、
吾いましめていひけらく、
一本折りし曉の野の
ゑみの唇ひそやかに
『人の世われに似たるよ』と。

◎春の海　　能登　十八公女

春は花咲く彌生頃、
七ツの島は程近く、
海の景色もうらゝかに、
往きかう船は此處彼處。

磯吹く風は和らぎて、
如何なる神のすさびにや、
水の間を漏るゝ琴つゞみ、
これぞ平和の調べなる。

遙か沖行く眞帆片帆、
此の世にあらぬ奇し島の、
霞の中にほの見えて、
蜃張るかと疑はる。

◎仙が瀧（御嶽に在り）　　山梨　田草川若葉

向ふはいづこ鴎の浦、
願ひも夢や今は早や、
戀しき君と手を取りし、
過ぐる三年の昔なる。

貴とからずや神山の、
裳裾を洗ひ流れ來て、
紅染めし葉衣の、
岩間に懸る仙ヶ瀧。

冴は答え水躍り、
惡戯も永劫に靜めしむ、
魔神恐れ鬼神の、
聞け琴々の神韻を。

泡沫くだけ狭霧立ち、
天の戸さつと開く時、
雲に馭したる日の神の、
見よ七色の浮橋を。

◎賤の女　　紀伊　白菊女史

あれたる賤が垣根にも
みちゆく人も杖とめて
あゝ其内のあばらやに
若きいのちを憂に泣く
花咲き匂ひとり鳴かば
哀とのみはめずらむを
もゆるが如き青春の
少女子ありと誰かしる

笠に負ひゆくあさの星
一日やすみしこともなく
やみますみ母やしなへば
かよわき胸は迫れども
柴にのせくる宵の月
日々に稼げるそのしろは
細きけむりと消えて行く
なみなの腕いかにせむ。

◎姉と妹　　徳島　田中佳子

いざ早來ませ妹と、
話に遊もはかどらぬ、
手をとり〳〵にあどけなき
姉の心の目出たしや

姉上しばし待たれよと、
摘みてかざせる妹の、
路のほとりに咲くすみれ
姿ぞいとゞやさしくや

學びの園の數へぐさ、
わきてやさしき姉妹、
摘む子の數ぞ多かるに
變らぬ中のたふとさよ

日も倘あさき妹は、
恥らふ見るを姉は又
友にもいまだなれやらず
すかしてともにたはれつゝ



和歌

佐々木信綱先生選

岩代　丹治はるみ子

◎磯寺の鐘の音遠く黄昏れて離れ孤島に雲流れよる

飛弾　萬小夜子

◎亡き姉が片身の小袖いだきつゝ花の夕べを泣き明かしつる

大坂　大阪廣子

◎つれ〴〵に詩集繙く春の夜を秘めし菫に思出多き

肥前　佐野松琴女

◎姫君の仰せかしこみ朧夜を花の戸たゝく歌使かな

千葉　大崎紫苑女

◎樂殿に舞納まりて燭うすう月朧なる花のみ宴

あき　美子

背戸畠の粟の穂低う實を帶て夕雨淋し川沿の道

箕岡溪韻

◎胸さくるつらき思に枯野ゆけば苔むす墓に夕日影さす

横濱　不風流

◎情ある御歌使とゆきあひぬ水に文ある朧月夜に

雲雀　神奈川　星蕙女史

空翔る翼は伸びず籠の中に囀く雲雀の聲ぞ悲しき

上總　關よし女

◎花はまだかた山陰にあるものを惜む甲斐なく春は暮れ行く

羽前　豐子

◎名なし草茂くしげれる其中の苔むす墓を唯守るらん

落葉　日詰町　渡邊みな子

秋深く深山の鹿の音も絶えて風吹くごとに木の葉亂だるゝ

豐前　すみれ女史

◎吹く風に誰が捧げけん新墓に床しく薫る水仙の花

靜岡　三輪しづ子

◎ひばりなく野邊の夕べをもれ來るみ寺の鐘におもひ亂るゝ

滋賀　辰井琴瑤女

◎野邊の花霞の中にひらく時七彩はゆる蝶は生まるゝ

茨城　綿引早子

◎賤が屋の垣根をめぐるさゝ川に芹萌え出て梅の花咲く

兵庫　柳田白ゆり

◎家出せし父をしたひて尋ねゆくをとめいぢらし木がらし月夜

澁谷　白衣女

◎さなきだにうれしき春を兄君のほまれになひて歸りますけふ

磐城　佐藤榮子

◎はさまれし栞のふさぞ眞紅なる君よみさしの戀の歌卷

千葉　紫女史

◎忍びかね見初し家をとひくれば牡丹は咲きぬ君あらずして

上總　小川みゆき

◎打霞む春雨ぞ降るしめやかに語りあかさむ一度宿りね

横濱　白ゆり

○尺八の音色ゆかしくもるゝかな紅梅匂ふ宿のわたりに

南多摩　青木英一

○石狩川みぞれ降りつゝアイヌ等の鮭とる船にエゾ歌きこゆ

上總　大木もと子

○見るからに涙の袖をしぼるかな君がいまはの片身なりせば

越後　白菊子

○いざさらばこち吹く汝に言づてむわが古里のうめの花にと

德島　住友時子

○雨ほそき片山蔭に雉子なきてほろり〳〵と椿散るなり

廣島　中村東雲

○はてしなきまぼろしのかげ趁ひ行けばやみの墓道白萩散りぬ

淡路　日田春子

○春の野になごりしづけき暮の鐘いそぐは吾れもおなじ心を

安房　忍足藤子

○君が住む花のみ里を白駒にしづくらおきて行くよしもがな

本所　山田すみれ

不言戀

何事もいはじかたらじ只君の其れとしらなん駒のおもひを

北總　ふみえ女史

○やみませる母をみとりて夜もすがらしば〳〵きゝぬかりがねの聲

北總　酒井みち子

○羊なく牧場のあたり日はおちて霞の中に笛の音きこゆ

羽後　鈴木しゆん子

北支那のあれ野しこ草平げてにぎほふ國にかへるきみかな

弘前　佐野光子

○苔青き谷の泉に山鳥がしだり尾そゝぐ朝月夜かな

弘前　佐野翠坡女

○雁の音に苫そと押せば雁見えず月只白し天草の灘

伊豫　俊子

○夕暮れに田舍の小道逍遙へばわら打つ響犬の遠吠

印播　平川芳子

○みわたせば雲雀は落ちて日は暮れて東の森に月おぼろなり

伊勢　桔梗女

○ゆく春と共にゆきにし姉いづこ愛でにしすみれ花さきそめぬ

千葉　梶まさ子

○梅の花窓の硯にちりうきぬ人なつかしき歌かきをれば

上總　良子

○櫻餅めせとまねきし人去りて空しき茶屋に白雨の降る

紀伊　糸川みち子

○ゆふ日匂ふわかくさの野のさまよひにひとつみつけしむらさきの花

常陸　さつき子

○うらさびの園の枯葉の中にして霜におごりの白ぎくあはれ

吉井町　田籠かずゑ

○銀鈴の春の譜空にひゞきては花野の千里錦流れぬ

伊勢　ゆかり子

○歸り行く雁見送りて筆かみて京の日記書く此のゆふべかな

靜岡　遠藤智子

○春の深山畫中木こる音靜かにほとゝぎすの聲ほのかに

きこゆ　　　　静岡　河内美代子

梅

鶯のねぐら求むる羽風にも匂ひを送る軒の梅が香　　　深川　野々宮清子

○迎へまつる聲のひゞきはひくゝとも眞心くみませ名譽ある君　　　讃岐　今井月江

泣童

○白搗きに出て行く母の跡追ひてうら悲しげに泣く童かな　　　上毛　河内とめ子

○うらうらとのどけき春の曙をうすもやわけて胡蝶舞くる　　　匝瑳郡　白菊女史

○思ひなば昔は此處は城なりき今は跡なし菜畑麥畑　　　尾張　井口とよ子

○君います都の空をながめつゝ一人物思ふ此夕かな　　　山口　山内静子

○美くしき胡蝶にのりて花の神春の園生をさすらひ玉ふ　　　上毛　すみれ女

○うぶすなの老し榎に鳩ぞ啼く木枯やみし朝月夜に　　　上毛　關口綠子

○淸らなる尼寺庭に咲く牡丹眞ひるの風にそと崩れ散る　　　尾道　樋野春子

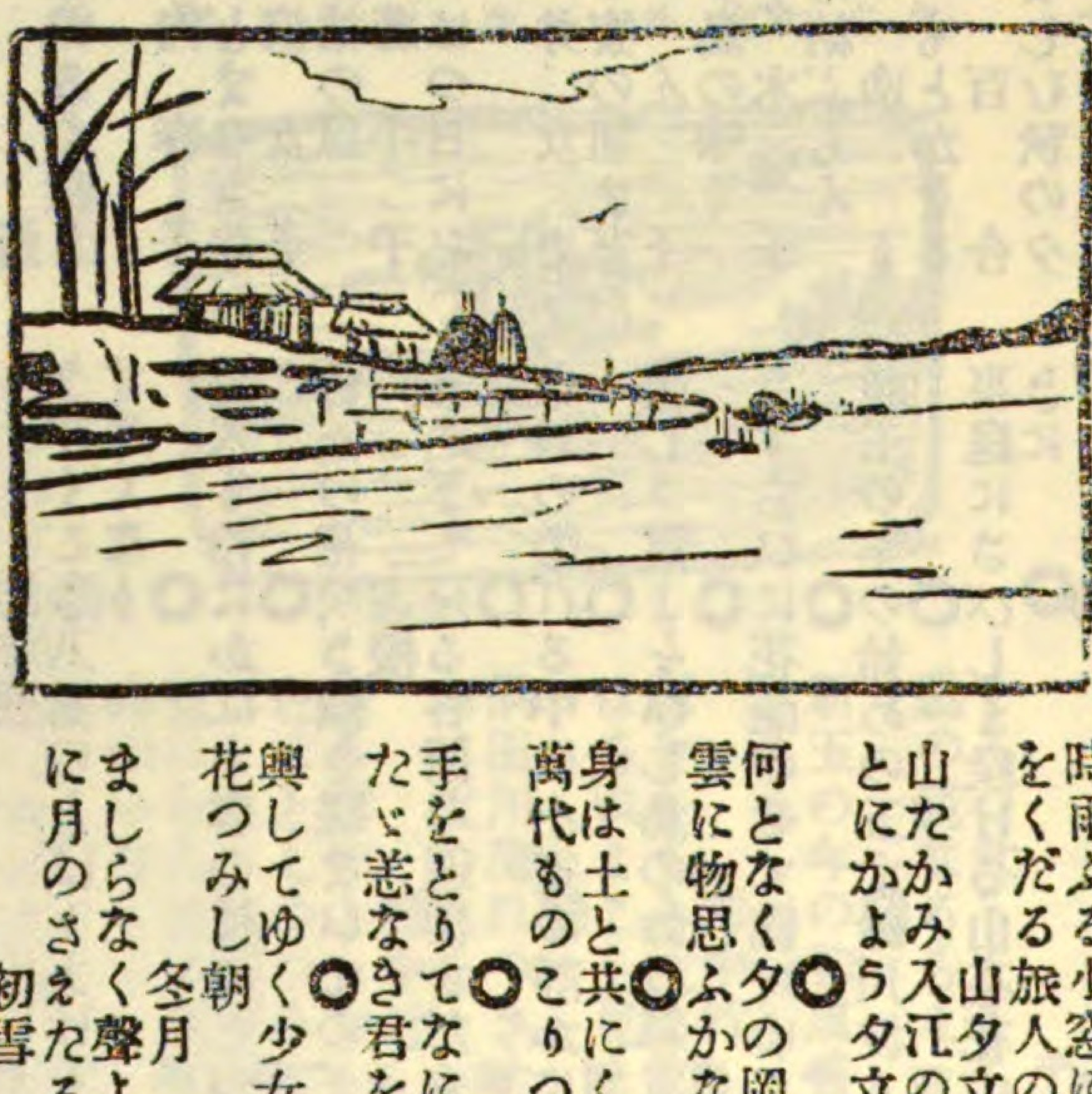
遠き友に

○海山のへだてゝ道の遠くとも近く心の通ふ玉章　　　山城　山本かや子

閑窓讀書

をりをりは文に心の友を得て獨り笑まるゝまどのなかかな　　　東京　紫星

江のほとり（選外）　　備後　瀧口秋子



梅

○大御代の春あたゝかき香にゑひて紅梅一輪ほころびにけり　　　上毛　江原芳子

時雨ふる小窓に寄りて眺むれば嵯峨野をくだる旅人のかげ　　　千葉　高山静子

山夕立

山たかみ入江のかげは見えながらふもとにかよう夕立の雲　　　淡路　伊藤綾子

○何となく夕の岡にたゞずみてうすれの雲に物思ふかな　　　酒田　常子

○身は土と共にくつとも立てし名は千代萬代ものこりつたへむ　　　牛込　遠藤義子

○手をとりてなにをかたらんよしもなしたゞ恙なき君を迎へて　　　新潟　岩瀬政子

○輿してゆく少女見送る人若し城の東に花つみし朝　　　加賀　すみれ女史

冬月

ましらなく聲より霜はおき初て池の氷に月のさえたる　　　上州　楓子

初雪

人やとふ我や行んと思ふまに墓なく消えしけさの初雪　　　新潟　岩瀬政吉

○名工の彫りし雄獅子の眠る姿や連翹つゞく聖堂の壁　　　越後　宮島新星子

○笛太鼓御殿の舞の眞盛りを園生の櫻花吹雪する

◯　岩代　紫羽子
なき人もそゞろに秋や忍ぶらむ植てのこしゝ白菊の花

◯　陸奥　三宅嶺子
牛をひくわらはの笛の遠くなりて歌まだならず春の野くるゝ

◯　澁谷　牧遙
雪のうちに春はきにけんしかすがにたに風ぬるく吹きわたりけり

◯　上總　木内春子
菅の根のながき春日も賤の女は田打畑打いとまなき哉

◯　山武郡　笹浪女子
炭燒の煙みだるゝゆふぐれの山べ淋しき木枯の風

◯新年の川　遠江　伊藤平子
河水の流れ久しき君が代のみいづをけさのはつ日にぞ見る

◯　近江　龍井女史
みけはひに紅せぬ姫がねりぎぬに白梅薫る寮の朝まど

◯　出雲　じん子
美しう端山に月のほの見えて梅の小窓に夕鳥の啼く

◯平和　備後　佐々木定子
敷島の櫻の花に慕ひ來て胡蝶もやすきゆめ結ぶらん

◯古城の跡　東京　黒ゆり
城落ちてこゝに二百の春寒く梅の大樹の一もとかをる

◯　野百合
おもひての千束の文をやきすてゝ我身かなしむ秋の夕ぐれ

◯寄糸戀　小倉　河内美代子
しら糸の思ひみだれしわがこゝろ君ならずしてたれかとくべき

◯　愛媛　芝里子
春霧に君もや道を迷ふらむわれたちぬれぬ松の雫に

◯　越後　晩香子
戸によれば春さながらの夕月夜しばしは胸のなやみも消えぬ

◯　越後　高木久滿子
我母の思ひに答へ侍べれども君思ふ胸いかて止まらん

◯新年朝　岐阜　松の舍女史
うすくこき八雲のとばりあけそめて初日のどかにからすなくなり

◯　茨城　筑波霞子
綿入も袷にかはり春の夜のしづかなる雨寢心のよき

◯　千葉　はる子
色々の花咲き續き蝶まひてのどかなる哉春の野げしき

◯遲櫻　上毛　新井若葉
春過ぎて殘る谷間の遲櫻まだ春すぎぬ心地こそすれ

◯　碓氷　菊子
若竹の繁れる中に小雀の靜かに眠るうす月夜哉

◯　備後　都子
美しう翼よそひし鳥の如き彩雲なびき初日さし出ぬ

◯　備後　紫杜美
うすらひに花葩のせて靄野ゆくさと川堤戀によき春

◯　千葉　賤の女
新玉の年の始めの五十鈴川波も靜けし伊勢の神風

◯　讃岐　片山ますす子
裏庭にさびしく咲ける山茶花のなどてはな散る風もなきに

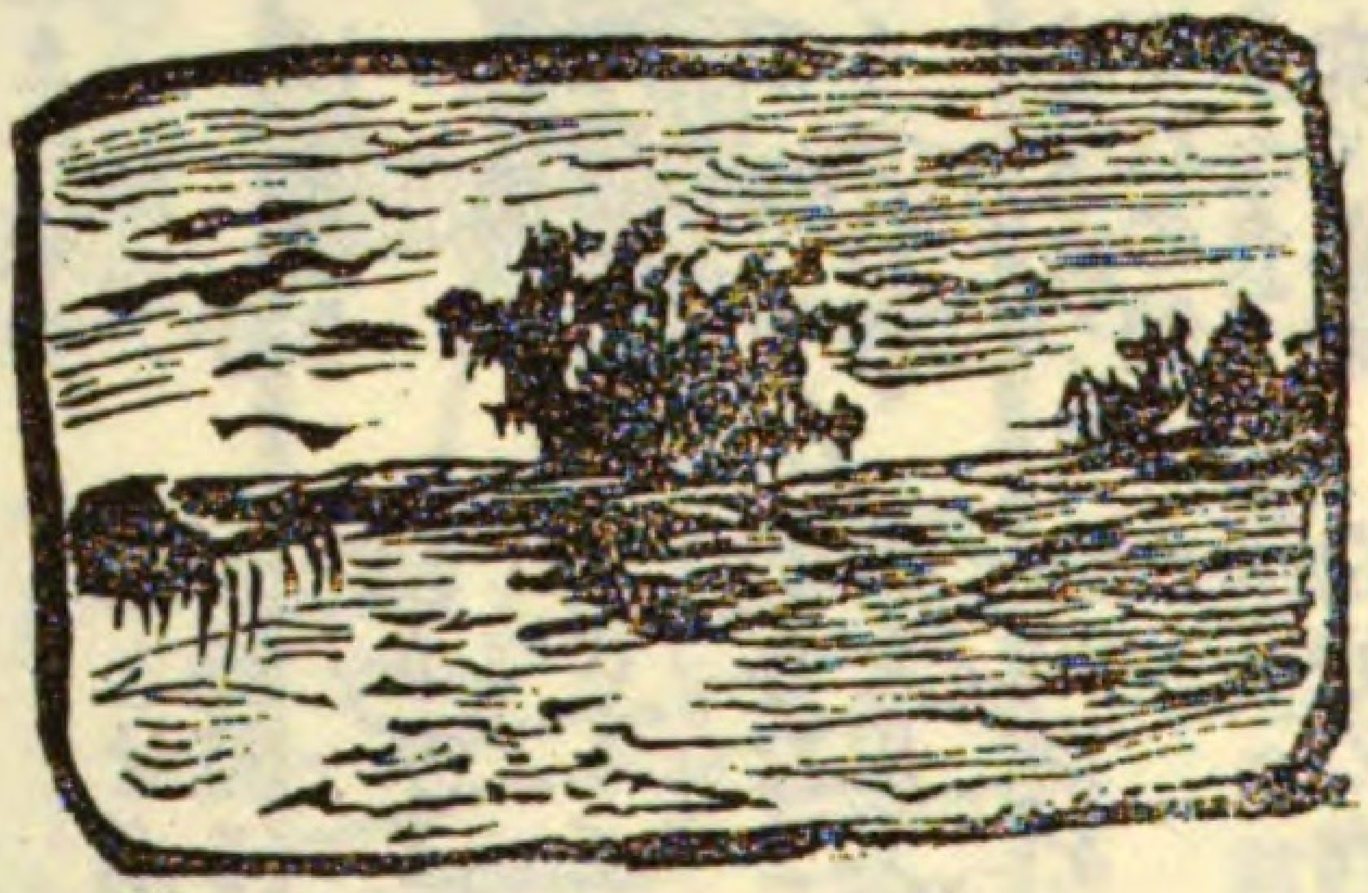
◯　千葉　山田政子
咲きそめし園の白菊手折り來ていざ慰めむ床の上の母

◯　常陸　川並愛子
磯馴松まばらに立てる江南の五戸の藁屋に四つ手あみ干す

◯　群馬　片井滿都子

小さき舟に小さき君をそとのせてかぜに吹かする箱庭
の海 ◯ 京橋 曾村幸子
萬歳の笑顔こぼして門出づる烏帽子に散りぬ紅梅の花 ◯ 安藝 石井千代
若水を汲みつゝ思ふ去年の今朝あだのとりてのおちし
事ども ◯ 神奈川 木村梅子
月淡き今宵ゆく雁眺めつゝ君歌おもへ我
も歌はむ ◯ 横濱 武子女史
君ひとりまさぬばかりに都をもさびしと
思ひぬ櫻さくころ ◯ 武藏 菫香女史
とく起きてうがひをすべくおりたてば朝
風寒し梅に月あり ◯ 小石川 轟木濱子
枯野三里きゞす落ちゆく西の方戀の矢文
のけふも來らず ◯ 上總 小川志美子
燈臺の光殘して松原も岩も小島も雪に暮
れけり
春野 横濱 安田桂子
したがへる孫と曾孫とかへり見てほゝゑみつゝも春の
野を行く
寒夜爐火 金澤 金浦和子
あたゝかき火桶のほとり嵐吹く今宵の寒さよそになし
つゝ ◯ 長門 益田梅子
ぬしやたれしらぬかきねも咲く梅の香をとゞめてぞた

夕ぐれ（選外） 石岡 今泉艮子



ちどまりける ◯ 常陸 西野春萩
出征に兄は召されて母やみて今年この秋稲は實のらず ◯ 小倉 河内美代子
たきぎとりかへる童のやどならん花咲くあたり烟たな
びく ◯ 千葉 石田岩女子
よろづ世もくもらぬものは武士の立てし
勳の鏡なるらん ◯ 伊勢 菰野みさを
新玉の年の初風香る也雪の下にや梅の咲
くらん
雪中竹 芝 石田直子
雪をおもみ枝はなびけどなよ竹の下にか
はらぬよこそ見えけれ ◯ 長野 時雨
隅田川流れつきせめ水の面に御代豊なる
年は立つらん
雪中竹 芝 清水ひやく子
降る雪のよゝをかさねて呉竹のかはらぬ
色にとしやつみなん
凱旋新年 下總 秋山よし子
鷲ひそみ雀は故國に夢なりて年立つ風に
馬のいなゝく ◯ 伊豫 斯波やちぐさ
春日かげかげろひゆけば巣ごもりにわかき鶯そゝなき
そめつ ◯ 愛媛 千代子
山里は早や暮れ近く鶯の聲のとだえに鐘なりわたる ◯ 尾張 渡邊慶子
西詩誦して磯邊さまよふ夕月夜あゝ幸薄きこひにぞ泣

かる

○　陸奥　しらゆき
さりげなう袖すれすぎし若人のおもかげ戀しおもひ出の夕

○　越後　千冬子
野も山もたゞましろなる雪の上にわが思ふことかきても見たき

雁　本郷　朝井松子
小夜更て宿もさだめずとぶ雁は幾島やまを越えて來つらん

○　京橋　雅子
冬の夜を病む母守りて樽くべてもの思ひ居れば雁なき渡る

○　越後　高木久滿子
あめにつけ風につけてもおもふかなわかれし君の今はいかにと

○　神田　山崎千鶴子
放ちやりし小鳥がけふも音づれてさやけく鳴くよ白梅の枝に

○　下谷　太田あきつ
幸なくて一人泣かんの運命哉我にはつらき夕ぐれの鐘

○　越路　志賀みよ子
父も逝き母も世になく兄ぎみは露營に消えてたゞ孤雁なく

○　播磨　天野登美子
み佛のあれます堂の古うして壁にさびしきつたもみぢかな

新年川　小樽　梶水仙子
さし昇る初日の光輝きて豊にみゆる石狩の川

○　靜岡　姫百合女
天津風磯馴の松に琴彈きて海づら遠く霞棚引く

春宵　○　盛岡　江刺家艶子
おぼろ夜にわかき詩人があこがれの梅ちる陰や川ぞひの道

○　麹町　芳野花枝
萬代もかはらぬ民のこゝろをば宮居のまつの色にたとへん

○　神田　太田榮子
海底を鎖せ藻の花浪の香や此の秋あせて汀淋しき

○　名古屋　ますみ
三とせぶり歸り來ましゝ背の君とけふうれしくも佐野の梅見る

○　名古屋　森井せき子
歸り來る馬子の小唄に花散りて白梅村はおぼろ夜の月

親友と別れて　群馬　田所きよし
友さりて桃散り櫻散りにけり明日は何處に誰と遊ばん

○　岐阜　塚原波子
あらたまる年の初めに立てしいしくだけて後に止まんとぞ思ふ

白雪　岩代　武藤新子
塵の世を掩うて積るしら雪もとくればにごる川となりつゝ

子日松　岐阜　松の舍女史
白妙のたもとつらねてみや人が齡をのべにこまつひくなり

○　熊本　鶴の花
ちぎれ雲飛びかふ空に星見えて渡しの小屋の燈火寒き

○　茨城　筑波霞子
我れ知らずうや／＼しとの心より首たれけり初日の出ぎは

○　山形　小林花江子
おく露に思みだれて鈴虫の鳴音微かに鳴音微かに

◎たらちをのかしらの霜も青柳のみどりにかへせ今日のはつ風　福島　穂積やす子

◎野ぎつねの足跡白く霜置きて月影さむき冬枯の原　越前　佐野よしを

◎五月雨に背戸の小川の水増してちひさき燕みだれとぶなり　秋田　黒丸登美子

◎幾ぞたび汽車はあれども吾がせこを乗せたるつてのなきぞかなしき　山城　小春花湖

◎馬ひきて歸る吉田の麓道芒さやさや秋の風吹く　千葉　花田時子

◎利根の朝霞うすれて帆掛舟春の小風におされてのぼる　利根　みどり女史

◎天つ神帆掛舟押す風とめて利根の川原にうす霞ひきぬ　下總　中村よしゑ

◎もみぢ葉の色づきそめし此の夕べ我がなづかのし師の君逝きぬ　陸前　小野寺はる子

◎兄君の手植ゑたまひし梅の花主なけれど色は變らず　姫路　初美

◎夢となくうつゝともなし殘月にかをりつめたき白梅のはな　攝津　和久薫子

亡兄　茨城　天谷雅子

いかにせん親なきあとのいしずゑとあふぎし兄に今日別かれては

夏　失名

萎れたる庭の草木の青々と生きて涼しき夕立の雨

◎雛壇に三五小女の耻ぢらひや灯ゆら〳〵緋桃にはゆる　滋賀　龍井文子

◎吹く風になびくと見せてまたかへる心はつらし青やぎのいと　大和　坂上きぬゑ

◎歌がたる君が御園の山茶花に雨こぼれ來て晝靜かなり　大分　工藤鈴子

◎薄月夜梅咲く奥の高樓に琴のしらべもかすかなりけり　越後　小林さく子

亡き友を思ふて　印旛　相川美代子

同窓の亡き友思ふ夕暮に心ありげに梅の花ちる

◎いさをたてしわが背は遂に踊りこずとはしらでゑむ背が植ゑし梅　伊賀　釋壽子



筏（選外）福島　相田ばら子

◎すら〳〵と流るゝ如き水莖のあと美はしき君が文かな　備中　稲本千惠子

◎幸うすき己が身の上なげきつゝみなさけふかき亡き母を思ふ　播磨　富原ちづゑ子

◎しぎの立つ野ざわのつゝみ日はくれてみきはのあしに秋風のふく　鹿兒島　雪江

◎いはけなくくるひ遊べる幼子を見るにつけても妹こひ　日本橋　馬島たまゑ

しき

○　下総　たか子
若菜つむ少女のうたは霞より霞に入りて春野長閑けき

○　西多摩　愛子
なつかしき君と別れて今ん年の若葉長閑けき春やむかへん

○病中作　宮城　櫻井順子
妹が子の姿はいづこわれは思ふ床に飾れる雛見る度に

○　三重　奥瀬かすみ子
美くしき春の淡雪皿に解きていとうつくしき君を絵がきぬ

○　奈良　清子
なき友のみ墓に詣でかりみち川添堤春雨のふる

○　大和　粂山利子
我が影も凍らんばかり夜はふけておく霜白き冬の夜のつき

○　神田　柳俊子
友鳴きの聲に誘はれいたづきの床をいづれば梅の香にほふ

月前陳思　愛知　紫清女史
すみまさる月の鏡に向ひてもみさとしうけし母は居まさぬ

○　和歌山　露子
たゞひとり辿る枯野の夕ぐれは身にしむ風のそゞろつめたき

野澤の梅　芝　頴川とき子
打けぶる野澤の水に影みえてさきこそ匂ふ梅の初花

○　長野　天絃女
胸板に流るゝ血潮ふきも見て矢おもに君を追ひこしものを

○　新潟　吉川すみ子
朝寝髪とくや柳の淺みどり朝そめ出す宵のはる雨

○　府下　秋津君江
小夜更けて幽かに聞ゆ笛の音に亡き兄君の事を思ひて

○　豊後　平山良子
病む母の寝いきかすかに夜は更けて時雨つめたく水仙花かをる

○月夜思夫　徳島　山本良子
天のはらくまなくてらす望月をおなじ思ひに君もながめむ

○　羽後　菅原花枝
夢いづこ乳母の乳房に笑める兒よ天なる國の母呼ぶらしき

○　もと子
少女子が置忘れにし籠の上に幾日かそゝぐ野邊の春雨

○　千葉　丸山愛子
星一つ北に流れて消え失せぬ神の息吹か木枯の風

○　陸前　尾形千代子
霞むうちに山も眠りぬ野も笑みぬエデンの園のかくやあらむか

○　かの子百合
花摘みてしとねつくりて小羊を臥させて春を過さむと思ふ

○　越前　橋本喜代子
花の世も早や過ぎぬらむ五十鈴川幣吹く神の風ぞ冷しき

○　徳島　山本紫水
照る月にそらとぶかりの二つ三つほのかに見ゆるあはぢしま山

○新年河　宇都宮　青柳謙子
使なす君を送りて今此處に初日拜みつありなれ河邊

○　神田　大澤隆子

朝立の駒の鈴の音寒げなりおく霜白きやぶかげの道　新潟　田村きく子

○白梅の香ひ薫ずる夕月夜ひたゝれつけて馬に乗る人　新潟　北井ふじ子

○衣あろふ里の少女のよき眉に岸の萩ちる夕月夜かな　茨城　青柳愛子

○我せこに郷の書をば見せばやと文にかをりを封じ込めなり　千葉　大崎文江子

○燭さえて琴の音美はし京は五條木犀かをる薄月夜かな　神田　はま子

○鶏の聲もさ霧につゝまれて神代に似たる山本の里　上毛　滋子

○母君の御墓のあたりたゞずめばいつしか袖に月のやどれる　上野　飲野松子

卯の花

吹きすさぶ淺間嵐の寒むければ雪とのみ見る垣の卯のはな　千葉　秋葉ふみ子

霞

寄る浪のおとは霞に包まれて風も靜けき春の海原　千葉　梶まさ子

新年遊

新玉の年の初めに思ふどちかるたとりつゝ遊ぶ嬉しさ　丹後　楓女史

○いたづきに苦しみたまふ母君を慰めかねて夜はふけにけり　名古屋　獅子海なか子

○咲く花の色香はいつにかはらねど來て見る人の色ぞ變れる　宮城　政子

○出征せし伯父君一人歸り來て爐邊の集ひの賑しき哉　上野　菫子

○風吹かば香りやさしき花散らむ春雨はるゝ庭の白梅　大阪　島田ひろ子

○溫かき君が慰藉のなかりせば果敢なの此身如何にかなりけむ　廣島　すみれ

○雪の朝山路も野邊も白うして庭の梅のみ時を得顔に　安藝　いさみ子

○撫子の咲きみだれたる夕野道もの思ひつゝ一人行く哉　廣島　池田幽泉

○わかき駒のいなゝぎ高う世はあけて春たつそらを紅もゆる　失名

○あらたまる年の初めの川上の清き流れもすみ渡るなり　丹波　奥村まさ枝

雪

月の夜に四方をながめば山々は花と見まごふ雪ぞつもれる　千葉　桂影女史

○たちかへる年の始めに大君の御代を壽く國民の聲　羽前　白百合

暮秋

はら〳〵と夕べ寂しく萩ちりぬ月かげ寒きいたづきのとこ　横濱　かすみ女

○水仙に梅折りそへて若き女のたどる墓路雪の降りしく　上總　大塚いわ子

不二山

雲に入る不二のたかねは神代より動ごかぬ國のはしらなりけり　讃岐　片山ます子

○愛でませし梅は咲けどもなつかしき我兄上はとはに歸らず　高知　露蝶子

○曙の空に紫雲のたなびきて春の女神の裳美しき

○越後　照子
父にぬよわきこの子も心して國のみたてとおほしたてばや

愛馬凱旋　三重　山本富士子
榮負うて二とせ越しに歸りくる駒なつかしく胸おどるなり

新年　神戸　輝月女
かるた取る勝ごゑもれて賤が家もおいたるわかき祝ふうれしさ

○神田　佐藤花子
君逝きしあとに名殘りのことはありて夕べ冷き水仙のはな

鶯　佐世保　大西園子
梅が香のあとをとひつゝ立ち出てゝ窓ちかく鳴く鶯のこゑ

○遠江　伊藤花子
思ひ起す三年の昔二人して語り合せし燃ゆる思ひを

○土佐　菫女史
旅人のたち行く袖や寒からしはつ霜白し曉の空

○新潟　翠花女史
一人ならぬうれしき思ひそと秘めし小琴聲ある春の宵かな

○兵庫　林さかゑ
おばしまに一人もたれてつく〴〵と梅が枝になく鳥をきくかな

○大和　今田操子
思寢の嬉しき夢はとだえして枕にほそし曉の鐘

初雪　大阪　ひろ子
枯れはてし木々の梢を今朝見れば時ならぬ花の咲きぞ匂へる

月前蟲　金澤　操女
つきかげの清き草葉になく虫は露にこゑあることゝちこそすれ

○亡き父を懷ひて　山口　内山保野子
亡き父と爐圍みて更くるまで語り合ひにしむかしをぞおもふ

○備後　幽泉子
美き君がピアノ彈ずる南窓に牡丹一葩ゆれてこぼれぬ

○赤坂　大木秀子
母あらば見せてしものを水莖のあとは涙にむせぶ今日かな

○滋賀　辰井琴子
十二襲裳裾ぞ匂ふおばしまに內侍はんべる紅梅の宴

○赤坂　大木房子
父母を慈愛てふ眞心はやがて仇うつちからなるらむ

柳　深川　高橋文子
水きよきいさら小川の青柳の下ゆく水に船浮かべけり

○岩手　名久井とわ子
吹く風もいと靜かなる松蔭に歌や物せん文や作らん

○赤坂　大木ゑの子
大空に星の光りの消もせば闇となるべし人のこの世は

○出雲　倉橋薫子
兄君にふゑ吹きませと弟はおもちやの劍をぬきて來にけり

○神奈川　隅子
すゝき高く萩えだ垂るゝ山道をたゞ過にすぎて車にはせゆく

○出雲　じん子
月寒き深山は雪にとざゝれてうえたる鹿の聲哀れなる

○大阪　今出はる子
美くしき京の童が都ぶりに道な迷ひぞ花うり少女

はがき文



編輯局選

特別第二賞

○テニス

秋田縣仙北郡金澤西根村　佐藤ひさ子

受けては返し、返しては受く、今度こそはと力を込んで打たる球はあやまたず、小氣味よき程勢するどく、味方は見事に大勝利、折からの春風は、かざせるリボンを巻き上げて、暫し頭上に蝶々を現はした。

活躍す明治の女學生。

特別第三賞

○郵便切手

金澤市玄蕃町一ノ三　大地波子

女子文壇に貼られて來る一錢の切手は待ち遠きもの、淡藍色の一錢五厘は懸しき友の繪はがきに、原稿を無事に届けて呉れる二錢切手は親切もの、三錢の切手は妾の好きな栗色て、紫の拾五錢は理想の色。

詩題文題も日に新し。

天

○好きなごはん

神奈川縣高座郡田名村　廣守千能子

まづ栗のごはん、赤のごぜん、それから私人が笑ふけれど栗のごぜんが好きよ、ごもくめしも好きなのだけれど中に這入つてる人參はきらい、それてどんなご馳走ても大ぜいにぎやかに食べるのが好きなのよ。

然かも一生食べるのは白い御飯。

地

○生花

新潟市夕榮町一　小島ゆき子

あの子のは生きがいゝから、買つて上げと、お母さん

が仰つしやる毎日の花賣、今日は日曜だから、おけいこながら買つて活けました。床の間に上げてながめて居りますと、花の影から今夢からさめた樣な、少さい蝶が舞上りました。

古流、遠州流にも無き詩趣。

人

○困つた事　　群馬縣前橋市石川町七番地　林　廣子

袖を鼠にかじられて筒袖にされたる、手水鉢の氷をかこうとして割りたる、暗の夜に提灯の消えし、灰かぐらを立てゝ時ならぬ白髮になつた時、試驗の答稿に名を落した時、人違ひした時。

如何にもお困り。

秀逸

○お友達の名　　大阪　大阪ひろ子

私のお友達は撫子樣、菫樣、野菊樣に白百合樣つて、ほんに麗しいみ名其まゝ花にもまがふ君ばかり。あゝ妾も、美しい床しい菊や菫に、たとへられる樣な身であつたならば。

名ばかりでは

○なきごゑ　　岩代　丹治はるみ子

勇ましいのは鷄のなきごゑ。可愛さうなのは赤ン坊のなきごゑ。哀れなのは杜鵑の泣きごゑ。凄まじいのは狼のなきごゑ。優しいのは鶯のなきごゑ。騷しいのは雀のなきごゑ。聞き惡いのは男子のなきごゑ。

女の泣聲がぬけました。

○無邪氣　　志摩　小林敏江

本箱とは本の箱、大學とは大なる學校、女學校とは女の學校、小學校とは小いさい學校、先生とは先に生れた人とさも得意顏に妹の君子は隣家の六つになる高ちやんに語つてゐた、日あたりのよい處で愛犬と共に

犬の一字あつて活く。

○風　　伊勢　平塚民子

眞に人を悲ましむるものは、雨に非ず、雪に非ず、雲に非ず、風なり、何處よりともなく來り、何處へともなく去る初めを知らず、終りを知らず、蕭々として來り人の腸を斷つ、噫、風は過ぎゆく人生の聲なり。

之れ秋風なり。

○夕餉の後　山梨　若葉

私は裁縫。お父樣は老眼鏡の力で新聞朗讀。お母樣が小さい弟に、お伽話。二人の弟は奥の間で復習。倦いて來ると中學の弟が詩を吟じると二人の弟がはねまわるので皆で轉がつて笑ふ私は九時から書見床に就のは十一時。

灯火、花の如し。

○櫛　岩代　根本松江

兄上凱旋の折、賜はりし櫛、洗ひ髪にさし置いて、失ひてより五日、積りし雪も消え初めたる或日、清水汲みて歸るさ、中ば雪に埋もれたる櫛を見付けし時の、嬉しさ。

譬にも解けず。

○得意の頂點　陸中　綾子

燒け落つる物音、逃げ惑ふ老若、炎々たる猛火は乾坤を包んで、叫喊物凄き火事場に驅けつけた消防夫が、見事に猛火を防ぎ止めて、纒を立てた時の心は、人間界に於けるあらゆる得意の頂點であろうと思ふ。

小說綴あり。

○私の園　長門　園子

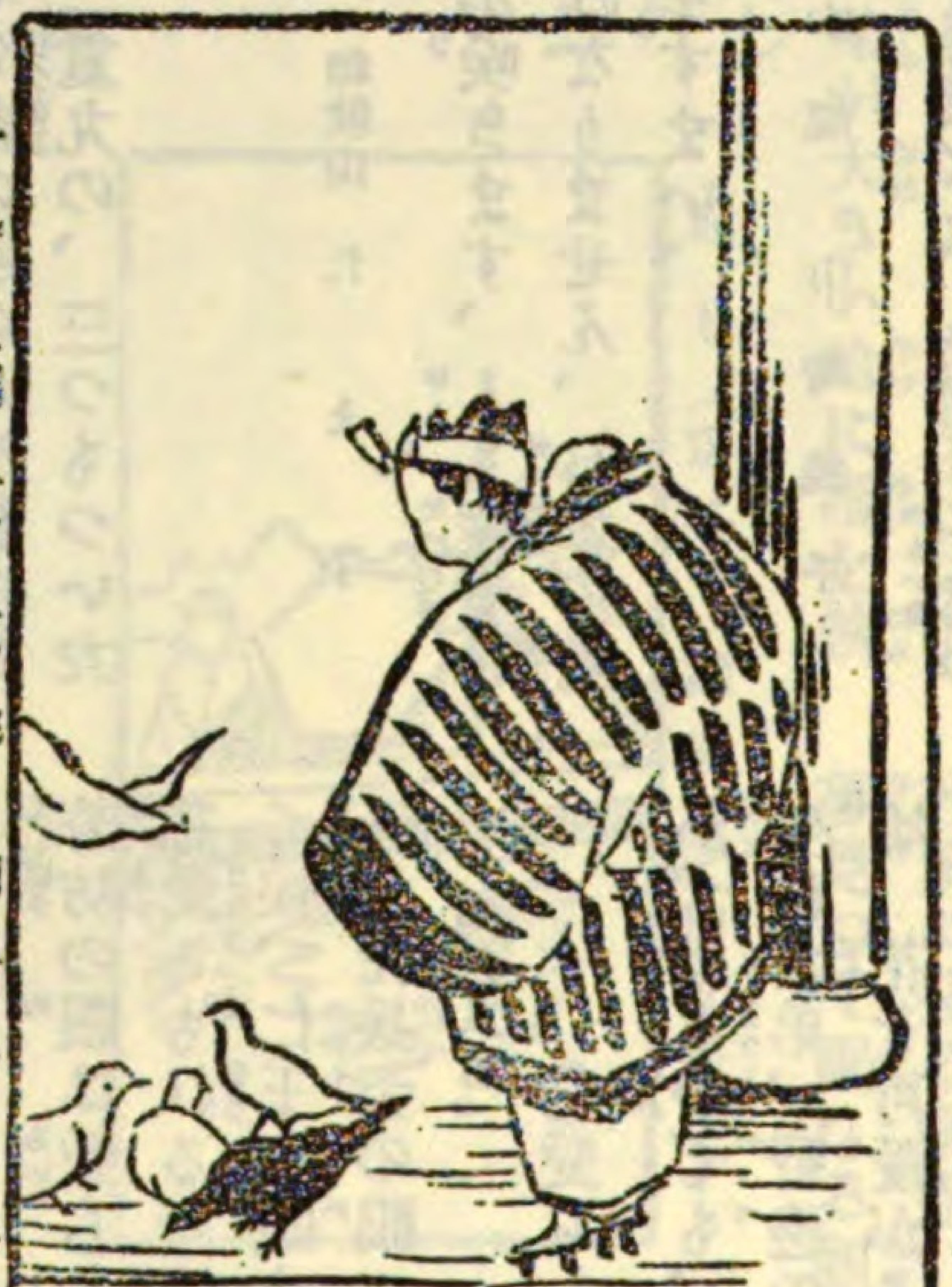
去年からたんせいしてこしらへた苗床へ、此間右の端から茄子胡瓜南瓜水瓜と小さき溝一つへだて、之ぞ菊朝顏唐錦等順序正しく種をふせてより、毎朝々々其所を見廻るのが、何よりの樂しみてす。

園藝は女子を美化す。

○五月雨日記の一節　下總　BY生

五月五日。午後雨しばらくやみて雲切す。

窓によりて外方をながむれば、往來の人、急ににぎはし。氣候穩やかならず、羽織なき人多し。



子守（選外）京都　西村ゆき子

妾も亦袷ほしき心地す。

すだれ質の聲。

○御辭儀の數　松山　黑紅

朝起きた時と出かけに、出てから學校へ行くまで始終授業の前後には一時間毎に、放科後は門際て生徒一人

一人に、私が歸る時は又道々て生徒に……私が一日にお辭儀をする數どうしても百度以上。

亦多しとせず。

○古いお清書　尾張　さとし子

今朝妹のお雛樣の御召を探す爲、倉から古葛籠を出して、中をよく探していたら、七年前の私の小學校の時の珍らしいお清書に、しかも二重丸の、三つもついたのが一枚出てきた。

十歳の神童、二十歳の凡人

○梅を見て　和歌山　たま子

梅でも日受けのよい枝から花が咲きます、人も達者にならうとおもへば日に當らねばなりません、日本の女子はこの事を心がけねばなりますまい。

色の黒くならぬほど。

○試驗の前夜　本鄕　山崎義子

ヤット國語を一通り復習を終りまして、ホット一息つきますともう十二時、これからまだいやな算術を復習せねばならず、これては今晩は休めないかしら、噫常常勉強して居つたならこんなとはなかつたらうに！。

全くです。

○胸の札　尾張　渡邊慶子

私は啞に候、生れは鳥取縣、四歳の時母に別れ父を尋ね歩く者に候。と胸に木の札、あゝ愛にはぐれし薄倖者よと、思わず瞻やると――無心に瞻揚た可愛らしい眼、可哀想なわ、莞爾と笑つて居るのである。

盲啞學校もある世に。

○眼のいろ〳〵　上毛　磯貝すゑ子

芳坊の眼は愛らしく候、ジョンの眼は鈴の樣にて候、慈愛こもれるのは母樣の眼に候、嫌なのは男の横眼にて候、仁王の眼は恐ろしく候、敬意を催すのは義眼を入れた兵士の眼にて候。

岡目入目。

○愛らしい物　淺草　紅花

かずある中でも、人形の顏。幼兒の結付ざうり、今年生れた弟、野邊のさくら草、茶の間の軒へ巣を作つた鳩、花を可愛がる蝶、など。

選者は又、さくら草を愛する人を愛す。

○きゝん日記　仙臺　櫻木かつ子

昨日は御米を五升程頂きそれから妹の爲に御本を二冊頂きました。兄樣は戰爭の時に金鵄勳章を賜はりましたが、今は御父さんや私共に藁餅を搗いて毎日の食料

として下さいます。其て皆に孝行者だと賞られます、だから私等も負けじと御仕事に精を出して居ります。

一生に再び無かるべき日記。

◎蛤釣り　仙臺　奚惠子

急遽しい弟の泣き聲に編物の手を置いて、臺所に行て見たら盥の中で蛤を釣て居た幼弟が大きい蛤に指を挾まれて取れなかつたのでありました。その蛤は直ぐに燒かれて頰の涙のまだ干かない弟を微笑ませました。

蛤のいたづら。

◎捜しもの　長門　益田八重子

無ければよいがと思ふて捜すのに有るものは靴下の穴。有ればよいがと思ふて一生懸命搜しても無いものは女子文壇に覺へある文。

清女、三舍を避く。

◎覗いて見たいもの　失名

御飯を食べた後のお腹の中と、お父様の財布と、毎號當撰する諸嬢のお頭腦と、女子文壇編輯室に於ける記著先生方のお顔と、その片隅の大屑籠の中とが、一寸なりと覗いて見たい。

外は兎に角、編輯室だけは無用の者覗くべからず。

◎美しき物　岩代　阿部つき子

若葉に殘る朝露。波間の白帆雪の降りたる曉。幼子の夢見つゝ眠れる顏。夕榮えの空。寒き朝砂から上る白烟。垣根の萩。欄干によりて立てる女の姿。夜明の空に星のきらめく。

知らず、此作者の姿は。


渡し（選外）陸中　津田さつき子

◎野　臺灣　春野田鶴子

花賣り、青物賣りなど、各々荷を擔へる子等、一人二人と集り來て荷を傍に、野に、今は身をも世をも忘れ嘻々として戯れり。惠み深き春の日よ、永久にこのまゝ暮れてあれ。

生番も春色を浮ぶ。

◎日記の一節　豐後　平山貞子

三月三日晴、泣く子を搖りながら唄ふて居た。『かちかち山のお兎は、なぜにお耳が長ひの、お母さんのお

腹に居る時に、枇杷の葉たんと喰べた故、それてお耳が長ひの、おねんね〳〵よ。』こゝは廣々とした氏神様の堂前。

子守唄が面白い。

○午後六時　本郷　とよ子

今しも食堂て、やさしき琴の音チツコロリン、御となりの臺所てはばあやの洗ひ物の音、すると急に面白相な笑ひ聲が聞えた是れは其又となりの風呂場から。とたんに自習のりんの音、是れ火曜日の午後六時。

西片町か、それとも駒込の奥か。

○母の詐　紀伊　小學女生

お母さんはいつも私に人を欺くな詐を云ふなと云ひますけれど私が病床て居ました時「この美味しひものを上げやう」と頂きましたお菓子の中に、にがひ〳〵ものを入れてありました。

嬉しき嘘。

○登山　香川　梅田靜香

學校から歸るとすぐお隣のちよ子樣と裏手の小山に登た、松の根に腰かけて向ふを見ると、海には帆かけ舟が浮んでゐる、山にはほんのりと霞がかゝつてゐる、ビスケットをたべながら唱歌をうたつた。

眞摯。

○おかげ　府下　綱ヶ谷榮江

學校へ行かれるのも兩親のお蔭、身躰の健になつたのも早起のお蔭、文字の丁寧に書く習慣のついたも繪葉書を使用たお蔭。文章のうまくなるのも女子文壇愛讀のお蔭。

爾く信ずるは嬢の幸福なり。

○裁縫　神田　大澤隆子

オヤ隆さんお裁縫だと思つたら、雜誌ですか。と母様が……平常の優しい御聲でしたけれど、私まあ如何に吃驚したてせう。裁縫を前へ擴げたまゝ一心に女子文壇見てゐたんですもの。

果して袖の縫ひちがひ。

○吹殻　若狹　長谷川英尾子

今まで畑を耕して居た、爺、柳の根にどつかと腰を下して、嬉しさうに、そこらの景色を見ながら、煙草をふかして居る、手の上の吹殻から、煙が出てゐる、しかし平氣なものだ、熱ひとも云はないで。

都人士の面の皮、農夫の掌。

○青菜　加賀　清野忠子

去年の秋、町端の叔母さんから貰つた山東菜の苗を後の園に植ゑて置いたのを、今度滿洲から歸られた兄さんに料理して差上げたら、久しぶりで青菜を食べるつて喜ばれたので、妾もうれしかつた。

平和の勝利。

○ホツと一息　松島松子

丙午の日朝から大風で面はヒユーヒユーとなる、兄様は「今日は丙午だ、火を氣注けろ」と幾度となく皆々に注意なさる、私も氣が氣でない、寝るにもうさうさして居たが、翌朝になつてぽつと目がさめるや、ホツと一息。

此日、他地方に大火あり。

○妾の兄弟　秋田　村井花枝

妾の兄弟は三人で、妾は一番末よ、兄さんは海軍兵學校の三年生、姉さんは小學校の敎師、妾は高等小學校の三年生。

一家學校生活。

○春　伊豆　高橋彩子

春は來ました山に行くと雉子や山鳥が小供を澤山連て樂げに食物をさがして居ります水田へ行きますと大きな蛙が澤山居まして水晶の樣な卵を長くひもの樣に生み付け又たにしのなく聲も心地よし。

珍しくハガキ文に自然の妙諦を聽く。

凱旋兵（選外）　神戸　水田しげ子



○樂しき春　府下　森田喜代子

日常の通り私は老手山へ焚木取に行ましたが餘の長閑さに、高砂の松と名稱られた大木の根方に暫し憩て麗な春日の樣を眺て居たが不圖目に付たは美い山櫻其が根元には振撒た樣な菫の花、母樣には山櫻菫は妹にと取て參ました。

母は櫻をかざす、それも春。

○歸路　埼玉　吉羽よれ子

學校から宅まで一里ほど、一日あまりつよい風故車にのつた處風が車にあたつてそれは〳〵車夫の骨の折れそうな事乘つて居てまことに氣の毒でした、以後はつよい向ひ風のときは乘るまいと思つた。

○いやなこと　徳島　坂野白露

私が學校から歸つてなると、ハイカラ風の中學生が蝦茶式部なんて云はれるのとお友達の惡口を言ふのと、お母さんからお嫁に早くいてとおつしやつた事。

○なつかしいもの　仁川　小國敏子

日曜日に學校の棟がかすかに見えるのと、お友達のお使で來た繪端書と、投書した時の女子文壇！

○落花　肥ノ國　馨子

續きの春雨も今日は殘らず晴れ、今し方登られた美しい朝日の影に庭の紅梅色もとくろやう、突然妹がアレ〳〵と指ざすのでその方を眺ろとサツト吹いてきた春風に老木の梢に殘つてゐた眞白の花瓣がハラハラと。

○岩屋山　三河　かれ子

私は昨年の四月躑躅や藤の眞盛の頃仲よしのお友達と御一所に岩屋山へ參りました道すがら胡蝶等と戲れながら漸く麓迄つきました上つて山頂から見渡すと豐橋を初め大島竹島等一時に眼降　に集つて誠に愉快でした。

○好きなもの　栃木　寺内まき子

學校の學科で一番好きなのは地理と歴史で雜誌では女子文壇朋友では土持しげ子樣。

○姉さま　下總　大崎凌霄花

小窓に麗や美くしい海棠の花が、今朝はいつになう咲いたのも姉さまのお化粧の水を吸ふたからであらうを。あゝ姉さまは、なぜ前のやうに美しくならないであらう、此頃は毎日泣いて居らつしやるが……。

○好きな事　入間郡　山田松子

私の一番好きな事は、母樣にお話しを聞くのと、學校でヘーカード先生に英語を敎はるのと、今一つは先生が明日は遠足に行きます、と仰つた時、此の三つが私の大好き。

○太郎　香川　安西弘子

妾の弟の太郎は今年六歳になりますが大層風呂が嫌ひなんて母が「坊やも早く湯にお入り」との聲を聞くと直ぐ坐蒲團の中へ頭を入れ「お母樣坊やは居ませんよ」。

○蝶のゆくへ　羽前　鈴木花汀

今を晴れ化粧の佐保姫の花衣に、憧がるゝ胡蝶のかず〳〵、紫の菫もてそと追へば、興そゞろげに、ひら〳〵と、果てはおかしや戀しき人の文讀む丸窓のほとりへ、さてもいぢらしの蝶のゆくへなるよ。

○嬉しや　横濱　生田喜世子

ふと眼を醒して見ると破障子に映る人影あれ——つと思はず聲を立てると惶急て逃げ去つた、褞袍一枚引被て——、空屋同樣の我家若やお釜でもと臺所を窺くと依然として宵の儘先づ一安心。

○目白の墓　京橋　矢代あづま

弟の秀ちやんが可愛がつて飼つてゐた目白が昨日死んだので今朝庭の椿の根元へ埋めてやつた。學校から歸へつて來て見ると厚紙へ幼い手で「かわいゝめじろのはか」と書いて建てゝあつた。

○幼兒の寢姿　佐賀　眞如の月

美き幼兒の寢姿薔薇色のその頬玉を伸たやうな胸の柔き眠み、そは名匠の鑿に刻まれた天つ神のやう小く通ふ其寢息の美き夢は何地、慈愛の情迸る母の乳房か我に給ふ幸を此子に授給へと祈る父の腕か。

○心の知れぬ人　大阪　銀菊女

人前で嫌に樣子する人、厚化粧をする女學生と、笑ふ時一番に口へハンケチをあてる男の人、其からチックでべた〳〵に頭を分けた醫學生と、往來で無理に高襟つて突きあたりに來る人。

○朝　能登　千田美芙

ゴーンと希望の鐘が鳴ると今度はボー〳〵と破魂しき紡績會社の氣笛鳴て井戸車のギー〳〵と軋く頃は東空に七彩の燦光が漂いて來ろ雀の囀り豆腐屋の呼聲偖は雨戸さては荷車と錯然たる音に活劇の初幕は開かる。

○妾の母ちやん　石見　藤岡久子

妾の母ちやんは父樣の死なれた時にも泣かなかつたのに妾がある晩のふる夜辻占賣りに出る後姿を見て美ちやん許してくれと泣かれた時には妾もなんだか悲しかつたわ。

○光の王　栃木　高田うら子

天て光る物は太陽地て光る者は金剛石、世界て光る者は日本の國、家て光る者ハ御父さんの頭。

○日記　陸中　なか子

都に物學び給へる松子の君より、都の春を知り給へとて、美しい、御玉章に櫻花二ツ三ツ封じこめて送られぬ、妾よりは、田舍の春を知り給へとて室咲の梅花二ツ封じて御返事差出しぬ。

○何でも　羽後　鈴木しゆん子

春とはいへど未だ寒く、木々の木末に殘んの雪は、消えもやらて、誰をか待顏なる、折しも庭の梅の木に鶯のなく聲「姉え樣彼鳥とつて下さいな」と妹はいふ、姉え樣は何ても、出來得るものと思つて居るらしい。

○失望　德島　齋藤きく子

妾が村の田畝の一部には桃となく櫻となく植つけられてある妾は春がきて花となるのを待ちに待つた春は來た桃の蕾はふくらんだ色づいた桃の枝はイツの間にか伐りとられたソシテ市内の花屋の店に束ねられた。

○淋しい夕　堺　竹曳文子

黑雲の樣な鳥の大群が、森を放れて飛んだ、鳥は人の死を報ずとか、誰か今、冷たい死の床に横はつたのてはあるまいか。黃色な雲が一流れ流れ去つた。何處の鐘の音か、此の世が深い奈落に沈み行く樣、ゴーン。

○鐵瓶の音　下總　渡辺たか子

さんや樣を待たんとて炬燵に入りぬ、不知々々寢りぬ折しもあれ鐘の音……驚き起きればそもこはいかに鐵瓶の沸いて蓋の上下するとは。

○廂髮　渡島　松井長子

今日の二番て親類から大勢人が來るので、私は今髮を結ぶべく鏡臺に向つた、丁度そこへ母樣がいらしつて「今日は例の廂髮はお止しなさいよ」私はハイとかすかに。

○李の月　上毛　河内汀柳子

野良から歸つて、足を洗はうとしたら、池の中に微な月影があつたので、ふと仰げば、眞白な李の花の間から漏れて居た。花も一入淸く、月も一入麗はしく、そこには、何とも言ひ盡せぬ程の風情があつた。

○チヤボ　備後　高杉みゆき

妾の家にチヤボが一番飼つてありましたが、此間雄は野良犬に食ひ殺されました、雌はそれても矢張卵を産みますので妾が可愛そうてと云ひましたらお父さんは昨日鳥屋へ賣つてお仕舞てした。

○野邊の春色　靜岡　高木とく子

背く勢の宜い麥が見渡す限末は霞か炎陽か賤機山は摸糊として紫色に野中を流れる小川に銀波きらめき汀に咲亂れた白梅一樹梢の邊鶯の聲が洩る蜜餠炊ぐにや藁屋の煙ゆら〳〵と草摘む小女唱歌歌ひつゝ霞の中に消て行く。

○うれしはづかし　津市　中村うめ子

あなたの歌が女子文壇に出てゐますと云はれし時の心地、學校て先生に賞詞せられし時の心地、紋付と着かへて外へ出た時の心地、汽車の中ておべんを使ふ時の心地、寫眞を見られし時の心地、婚禮前御目出たうと言はれし時の心地。

○花瓣一つ　大和　岡田しづ子

書齋に四五日以前小さな窓をあけてもらひました私嬉しくて開けて置きました、梅の花瓣一つ風に送られて本の上に乘りました、これから朝夕も開けておきましようと思ひます。

○磯の夕暮　能登　池野白百合

浪の音が靜かになると、暮靄がほの〴〵と立ち迷ふて、衣神社の灯が夢の樣に瞬く、磯山櫻がちら〳〵と散る。星のお母さんが櫻貝をお土産に

持つていらしやるのは遺髮膏だそうな。あれ鹿の聲!。

○影法師　宮城　手　漾

冬の日の三時頃であつた、母が玉や叔母樣家に御使に行つて御出、と云ふから左程遠からぬ叢山へと足を向けたが影法師を見ると實に自分のようではない是では顏まで細そりしたのかと急ぎ家に歸つて鏡を見た。

○小雀　陸前　花月子

お日樣の西にお歸へりなさる時、私は米をとぐべく、底深い裏の井戸に行くと小雀が五六羽、凍えつひた米粒を可愛嘴でコト〳〵つゝひて居る、可哀想だと思つてパラリと米をまひてやると、アラ飛んでしまつた。

○好きな物　三重　長井惠美子

綠蔭のハンモック、オリーブ色のリボン、御友達からの御手紙、紫の御袴、三宅さんの水彩畫、花籠の梅花、青柳に螢、梨の花、箏の音、君が代の唱歌、女子文壇と雪中の水仙花。

○月の精　吳市　林　蔦子

姿は冴えて行く月の精に誘はれて今し柴折戸ソト押して裏の菊畑に彳む颯と吹く冷風に袂をゆれて月が葉末にくだける、フンたる馨が袂をかすめてゆるう天に流れ入る。

○逝く春　三河　白萩子

肋膜炎とやらで御歸省なさつた兄樣を慰めやうと、朝櫻美しい窓の戸を開いたら、ハラ〳〵と散り込むだ花の幾片「アヽもう春も逝くか。」と腕を組むで、お考へ込みなさつた、兄樣は今年二十八!。

○お花見　芝　芝野水江女

花見に行こうと思へど美しいショールや頭の光つたハイカラの中へ袷一枚の苦學の姿が如何して這入られやう!其處で思付いたのは裏の櫻そッと一枝戴いて藥の空瓶に差し是も花見だ。

○妾の幸福　明石　玉島せき子

頭から爪先きまで流行の裝ひ花とばかりお久しゆうと綾子樣に訪ばれた時は勿躰ない夫をお怨み申したが添つて四年一人の見もないのが何の幸福と却て身の上羨まれて思はず添乳の坊をひしと抱きしめた。

○苦學　大和　安川よしを

牛乳の配達を終つて下宿屋へ歸つてくる途中。二階の窓から「花ちやんごらん。每朝町を通學る女學生が牛乳配りになつて」と云はれた時ひやッと頭から水を浴せかけられた樣な心地がした。

○禿筆　名古屋　原田こと子

この筆で何度投書したかしれないけれど、一度も出た事はない、そしてもう筆はなくなつて最後のこれも、もう先が切れ終つた。

○かはづ　兵庫　みどり子

夏の夜半、蛙が軒端をちよろ〳〵と流れて居るいさゝ川に、ふし面白く玉水の音を數へて居る蛙がある。あゝ彼は何時から數へ始めて居るのであらうか!?!。

○若菜摘み　岡山　永原多計子

今日は學校も休みであるし、日和はよいので、妹の天流ちやんはお隣の絹ちやんと一所に、程遠からぬ野澤へ若菜を摘みに行きました、妾は二人の行く方を見て居ると雲間の雲雀が節面白く囀りて居りました。

○女の資格　紀伊　素美麗女史

姉さんが何故歎いてゐるのとも了解らなかつたが今朝離座敷でお父さんが濁るんだ調子で「一晴露子一度嫁つた身は再び人の妻となる資格はないのぢや、お互の不幸ぢやと思ふて辛棒して吳れ」後は姉樣の啜り泣く聲。

○男學生のお好み　大阪　近藤しも子

あてゝ見ましよか、第一は女學生次は下宿屋住ひ、加留多とり、お寄と音樂會、戀愛小說に美人繪はがき等でしよ而してお寄りになつたらいつも女學生のお話!。

○嫂樣　信濃　乳深初音

嫂樣の昔話に聞きし時、嫂はこはい物と思へり、今の嫂も嫂はいやと云

ふ、されど妾は蛙様大好きなり、其答よ、此頃も妾に綺麗なリボンと繪端書と五十錢も一圓も出して、買て下されしもの……。

○しぐれ　本郷　静子

九時がなつた、大急ぎで床をとつて、さー極樂淨土へと横になると、熱い事まくらと思つたのはおばーさんのアンカだつた。

○遇感　京都　岡山ゆき子

或日御苑内を通る、犬走を行く金髮の少女、年は五歳計なるが、つと道のつきたるに、手を延せば乳母らしき黒衣の婦人、外より強く引く、兒女は三尺の墻を踰えて平然嬉戯す、之れ東西婦人活動の根本的差異也。

○見せるもの　藤枝　若栄子

凱旋の夫に見せるものは、今年の稲の出來、髮を結はずに積んだ貯金の通ひ、當撰の歌、父様の遺言、留守に生れた坊主。

○月夜の繪に　熊本　財津哲子

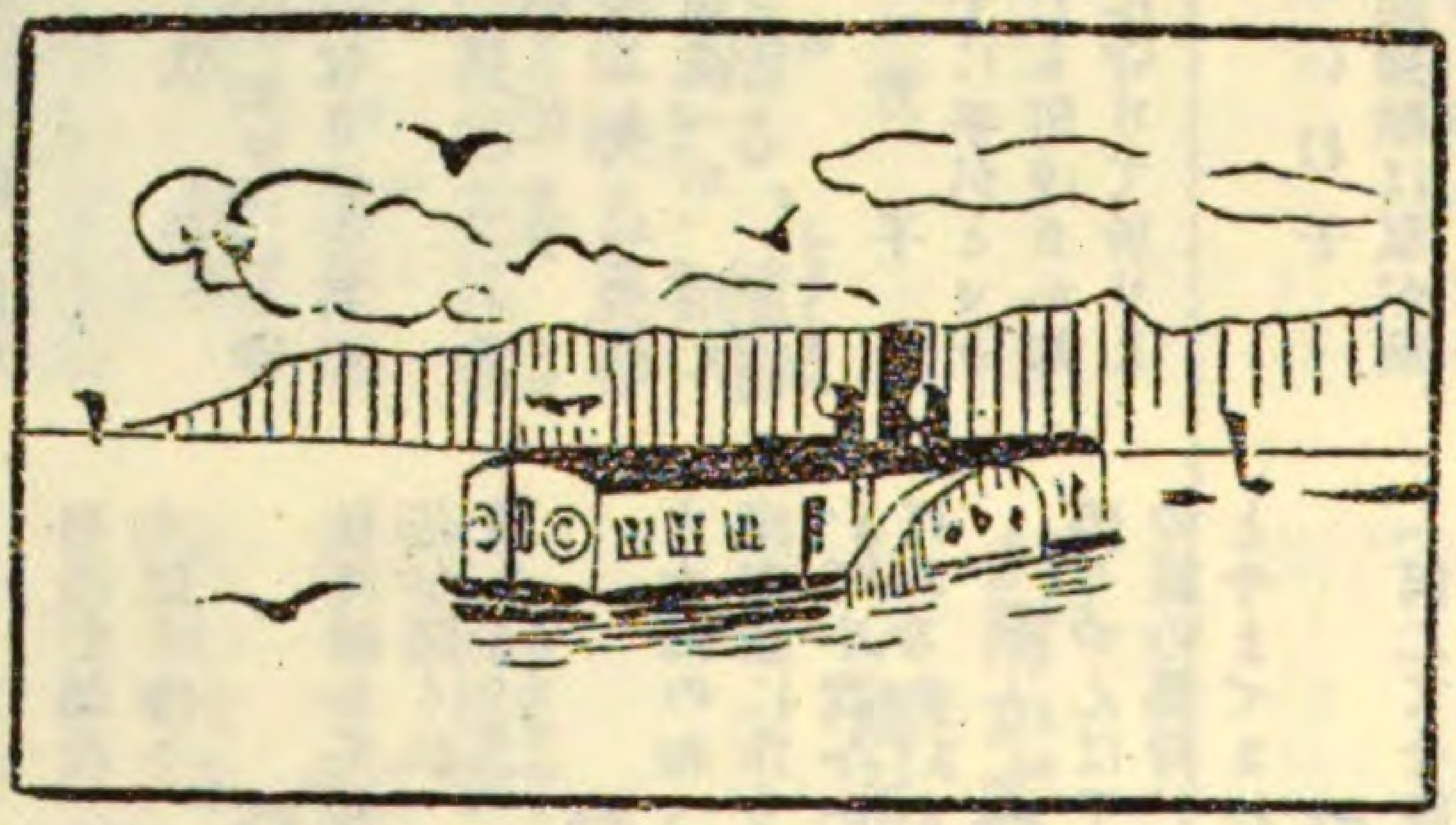
今、月は向ふの梢から優しい笑顔を表した、見渡す限ぎり一艘の小舟もない遙な湖、誠に天だ、水の面をすべり來る風の涼しさ。

○盃の上　三河　しらはぎ子

派手なのが樂燒の猪口、ちよいと澁いのは備前燒の徳利、ひれくれて滑稽なのは楊枝挿て、今戸燒の可愛らしい狸！。

○一月一日の唱歌　和泉　安田信子

こゝ村はづれのよほど古びたる學校、こは妾の母校なのである、妾は今田圃よりの歸り途この前を通りつゝあそので折しも聞ゆるオルガンの音ふと止まつて耳かたぶくればおゝ懷しい一月一日の唱歌妾ももう一度あんなに歡つて見たいことよ。



滊船（選外）　芝川原むつ子

○嬉しき元旦　山梨　北村うめ子

慈愛深き母様よりの玉章早速披らき見ますと、年始のみ言葉に、私の名の梅の花が描こめてあるのてす、あまりの嬉しさに、初日に向ひ取あへず、筆の初めとして日記にしるしました。

○只今　大坂　拙女

箱庭の旅人は、今朝の雪に足を惱み居り申候、妾は妹と小鳥救濟所を設け、雀に糧をやり居り申候、玉は梅のこぼるゝが如き、足形つけつゝ馳巡り居り候。

○山茶花　出雲　白すみれ

御母様に一寸御藥をさし上げて、來て見ると、あら、どうしやう、今しがた迄活き〳〵して居た山茶花の大きい白い八重が蒂の所からフッツリ切れて居る。

○大風の日　陸前　古河松枝子

昨夜からの大風が今に至るまで止みさうもない、仕方なしに用事があるけれ共後にして、表のゴー〳〵となる音にのみ氣を奪はれてつくれんとして居ると「郵便」と勢よくばさりと音した女子文壇。

○ある夜　淀川畔　白椿

チーン、おやもー一時だ、何、構ふものか、夜が明けてもと、一心に、考へていますが、どーも、よい文が出ませぬ、折から母様のお聲て、「お前まだ起てるのか、もーおそいだろー、早く寢ないといけませんよ」。

○齲齒　越後　堀川弘子

今年取つて五ッになる花ちやんは、今しも虫齒の爲に七轉八倒、それ醫

者よ樂よと云ひし間もなく、「母ちやんもーよくつてよ」とニコ〳〵笑ひながら母の膝に起き直り、「ゆーべお約束したあのお菓子を頂戴。」

○あゝ夢　　信州　小林貞子

漂茫野には美しい花や蝶や鳥が何れも金色の光りを放て、清凉い風がスーッと吹き過ぎたと思ふと得ならぬ芭香が鼻に迫つて妾は最う醉心地てす、と思ふ兩手を犇と握り徽笑るゝを見れば一葉女史と薄氷女史。「貴女能く迎入つて……」……あゝ夢⁉ハテ何處でせう。

○親ごゝろ　　小石川　千代子

國元の母から小包が屆いた明けて見ましたらたくさんの「チカチン」と砂糖とが入れてあつた甘いかからいか母の心を味つてごらんなさいと書いてありました。

○月の一夜　　磐城　村岡花子

東都の姉を戀ひて、み空を遠くながめ、物思ひに沈んで居ると、一つの星が西より東へと流れて行つた。すると、妾の煩悶は、何處へか、消えて、床に安く眠り入る事が出來た。

○妾が母　　上總　鬪芳子

妾は父は無ひのです、けれど母はあるのです、てはや四十に手がとゞきそうになつたのです、それ故妾は癡悛せようと云ひましたら何ゆゑか知らないが、お母さんはホロ〳〵と淚を流し、默て妾の顏を守りて居りました。

○寒梅　　本所　井口いね子

昨夜活けた白梅の、水上げが心配て、今朝早起して、客間掃除は私が致しますと、大急ぎで床の間へ行て見たら、おゝ嬉しいぱつと勢よくたつた三輪、馥郁たる芳香を放ちて。

○耻しかりし時　　遠江　伊藤巖子

人の數多寄りつどう所にてわが衣に蚤のをりたりと云はれたる時、先生の眼の前にて妾見を落せし時、物を求めしにマチ〻の足らざりし時、又戀にやつれたる妾が妾の人に知られたる時、最とはづかしかりき。

○火事　　埼玉　小林きやう子

火事々々⁇⁇既に村上屋は、み空の星の悉く地におちてもゆるが如き火焔にのみ盜され、消防夫はたゞ災を他に及ぼさじと勉むのみ、遂に下宿生二人は燒死しぬ。翌日部には珍らしき處女の搏められて行くを見る。

○何年立ても變らぬ物　　京橋　巨子

明治の御代、親の慈悲、東都の繁華、我家の梅、光ちやんの誠心、冬の水道の冷さ、姉さんのなさけ、富士山の景色

○兄様の花　　廣島　箕岡すゝき

秋は誰とて目を向ける者もない、葉、櫻、梅、桃、いづれも春になると花を開くが、支那の國で戰死された兄樣の花は春が來ても秋になつても開かない。……兄樣の花はいつ開くだろう。

○世界一の大文豪　　山梨　内藤とし子

白木綿の布へ兄さんが命ずるまゝに、世界のあらゆる文豪の名を縫取て座布團に作らへてやつた、兄さんはいつも此敬慕して居る名家を尻へしいて小說をかく、其作物の是非は、兎も角く兄さんは世界一の大文豪てはあるまいか。

○ねざめ　　松山　黒紅

美ちやんは千鳥競爭て第一等、花ちやんは福引競爭で第一等、此度は私の組の櫻狩、きつと一等を占めて見るよ、と合圖の一發、ふと目がさめると今までさわいて居た聲はかはつてたゞ柱時計の音ばかりがカチ〳〵。

○試驗の前夜　　北海道　松井長子

「何んて今晩は寒いのだらう」と云ひながら明日の試驗の東洋史を諳記し始めた、机上の時計は十時マイナス五分。「長子さんや風邪を引返すと不可いから最うお休み」とお義母樣の御聲私は思はず感淚にむせんだ。

○工女　　和歌山　大野さち子

愛ちやん、泣ないてネ、溫柔なしく待つて居るのてすよ、姉さんかい、姉さんは今日から活版所にいつてれ、爺さんのお藥や愛ちやんの御本なんか買ふお錢を貰つて來るの㋵。

附録



文藝雜感（夏の卷）

記者編述

夏の花

夏の花は春の花と自ら異つた趣を具へて居る、植物學上の事は暫く措いて、單に詩人文士の眼に映る夏の花は何うかと云ふに、熱烈な、壯快な處は夏の花に多い。牡丹の如き、芍藥の如き、紫陽花の如き、芥子の如き、皆壯んな花で、色で云へば柘榴、杜若、躑躅、百日紅のやうに、眼の醒めるやうな、派手やかな色の花が多く咲く。氣候の關係もあつて自然に夏の花は、夏のやうな色に咲くのであらう。晝顏の花は薄い紅色であるが、それが又熱烈な夏の日の花らしい、古來の詩歌に夏の花の熱烈な趣を歌つたものは少い、餘り意が附かずに居たのであらう、何うしても夏の花は夏らしい處を歌はねばならぬ。

夏の七快

柳里恭は雲萍雜誌に、夏日の七快を書して曰く、湯浴して髮を梳る、掃除して打水したる、枕の紙を新たにしたる、雨霽れて月の出でたる、水をへだてゝ燈のうつる、淺き流れに魚の浮みたる、月のさし入りたると。以上七つ、快は勿論快に相違ないが、未だ外にも夏の快事があらうと思ふ。今、此處に思ひあたるまゝを追加して、新七快を作つてみやう。朝早く草の露を踏む、新しき瓜を剝く、氷を銀盤に盛る、若葉に日射

して椽側などに青う映りたる、眞夏の日盛りに廣野を歩む、夕方より縁日に遊ぶ、夕立雲、以上は自分の七快であるが、聞きたいのは諸嬢の七快である。

蕪村の夏

俳聖與謝蕪村は夏を何う見たてあらうか、悉く句を綜合して、研究して見たならば面白い結果が現はれるてあらう、玆には五六句を抜いて、蕪村の夏の片影を窺ふて見やう。

端居して妻子を避ける暑さかな

蕪村は獨身論者てなかつたから、態と避けたのてはあるまいが、女の髮の臭ひや、子供に縋り付かれる事などは、確かに蕪村ならざる人も暑い。

石工の鑿冷したる清水かな

古往今來、清水に此程の警抜な眼の着け處を得たものはなからう。鑿を冷すと云ひ、石工と云ひ、其清水の清冷と一致し、塲所も、周圍も想像出來る。句としては鋭い力を持つた句て、蕪村集中でも傑出して居る方であらう。

かりそめの戀をする日や更衣

衣を更へると女も男も若く見える、見慣れて居る人ても、其面まで見違へるやうになる、今迄想つて居なかつた人を想ひ初める假初の戀、衣を更へた程の戀てあつて深い事は無い。更衣に戀を發見したのは、蕪村の手腕て、更衣の『日』と云つて、時間を明確ならしめたのは面白い、此外、蕪村には更衣の句が多い、『御手討の夫婦なりしを更衣』『ころもがへ母なん藤原氏なりけり』『更衣金覆輪の鞍置かん』など皆一癖がある。

釣しのぶ蚊帳にさはらぬ住居かな

八疊に、六疊に、二疊の玄關があつて新築、家賃八圓敷金二個月分、庭は五坪許り、隣りは空地て一帶の森を見渡す、庭には縁日の撫子あり、七草の若葉あり、樹よりも草が多い、夕方、間があると主人は草をいぢり、謠曲の一つ位はうたへると云ふ人物、勿論毎日電車て下町へ出勤する。

繪團扇のそれも淸十郎にお夏かな

芝居もお夏清十郎、唄もお夏清十郎、淨瑠璃もお夏清十郎、何も彼もお夏清十郎、團扇の繪のそれさへもお夏清十郎、俳句も風俗史の一部を補ふ事がある。

　虹を吐いて開かんとする牡丹かな

牡丹の形容としては思ひ切つて大膽に言つてのけたる處は流石に蕪村て、平凡俳人には出來ない離れ業てある。又曰く「閻王の口や牡丹を吐かんとす」閻王は閻魔王て、繪に見ると如何にも牡丹を吐きさうな口をしてゐる、閻魔大王も天才に生捕られると、此の如く詩化する、其他牡丹に傑作が多い。

　鮒鮓や彦根が城に雲かゝる

此句は說明するほどまづくなる、只鮒鮓は近江の名產てあると云ふ事と、彦根は近江の一城下てあると云ふ事さへ知つて居れば、他は各自の考へて聯想を促すより外に詮ない。鮓と云ふ事と、城に雲のかゝると云ふ事は何等の緣もないが、蕪村は或る日、或る時斯う感じたに違ひないから、讀者は其感じを聯想する迄だが如何にも神秘的て、一種の味ひは確かに存して居る。

蕪村が好んて鮓の句を作つたのも、有名な談話て、又鮓の句には殊に名作が多い「鮓壓して暫し淋しき心かな」の機微を穿ちたる、「鮓桶をこれへと樹下に床几かな」の詞態の超脫せる、鮓は蕪村以來、初めて個中の味いが附いたと言つても可い。

夏祭

文明の進步するにつれて、趣味の轉移するは已むを得ない事て、人文の發達上、寧ろ移り變りのある事を祈るが、彼の夏祭の如きものも次第に衰へるに相違ない。一は宗敎上の關係から、一は趣味の進步から、所謂祭禮なるものは追々廢滅するてあらう。併しながら祭禮と云ふものは、一種の野味があつて、見やうに依つては甚だ詩的てある。今も地方へ行くと、夏祭また秋祭は一年の安息日として、鎭守の杜は村夫野孃の爲に、賑ひを呈すが、都會の祭禮、例へば京都の祇園祭大阪の天神祭、東京の山王祭の如き、今も行はれるが德川時代ほどの全盛を見る事は出來ない。比較的京大

阪の如きは猶ほ其餘習を保つて居るやうだが、東京の祭禮は淋しくなる許り、地車は電線の爲に動けなくなり、樽神輿は子供も馬鹿らしいとて擔がず、舊式は廢れる一方である。併し祭禮の木遣節や、町内に幕打廻らして女子供の美くしく着飾ることなどは、例へ實際には無くなつても、繪なり歌なりにして殘して置きたいものである。偖て祭禮の重んぜられた德川時代の頃には、全國に渉つて各神社に古式があつて、嚴重に其方法を保存したものである。だから祭は俳句の季にもあつて、馬琴の調べた處に據ると、夏季の祭禮は左の通りである、せめて名だけでも覺えて置く必要があらうと思ふ。

四月。稻荷祭(山城紀伊郡)。伊勢神衣祭。鼻高祭(南都興福寺)。日光祭(野州日光山)。地主祭(京都清水)。大神祭(大和)。大津祭(近江大津)。和歌祭(紀伊和歌山)。堅田祭(近江堅田)。加茂祭(京都)。吉田祭(京都)。多賀祭(近江犬上郡)。當麻祭(大和)。筑摩祭(近江坂田郡)。中山祭(京都三條)。向日明神祭(山城)。梅宮祭(山城)。久世祭(山城)。山科祭(山城)。八瀬祭(山城)。山崎祭(山城)。松尾祭(山城)。當宗祭(河內)。江州八幡祭。手安天神祭(近江)。山王祭(近江日枝)。三枝祭(大和)。嵯峨祭(丹波)。平野祭(山城)。廣瀬祭(大和)。杜本祭(河內)。住吉卯の祭(攝津)。菅の宮祭(近江)。

五月。今宮祭(山城紫野)。兩社祭(近江下坂本)。室明神祭(攝津)。宇治祭(山城宇治)。松本祭(近江)。藤の森祭(山城)。新宮祭(近江三井寺)。住吉田植祭(攝津)。

六月。嚴島祭(安藝)。伊勢祭禮。博多祭(筑前)。橋立祭(丹後)。竹生島祭(近江)。大山祭(相撲)。津島祭(尾張)。夏神樂。江戸淺間祭(淺草)。江戸天王祭(神田)。江戸山王祭(永田馬場)。熱田祭(尾張)。祇園會(京都)。志渡寺祭(讃岐)。

文藝と園藝

園藝と云ふ事も一種の流行物のやうに思ふ人もあるが決して一時的のものではない、從來、植木いぢりは隱居樣の仕事のやうに思はれたものが、系統的に、科學的になつて來たので、將來も必ず一種の學科として獨立するやうになるであらう。園藝と云ふと甚だのんきなやうだが、其實草木を培養するのは、趣味のある事でもあり、又實益にもなる、殊に女の仕事として甚だ適當である。園藝に心を注ぐならば、夏の事て、草木の成長するのは夏季に著しい、夏季と園藝とは離れ難いが、單に眼前の考へて云つても、朝早く草木の世話をしてやり、又夕方少しの暇に水を灌いて遣るとか凡て夏向に宜い娯樂は園藝であらう。園藝は科學的である如く、又文藝的である、それは申す迄もなく、其草木に就いて詩趣を聯想する事で、或は古今東西の其草木に關する詩文を知る事も面白からう、新しく詩歌の材料とするにも、其草や花を自ら養ふて居れば、多大の興味を惹く。試みに一つの草を養ひ、其成育して行くにつれ、自分の嬉しい感情を詩歌に詠んで御覽なさい、其詩歌も亦、花の如く活々としたものが出來るであらうと思ふ。

東北の凶作

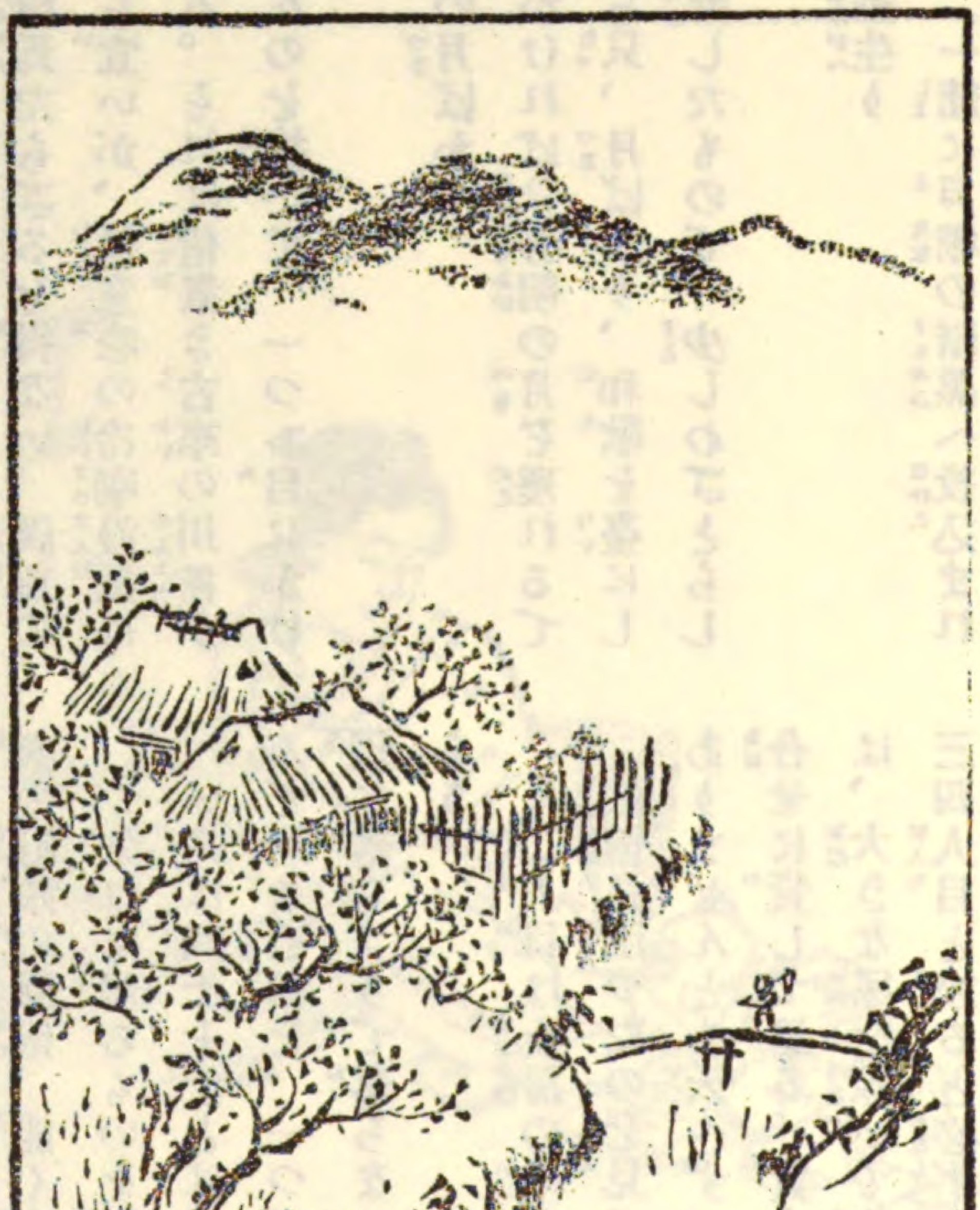
昨年東北地方の凶作は、近年の慘狀を極めて、天下の同情を動かす迄になつたが、由來、東北地方は氣候寒冷、本洲中部に比較すると、五風十雨の地に宜しきものなく、自然荒蕪する事も多いやうである。明治以前にも凶作の歲が多かつたと思はれる、東北の饑饉慘狀を書いたものも殘つて居る。民間備荒錄と題する二冊の書は、寶曆年間の凶作を救はん爲め奧州一の關の人、建部清庵と云ふが農桑蔬菜の培養法を說いたもので其序文の一節に「寶曆五年乙亥五月中旬より寒冷行はれ八月の末まで雨ふりつゞき、其間五日七日雨歇むといへども、寒氣は初冬の頃の如く、三伏の暑日も、布子を襲し、水田へ入りて芸る者は手足冷え龜手ぬる

程の寒氣なりければ、稻は植たるまゝにて長ぜず、漸く穂は出たれども實ずして、枯れぬる故、奥羽大いに飢饉し、諸民の嘆き言ふばかりなし、我一の關には、儲蓄倉をひらかせたまひ、大夫司農の侶、心を盡くし救はせられけるゆゑ、餓莩の患はあらざれども、他郷より來る流民、鵠形鳥面の老弱男女、蟻の如く群り來るは目もあてられぬことゞもなり」とある、以て當時の摸様が察せられる。

神話中の女

神話と云ふもの、趣味あること、又詩材として歐米ては最も神話を重んずると云ふ事は何人も知つて居る日本ては未だ詩の材料として神話を研究する程の人は甚だ稀である、高眼の士は早くより之に着目して、日本の神話を詩材にして居るやうだが、今玆に掲げる小神話は詩材になる程の事も無いが、一寸、人の知らない殊に女子の起原に就いての話だから興味がある、但し此れは印度の神話である「印度の神話に於て、歐洲のヴアルカンに當るトワシユトリといふ神様が、時の初めに於て、世界と男とを拵へた、さうして此事が濟んて女を造らうと思つた時に、神様が、もう男を造る時に總ての材料が盡きて仕舞て固形體がなくなつたと云ふ事を發見して、そこてトワシユトリが困つて、深く沈思した。所が突然一の考へが起つて、さうして左の如き性質を取り集めて女を造つた、其性質といふのは、月の圓さと蛇のうねり、樹の枝の撓さと草の戰き、蘆の葉の纎さと花の觸り、枯葉の輕さと牡鹿の睨み、陽炎と雲の涙、風の浮氣と兎の臆病、孔雀の虚誇是に雀の胸毛の柔さ、金剛石の堅さと蜜の甘さ、虎の殘酷と火の暖かさ、雪の冷さと樫鳥の饒舌及び鳩の鳴聲、以上の數十點を集めて女を造り、さうして之を男に與へた。然るに八日經つと其男がトワシユトリの所へやつて來て、言ふには、神よ神の造られた賜物は私の存在を害する、彼の女は絶間なく饒舌て私の時をまるて取つて仕舞ふ彼女は又何時も不快の風て私には一寸も有難くないから、之をお返し申しに參つたと謂つて其

儘歸つて往つた。すると又八日經てから神の許へ其男が又やつて來て云ふには、神よ私の生活は彼の女を御返し申した以來甚だ寂寞の情に堪へぬ私は彼女が饒舌り又歌ひ、私を眼の隅てにらみ、私を樂ませ私を賞めてくれた事を忘られない。ドウか彼の女を再び貰ひ受けたいと云ふから、神は又其女を男にやつた、處が又々三日經つと、此男が神の前へ如何にも鬱々として立ち現れ神よ私に譯は分らぬが、彼の女は私に愉快を與へるよりも確に苦痛を與へる事が多いから、再び之を取戻してくれと云つた。そこで神は大に怒つて云ふには、行け汝、汝は汝の勝手な風に女を取扱へ、以後は我の關する所に非ずと、乃ち男は大息して悲しんだ。而も神は曰く汝は女なくして生活する能はずと、男のいふには扨も情なき事だあんな者と一緒に住む事も出來ず、又あんな者なしに住む事も出來ぬとは、我等も實に惘れな者だ、噫」



（大塚明湊女史筆）

川柳の趣味

川柳と稱ふもの、最近數年の間に文藝の一部を占めるやうになつたが、元來、昔の川柳には、滑稽の上乘とも見られべき名句があつて、川柳も馬鹿にはならない、只、現在の川柳なるものは輕浮、取るに足らぬものが多い、理窟ばかり達者

になつて、句作には一向見るべきものが無い。却つて、惡口や皮肉や冷嘲や、人に嫌はれるやうなものもある女學生に海老茶式部の代名詞を與へたのも川柳子、與つて力あるもので甚だ嫌焉たらざるを得ない。諷刺の意の籠つてあるものなら宜いが、無意味の冷嘲漫罵は士君子の耻づる處である。それは借置き古來の川柳から、罪の無い面白さうなのを拔いて、一つお目にかけやう。

つんぼうは只有明の月ばかり

時鳥なきつる方をながむれば只有明の月ぞ殘れるでも、耳が聞えなかつたら只、月ばかり、和歌を臺にして一寸手短かに滑稽を弄したもので、少しわざとらしい嫌ひがある。

疊まれた蚊は雷に蘇生り

朝、蚊帳を疊む時に、一緒に戸棚の暗黑へ投込まれた蚊が、ソレ雷鳴と云ふ騷ぎに、晝の蚊帳を吊すと死にかけた蚊は、お蔭で蘇生る、蚊帳と云はずに能く蚊帳が表はれて居る句法、上手なもの。

此處に居りますと娘の門涼み

名を問ふまでは何處に居るか知れなかつた娘が、涼み床の人の後で、小さうなつて居るのを發見した。内氣の町娘の風俗、能く穿たれてある。

知れて居るものを數へる泉岳寺

いろは四十七士とは、子供も知つて居るが、扨て並んで居る石碑を、一つ二つと數へて見たいのが人情、理に落ちさうて落ちないところが、此一句の生命であらう。

二人目は女房の傘を貸してやり

俄雨に困つたのを見ては、先に貸しましたからもうありませんとも云へず、二人目には女房の傘でも間に合せに貸して遣る。貸す爲に傘を用意してある家などは、大きな家を除いて普通、先づ無いから二人目乃至三四人目と來ると必ず女房の傘たらざるを得ない。

噓よりは八丁多い江戸の町

噓八百、江戸は八百八丁町、いづれにしても噓は噓なり。

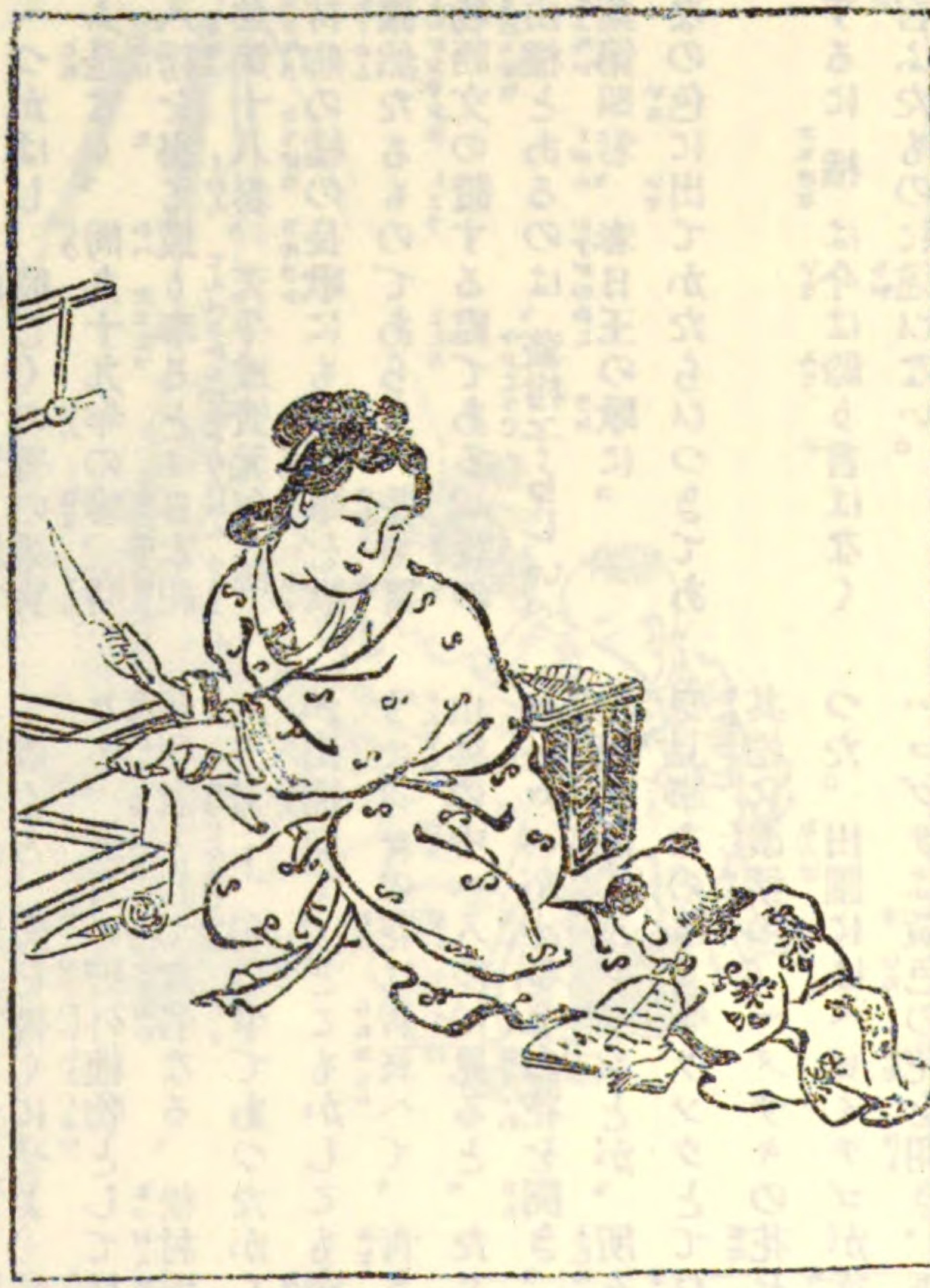
胸ぐらとたぶさを分る兩隣り

裏長屋の夫婦喧嘩を寫生したもので、是ほど明瞭簡潔なものはない、兩隣りから來て、一人は亭主の胸ぐら手を放し、一人は女房のたぶさ捉む手を分る、實景活躍、川柳の骨を得たるもの。

一筆申されて下女困つてる

下女は最も多く川柳に詠まれる點に於て、居候と同じ。一筆申されてと、辭を働かしたのは最も妙で、複雜した思想を十七字に盛るには、何うしても一種の語法を要する。

其當座火吹竹にも紅がつき



（大塚明壽女史筆）

新世帶の花嫁、ランプのホヤを日に一つ宛割る時分の事であらう。

比叡おろし式部一枚かきなほし

源氏物語は近江石山寺に參籠して書いたものだが、湖水へ吹落す比叡山颪の風一しきり原稿一枚飛んで了うたので、紫式部は墨すりなほして又考へる。

たちばな

橘に就いては疑問がある、今、諸國に見る橘と稱する物は、藪柑子ではなからうか、單に橘の實と稱する果實は餘り見掛ない、想ふに昔、蜜柑の種類も皆橘と言つたのであらう。蜜柑と橘は文

學上の區別と、植物學上の區別が甚だ混雜して、今遽に斷言し難い、只たちばなと言ふ果實を重珍したのは古來よりの例て、其初めは垂仁天皇の九十年、田道間守に命じて、常世の國へつかはし、時じくの香の果實を求めしむ、今橘と云ふ是なり、同九十九年の春、時じくの香の果實、八竿八縵を得て還り奉るとは日本紀に見えたる處で、萬葉集第十八卷、天平感寶元年閏五月二十三日、大伴家持卿の橘の長歌にも、其事を歌うてあるから、歴史上確然たるものであらう。花も實も一つにあるとは是も物語文の證する處である『枕の草紙』木はとある條に山橘とあるのは、藪柑子らしい、山たちばなの歌は、萬葉第四卷、春日王の歌に。

あし引の山たちばなの色に出てかたらひつきてあふこともあらむ

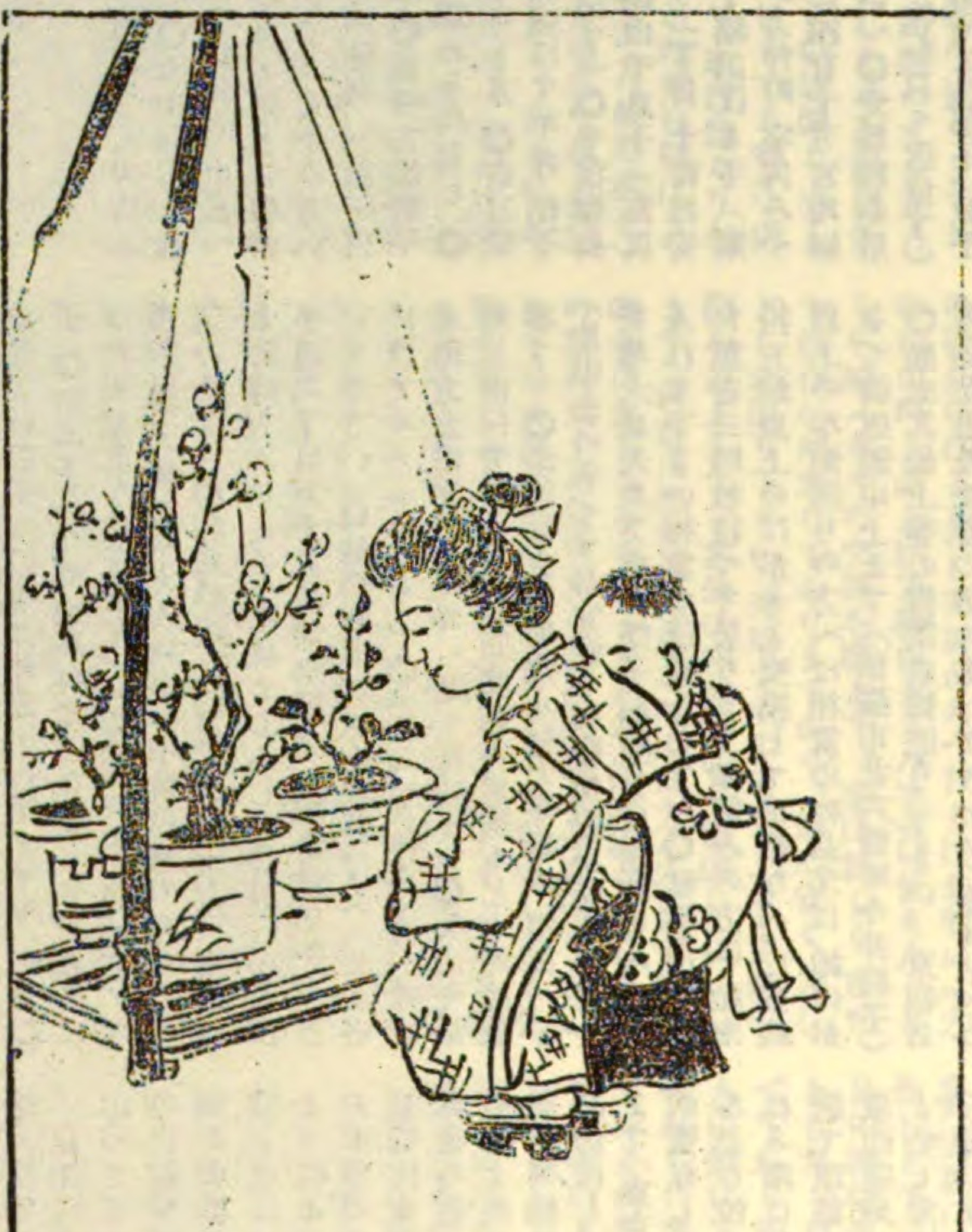
と云ふのがある。要するに橘は今は餘り言はなくなつたが、以前は多く言ふたものに違ひない。

五月の野外植物

何月にせよ、我等は野外を歩いて、自ら植物學の力の無い事に驚く、一草一花と雖も、問はれて見ると其名すら返答の出來ぬ事が多い、必ずしも專門家の如く深く硏むる要はないが、一わたり植物の名などは覺えて置くと、文を書くにせよ、詩を作るにせよ、助けになる、五月の野外植物として茲に抄出する一節は、植物學者として有名なる、松村博士の少時の手記てある

「五月上旬の事てあつたから、畑にはオホムギの穗が出揃つて、どこもかしこも靑々として、フヂは花盛りナタネの花は皆衰へて、靑き實となつてしまつた。山林の中へ入つて見ると、たゞ靑いばかり、中にミヤマハコベが小さき白花を開き、黃花を開くキンランと白花を開くギンランとが、所々にあるやうな次第で、只見事なのはレンリソウとて豆の類で、丈は一尺許其梢に濃紫の、マメザキの花を數輪開いて居るのがあつた。田圃にはヘピイチゴが赤き實を結んで居り、ハハコグサは黃色の花を開き、キツネアザミは淡紅色の花、サギゴケは紫色の花を開き、ゲンゲバナは盛りを過ぎたれども、尙ほ幾分か花を持てるものもあつた。ムツヲレグサ、スヾメノテツポウ、タガラシ、イヌガ

ラシ、スカシタゴボウ、スヾメノカタビラ、タ子ツケバナ、チシバリ、コウガイゼキショウ等が咲き亂れて居つた。荒地にはケシアザミあり、ヤブジラミあり、チガヤあり、別に美しき花と云ふものはなかつた、樹木ではニシキギが花咲き、ヤブテマリが花咲き、ホヽノキが花咲き、タニウツギが花咲き、ツルウメモドキが花咲き、マルバウツギが花咲き、コウソが花咲き、ニガキが花咲き、ミヅキ、カマツカ、アカヾシ、イヌグス、サンショウ、マユミ等を見うけた。樹下の陰地には、ホウチヤクソウが、青き釣鐘の如き形の花を開き、テンナンショウは、コンニヤクに似て奇なる形の花を開き、ハナウドは茎の高さ三四尺、八重の葉を生じて茎の頭に、白色五瓣の小花を「カラカサバナ」に開いて居るのを見た。溝の中にはカハヂサとて、葉は「ムカヒデ」にして「ハナカムリ」の四ツに裂けて小白花を開いたものもあつた。日のあたる野原には、ヤマハタサヲがあつた。秋になつて花咲くシラヤマギク、ホトヽギス、ミヅヒキ、アキカラマツ、ノダケ、ミツバショウマ、ヨメナ、ヨモギ等は、芽を出して繁茂して居るのを見た。ノイバラや、エゴノキや、イボタや、ガマズミ等は皆蕾であつた。」



（大塚明壽女史筆）

讀友俱樂部



○繪葉書交換

○東京小石川區上富坂町十九番地中村武夫方木村花香(筆跡の美はしきを望む)○大和郡山町森本峯子○小石川區小日向臺町三丁目廿六 中島つぎ子(肉筆も好し編物、寫眞の交換も乞ふ)○神戶市元町通五丁目卅四 市川とし子(男子の方から來るのは困ります)○宮崎縣西諸縣郡飯野村原田植原ひろ(文通も願ひます)○長崎市高野平八五本多柏葉子(住所は明瞭に認められたし)○府下大島町龜戶九百八十八鵜澤花と月 ○奈良縣山邊郡丹波市三島郡山詰所北陸室にて平井 朔子(御返事には奈良名所繪葉書を呈す)○千葉縣長生郡帆丘町本納和國屋書店方 高山千鳥子(寫眞も送つて下さい)○芝區愛宕町二丁目十番地安東方富永とみ子 ○本鄕西片町十福田はる子(栞の交換も)○福島縣耶麻郡嘉多方仲町 字內みつ子(寫眞も)○高知縣高知市枡形四百十五宮地榊方さゆり(肉筆のを送つて下さい)○愛媛縣新居郡神鄕福田仁子(着次第相當の物を以て返信す)○京都府相樂郡祝園村菅非 櫻田ゆき、郁子、敏子○淺草北富坂町十九、 小泉方村山玉枝 ○北海道小樽區手宮町十五、鈴木らくむ(船來又は御自筆に限る即日御返しいます)○京橋區木挽町 一ノ十四猿けん子(一々御返事をいたします)○島根縣能義郡母里村、原芳子(五錢以上の美しき繪葉書に和歌俳句を書いて送つて下さい)○新潟縣三島郡塚山村今井芳子 ○北越鐵道塚山驛內島久子○紀伊日高郡藤田村大字吉川 阪本作松樣宿翠閑女史(俳句繪葉書に限る天地人五等迄 聊か賞品を送ります)○安藝國甲立局 區內深瀨箕岡內中濱美枝○愛知縣中島郡豊田村字ノサキ 田島頴子 ○信濃下高井郡穗高村本山秋子 (先着五名には私の寫眞を差上ます)○京都府下 向日町ノ內重松敏子(成るべく人物畫、子供の繪のあるのを望みます)○靜岡縣遠江國榛原郡白羽村 增田庫太郎樣方ふじえ子(手紙もよろし)○神戶市中山手通六丁目五十三番清水露水 (和歌俳句かを書いて下さい)○淡路洲本細工町龜非汀女(先着者にはアルバムを呈す)○滋賀縣大津市濱通 松本米田方太田直子(其外に栞や肱突も)○美濃今尾町三田村芳美(地方新聞雜誌の交換も乞ふ乾度返事す)○福岡縣京都郡延永村大字延永 增田一子(片田舍の者ですが宜敷く)○仙臺市新名掛町一番地大泉先生方武田榮子(舶來又は繪葉書を袋に入れて下さい相當の返禮します)○私縫箔をした葉書三四枚持つて居ります御望みの方は 舶來拾五錢以上のはがきと交換して頂戴ななほ五錢以上のを御送りの方へは相當の物品又は 繪はがきて御返禮申上ます(仙臺市北六番町今井綾子)○舶來其他上等の畫葉書御送り下さい、 京都名所畫葉書及先着の方六名へアルバム(最も古)を上げます(京都夷川通東洞院東入山崎樣方玉川)○皆樣から繪葉書下さつた御方には それ〴〵御かへしいたしましたがもしや洩した御方は どうぞ御申込て下さい、 そして不着の御方 栃木の北山けい子樣廣島の長崎春波樣紙上をもつて 御禮を申ます洩した御方には改めて 御かへしいたします(愛知縣中島郡豊田村平野俊子)○私は女子文壇の愛讀者ですが、 繪端書や、しなり、名刺入の內御望のものを 差上申ますから、 舶來の繪端書を送くつて下さいれ (仙臺市新名掛丁 一番地大泉先生方佐藤やそよ)○諸姉樣?…… どうぞ左記宛て繪葉書を御送り下さい、 美麗なのを送つて下すつたお方を二十名選んで 二十錢以上の書籍や雜誌をさし上げます (長野縣 小縣郡上田町常磐城新町、 宮坂方、川瀨ちどり子)○諸嬢樣よ私は繪葉書狂人ですからどうか交換を 願ひます私も必ず上等を送りますから 新體詩、 小說の本望の方は 十册程ありますから差上ます (愛知縣海東郡大治村明眼院內きく子) ○先日は 繪端書を送つてくださつたに 名のみの女や、 男子の方もありました以後は粗雜な ものを送られた御方同樣に返事致しません ポストカードは優美高尙にしてお孃樣や七八歲の男兒に 交換を願います(東京內藤新宿番衆町藤田方有村花江子)○病魔私しの傍を放れず今の世がいやになり 前途を思ひ泣き暮す者てす其不幸なる私を慰めてくれる者は繪葉書てす何卒同情有る方は 繪葉書を送て頂戴決して取たくりは 致しませんから (大阪西區阿波堀裏町百十一番邸 中村喜月)○諸孃よ妾も愛讀者の一人て御座いますが 以後御心安う願ひます、 妾はまた繪葉書が大好きてす 皆樣美しい繪葉書送り被下いましな妾も極く 美しいのて御答致しますから れ下等のは趣味がありませんから嫌やよなるべく 詩的なのを れ、 住所は(京橋區長崎町一ノ十二若松みどり子)○まあ私實に豫想外てしたわ 押花の申込者が殆んど四十

入名てしたの、勿論そんなに有りませんのですから先月お約束した通り美しい繪はがきのお方にのみ送花しました、平凡の繪はがきの方及び住所不分明のお方へは送りませんでしたから惡しからず皆樣『舶來』の系はがき下さいましなおねがひよ、私は自製栞を送りますから、必らず舶來でなくともいや和製のでも宜ろしいから五錢以上のを下さいましな（北海道龜田郡七重村番外地松井ちやう子）○諸嬢よ妾も自然美を愛する一人です志を同じうする者は肉筆の繪はがきに俳句なり和歌なり新體詩なりを書いて送つて頂戴な拙いのですが屹度お返はいたします（京都吉田町字走屋倉服部方岡田露子）○妾は繪葉書に毛筆で和歌なり俳句なりをお認めになすつたのが一番歡迎致します。どうぞ今後送つて下さるお方は俳句か和歌を一首だけ認めて下さい妾しも出來得る丈け良い繪葉書に和歌か俳句を書いて御返事をしますから（岩代國信夫郡平田第一高等小學校内丹治はるみ子）○繪ハガキの交換を願うと云ふ方で繪ハガキを上げても返してくれません返して下さつた方へは謝します、又誌友の皆樣何卒繪ハガキの交換を願ひます圖畫の交換も、妾も直樣返します（埼玉縣北埼玉郡大塚村江森茂）○妾が御願ひいたした繪葉書交換者に告ます出雲の田中はる子樣をはじめとし愛知の宮本きぬ子樣都合十名の御方にはそれ〴〵雜誌を送りましたがまた他の三十入名の諸姉樣には繪葉書で御禮申し上げましたがとゞきましたか（長門長府沖子）○私冬休から今までかゝつて大和の名所古蹟十七ケ所寫生したる繪葉書七十枚程出來上りましたお望の方は玉章否可成は寫眞てお名を知らして下さいそして私が差上げるに際し何方に何れをと迷はんを避けん爲一枚々々小さく號をつけました、デ皆樣もお名の下へでも小さく一より七十迄の中で何號なりとも任意にお書入れ下さいまし（福引の樣だけれど）若し同號があつたらば先着に（大和松山町上新上西方靜山まさみ子）○皆さん、どうぞ繪ハガキの交換を願ます、妾は親しく百五十餘枚を用意してありますから、御心安く、どしどし御送り下さい、先着十名の方へ、女子文藝一部を差上ます、其他は相等なので御返しいたします（神奈川縣愛甲郡厚木町山田方小澤周）○皆樣妾は嶺子さんや艮子さんの從姉妹なのよ和製の拾錢以上の繪葉書及舶來繪葉書の交換を願います妾は佛國製及獨逸製のもので御返しします先着の御方三十人に妾の寫眞差上げます（陸奥鰺ケ澤字漁師町三宅活子）○長野縣の北原婦美子さん郡名以下が消印でわかりませんからお返事が差上られませぬどうぞ敎へて頂戴い、それから男の方はお斷りですよ。（三重縣安濃郡新町古河山田ひさ子）○親愛なる女子文壇愛讀者諸君よ、先達妾が六枚一組宛御交換方を願ひました處が非常に御贊成下されまして有難う。今度は又、蕃人婦人の舞踊、蕃人女學生、風景其他珍奇なものを百五十枚も蒐集しましたから例の如く諸姉の美術繪葉書（各一組宛）を交換致したう御座りますから何卒至急申し込んで下され、又夏子、ホトトギス、新古文林（一組）寬風戀風、乳姉妹等の小説御所持の御方は妾が、思出の記。白露集となら孰れとても又繪葉書なら新古文林一組を除くの外他は前記繪葉書二組と交換致したふ御座ります御望みの御方は成るべく早く下名へ（臺灣新竹停車場第六號官舍望木樣方、波江野紫子）○臺灣總督十年紀念繪葉書一組或は第三回紀念繪葉書の内篤志看護婦の部三枚一組を御惠送被下し御方にはそれ〴〵滿洲軍凱旋紀念繪葉書（表裏に紀念スタンプあるもの）を以て御答禮致します（東京府下立川村丸芝方磯谷紫江）○先日の繪端書交換の處に私の名が岡本增子とありました、あれは「ます子」では有りません「鹽子」ですから折角美しひ繪葉書を送り下されました人に誠にすみませんが御許し下さいよ、其から今あらためて永久に上等の繪葉書を交換して下さいよ肉筆でも和製でも何んでも善いかられ、先着者の人には近頃發行した「シルレル」の詩集と「ユーゴーの詩集」とを差し上げますよ（備中國玉島町字乙島町岡本鹽子）○誌友の皆さんから繪はがきやお寫眞を澤山下さいましてありがとう妾し二月二十日から少し家に居りませんで二十日後着きましたのは兄さんにお返ししたのみしたがもしお返し仕なかつたお方には誌上を借りてあつくお禮します（秋津の里にて常陸高濱町東大橋酒葉つれ子）○私自筆繪葉書の希望しました處皆樣より大層お惠み下され早速返す筈でしたに病氣の爲不在したもんですから延引になりました誠に取急ぎ多數を描たものとて中には餘程亂筆も有ましたが右樣の次第惡からずお赦しを（岡山縣久米郡稻岡南村字南庄杉本駒子拜）

▲注意、自今繪葉書交換の記事は成るべく住處姓名を初めに書き出

し、條件は括弧內に認め、共に二十一字詰二行以內に濟むやう願ひたし（記者）

○圖書交換

○私持つて居ります小說三十册ばかり揃へて置きましたから月末までの申込み人三十名に一册つゝ上げます先着後着の方にかゝわらず必らずくじ引きて上げますから遠くの方も月末まで申し込み遊ばせ其につき前編後編など二册上られませんから其御つもりて（岩代郡山本町德田初音）○皆樣の中で小說八犬傳の中、下の二卷御不用で相當の代價で御ゆづり下さるお方はありませんか若しあれば早速本欄で御知らせ下さい（願ふ子）○私は大の音樂好てすが姉君方の內に女學校程度の唱歌集、實捌店代價など御存じの方は何卒お知らせを願ひます、姉君方の內に面白い唱歌集御持參の方はお貸し下さいませんか、お願ひ申升（陸前岩ケ崎町佐々木貞代子）○「テニソンの詩、破蓮集、人生の審美、新婚旅行（小說）、トルストイの人生觀、トルストイの家庭、」あり「毒草、むらさき、睡蓮、小扇、其他歌集」（新派）をお送り下さる御方に御好みのものを御返し申します（近江高島郡太田朝見安子）○私の手許に『理科辭典』がありますが入用のお方は郁文館發行の『世界歷史辭典』と御交換をねがひます、其他小說では紅葉著『多情多恨』、『魔風戀風』上編、抱一庵著『聖人か盜賊か』上下不用てすが、皆樣の內『未だ見ぬ親』『小公子』『無花果』『黑潮』『逍遙著『桐一葉』『牧の方』かお持ちの方はどうぞ、交換を願ひます、（長野縣北佐久郡小諸町平野そう）○私、明治三十七八、兩年の女學世界が不用になつて居りますから繪葉書か又は栞封入の上御申越の方に差上げます他の書物と御交換下さらば猶々うれしう御座いますけれど。（神戶市兵庫東出町三、二百十川田米子）○諸姉樣の中に離小島や須磨の曲なぞの歌を御持の方は御座いませんか御持の方はどうぞ御めぐみ下さいまし私は音樂は大好きですから（府下豐多摩郡澁谷村淺野初子）○谷田部順子先生の裁縫敎科書御不用なれば相當の代價で讓て下さいませ（靜岡縣濱松町元魚四三鈴木しほ）○和歌麓の塵。女子の立志編上卷。婦人のかゞみ。みだれ箱。おられ酒。日本の家庭一號より六號までありますから小說乳姉妹。夏子。良人の自白。不如歸の歌などゝ交換いたしたいのです（栃木縣河內郡姿川村幕田八十二荒川芳枝）○私只今手許に女子文壇第一卷一號より十二號迄大町桂月先生の錦のしづく女學生訓及女學世界など有りますから皆樣の御中で小說魔風戀風と換へて下さる方が御有りでしたらどうぞ下名へ（臺灣臺北南門街三ノ七寺本芙蓉子）○諸孃の中に小說良人の自白全部及び藤村詩集を御持ちの方は私の紅葉全集第六卷と交換して下さいませんか切に希望致します（大和高田町堀江三郎方霜月）○伯爵夫人、夏子、青春、乳姉妹、相思怨、新生涯、澄子、魔風戀風、金色夜叉、の中どれでも送つて下すつた方には「作歌自在、和歌麓の塵、俳諧獨學、西洋料理法、內外遊戲法、下田歌子先生家政學講義、荷生一夕話」「英詩研究、不如歸の歌、花紅葉、夏扇、花天月地、毒草、藤村詩集、淑女妙文集、唱歌大海原」「濱子、地獄の花、女夫波の前編、小公子」の內御望みの本をお送り致します（水戶市上市風露の下、山田千代子）○皆さん本誌一卷五號、六號七八九十十一十二號及增刊さゞらぎ御持ちの方はどれでもかまひませんから御送り下さい、御禮は其れ以上の物て致します（京都市夾川通東洞院東南側、玉川饗庭）○私事作文辭書不用に付き女子文壇一卷一號より二卷三號までのを御持ちの方は何卒御交換願ひます一二册不足でも宜しうございます男子の方はかたくおことわり申す（京橋區木挽町二丁目五番地關口君子）○私楠公唱歌の本を以て居りますが字はまづけれども御のぞみの方にかいて上げますから下名へ申し下さい又十二ヶ月唱歌も持つて居りますどうか御はがき下さい（弘前市大工町成田石）○文學雜誌の御不用の誌二册以上惠送被さる御姉樣には先着二十人樣には關名產小刀にて御禮致します（美濃關本町加藤杢次郎方加藤蝶子）○左記の書籍を送呈致しますから御望みの御方は至急御申越下さい矢張り繪葉書へ書名を小さく記してね青春（讀賣新聞切拔卷の卷）。文科大學々生 生活（讀賣新聞切拔）。大家俳句集。黃菊白菊。まさご六册。山高水長。（備後神石仙養村油木局區內池田都子）○私は次の書籍を持つて居りますから交換を願ひます「紅葉全集、中辭林、雪月花、美文の作り方、手工紙細工、近世作文敎科書、英佛聯合征淸戰史、日淸戰史、不如意（大和吉野郡南芳野村大字鳥住四二宵山とし子）○諸孃の內に「花守、舞姬、廿五絃、帝國畫報の本年度第二號」以上の內何れか御持ちの方は私の「即興詩人（森林太郎譯）上卷下卷、小波著の戀の畫葉書、不如歸の歌、邦文日本少女の米國日記、通俗小說文庫、新

小説、文藝倶樂部、懸賞文集」以上の何れかと御交換下さいませんか御交換下さる方は下名迄ヱハガキにて(上等の)御申込み下さいませ必ず相當のヱハガキにて御答申上ますから。(筑前嘉穗郡飯塚町桐山圭枝)〇妾は文學雜誌こぼれ梅二十册ばかり其外和歌俳句の雜誌も持つて居ります何品にても交換をいたします(備中小田郡笠岡町加藤内佐藤芳子)〇諸姉様の中で中學文壇第八年第一集第二集と不用の御方があつたら送くつて下さい又古雜誌の交換も願ひます(茨城縣那珂郡戸多村大字戸四拾九番地綿引はや子宛)〇私は雨江、羽衣、桂月さんの合作花紅葉と桂月蝶二先生の少女と山水等其他色々の雜誌を持つて居りますが何か相當のものと交換願ひたひのです。又新聞や繪葉書も願ひ升(横濱市霞町一丁目豊岡秀影)〇誌友諸姉様妾に冒險小説空中飛行艇と女學世界が五册と不用になつて居ますが御うつしゑか他の雜誌、書籍と交換して下さいませんか(香川縣大川郡三本松町松永茂子)〇女子文壇壹の卷第七號と女學世界定期增刊世界各國の家庭各壹册宛不用に就き御望の御方樣は繪葉書にて(長門萩町増野國子)〇皆さん妾は秀才文壇の四卷と五卷で都合貳拾册計り持つて居ますの栞か繪端書送つて下さつた方に上ませうそれからお寫眞も送つて下さいな必ずそれ〳〵の御禮は致しますから(常陸國新治郡高濱町東大橋酒葉貞子)〇妾のもとに金色夜叉食道樂夏の卷秋の卷あります御望の御方と巾着か栞と交換致します御送り下さい倘昨年の女學世界廿四册あります栞御送りの方か繪葉書にて御申込の方に差上げます(陸奥鰺ヶ澤漁師町三宅活子)〇皆さん私あしわけ舟、明星、女詩人の小説がありますお望みの方に差上げませうから御自分の御寫眞と繪はがきとを下さい妾の寫眞も差あげます此頃は寫眞を買つて送つて下さる方がありますそんな方には差しあげません早く申し込み下さい(常陸高濱町大字東大橋石崎霞洲子)〇皆さまのおうちに銀鈴、天地有情、夏花少女、まひるの睡蓮、廿五絃、若菜集、夏廂など御不用のお方はありませんか、おありならば何卒お送り下さいませ、かぶら矢、花守、舞姫、うもれ木、ユーゴー小品、沙翁物語などがありますから送ります。白鳩、月刊スケッチ、白百合などお送りを願ます、折入つてこゝに(信濃國下伊那郡大島小學校佐久良子)〇菊花壇が御不用の方は私の通俗世界文學かなどとかえて下さいませんか新潮のご不用の方は送つて下さい、(信濃下伊那郡山吹村松村方美杜里子)〇誌友諸嬢の内乳姉妹、伯爵夫人、金色夜叉(續々篇)青春(秋冬)御送り下さいませんか私にも色々の文學雜誌其他有益の本が不要になつて居りますからリボン手製の編物を添へて御返し致します(山梨縣甲府市穴切町廿三番地加々美ちよ子)〇私の手許に三十五年の女學世界が八册及び文藝倶樂部今年の一月のとが不用ですから、何の小説本でも宜しくありますから御交換が願ひたいのです、(鹿兒島縣鹿兒島市西千石町九十九番戸森とみ)〇私は折懇く增刊のきさらぎを求めはずして終ひました皆さんの内で御送り下さる方は御座いませんか手製の栞を御送りいたします又繪はがき御送り下されし方先着五名かぎり栞を差上げます但絹製なのよ(千葉縣夷隅郡古澤村谷上石野靜子)〇皆樣の中に「吉丁字、亂れ雲、青春、伯爵夫人、夏子、濱子、澄子、女夫波、不言不語、」其他「テニソン、キイツ、」なぞお持ちの方はどれでもおめぐみ下さいお禮としては「相思怨、不如歸、今紫、心の花、人の罪、」及び「女學世界六册、新古文林八册、秀才文壇十二册、少年四册、文藝倶樂部七册、日露戰爭記三册、女子文藝五册、」の中お望みのを送呈致します先着六人の方へは私の寫眞及び大磯の繪葉書を添へて送ります(横濱市石川中村町一四九二、井上久子)〇幼年號、秀才文壇、中學文壇、女學世界等不用なるものが二十七册あります、又處世訓、空中飛行艇、西航日錄、女子の栞等が不用ですから何か小説類と御交換下さい(香川縣大川郡三本松町字東原松永茂子)〇大和田氏の日本大文學史五册あり入用の方に讓る(伊勢三重郡西阪部壹三三山本子)〇吉丁字、青春、伯爵夫人、母の心、やどり木、新約物語、仇と仇、不問語、町の仙女、新妻君、澄子、濱子、にせ紫、己が罪、「うき寢、病戀愛、かこひ者、水彩色、萬朝小説傑作集、いさゝ川、間一髪、紅葉全集、晴小袖、風流線、琵琶歌、はやり唄、はつ姿、男女と天才、湘烟日記、忘れがたみ、御持ちの方は、あたしの魔風戀風、綠の糸、夏子、乳姉妹露子夫人、女夫波、小華族、密航婦、結婚難、幻影、青春怨、一葉全集、極樂村、妾の半生涯、戀と戀等と交換して頂戴、また御好みのお方には編物も差し上げますわ(近江國三雲局區泉村百貳拾五番地順治樣方泉つゆ子)〇愛讀者皆さん妾は『みだれ髮』が不用になりましたから繪葉書で申し込で下さい差しあげます、先着十名には當地の新聞を上げます、(常陸國新治郡高濱町東大橋川崎はな子)〇「姫

鑑」と云ふ唱歌の本をお持ちの方は寫したのてもよろしいお送り下さい御禮に肉筆の美人畫をさしあげます（神戸市葺合町二千番屋敷ノ一藤原靜江）○紅葉全集一、三と二册、一葉全集、不如歸相思怨琵琶歌日本刀外に四種五册新版文藝倶樂部古版文藝界新小說四種廿七册不用品がありまするて上等繪葉書申込の御方樣へ差上げます、最も紅葉全集は妾し生れました紀念の日七番、廿一番の到着順に差上げます、若以上三十五名樣以外になればくじ引て公平に差上げます、繪葉書には外の事を書かずと美文か詩歌俳に限ります（尾張國中島郡起畑中 渡邊由三郎方渡邊霞石子）○皆樣私に明治卅七年から卅八年までの『なんな』がありますお望みの方は舶來繪葉書か一枚五錢以上の繪はがきてお申越し遊ばせな、但し前記の樣な繪はがきでなければ斷然送本致しませんから其おつもりて（北海道龜田郡七飯村番外地松非長子）○皆さん妾のところに「理想の家庭」がありますの、繪葉書て御申込になれば先着の御方に差上げますよ（越後關山停車場前北村やよひ）○皆樣のうちに藤村全集御不用の方はお讓り下さいませんか御禮として文士奇譚、心琴、小兒の行爲を差し上げます（長野縣北安大町八日町櫻非みさを）○本誌愛讀者の皆樣に申し上げます、左の詩歌文集をお望みの内の一册づゝお進呈致しますから、美しい繪葉書になる可く寫眞や栞を添へておん申し込みなさいませ、それから繪葉書にはあまり字を書かずにたゞ住所姓名をわかるやうにして頂戴ね　さてその書物は＝心琴、すみれ集、新體詩學、歌學捷徑、當代名家小品文、大絃小絃、花紅葉、文華、心の花、新潮、天地有情、落花流水、笹舟集、蝴蝶の圍、さゞれ、房圍、樂園、五月雨の花、龍田の錦、山長水高、文藝評論、時代管見等です（下總佐原町篠原、大崎範一方、大崎凌霄花女）○誌友諸姉樣の内誰方か女子文壇第貳卷の第壹號を口繪とも其のまゝおゆづり下さる御方はありませんか相當の御禮は致しますから（岐阜縣安八郡大垣郵便局區内馬ノ瀨木村あさ子）○皆さんの内て詩集花守、塔影、不如歸の歌其他何にてもよろしき故詩集御送り下さい私の卅五六年の女學世界幾册にてもよし又相當の代價て讓り受けたし（神奈川縣高座郡田名村渡邊八重子）○文壇愛讀の諸孃樣妾は田舍者ですが圖案が大層すきですの夫で皆樣の內で何か參考になるものをお持ちてすなら御惠み下さい必ず立派な繪葉書差上ますからどうか宜敷（福岡縣久留米市庄島町二〇一葉女史）○私の處に天地有情、自然と人生、學生訓、俳句小史衣香、扇影、ゴールドスミス樂村行、不川てすが他の詩文集と御交換下さいませんか（久留米市庄島東堅丁 加納天流子）○「ホトトギス」を送くッて下さい、必ず御禮はします、一册ても宜い、（廣島縣高田郡甲立村 深瀨箕岡靜子）○私は文藝倶樂部、文藝界等ほしいんですが、皆樣どし〱送つて下さいな、何號ても構ひません、御禮とーて松島名所寫眞帖一部と、當地の新聞（河北）を三日間差上ます、又大變古くなつたのですが、柳浪先生著の小說「己が罪」と女子文藝（三册）とお望の方に差上ます（陸前松島村高城町古川松江）○私は小說當世ハイカラ競、女學世界、婦人畫報、少女界 女子用文、等を持て居ります換讀希望の方は希望者自身の寫眞を送つて下されば直ちに送ります、ハイカラ競は第一着の方へ（大阪松屋町通内平野町北、安藤文玉堂內ふじ）○皆樣の中にて水彩畫、色鉛筆畫のお手本がありますなら妾に送つて下さいな第一着の方には白玉姫（八十錢）二着天うつ浪（七十五錢）三着水彩色（六十五錢）四着病懸愛（六十錢）五着ローンテニス（五十錢）六着塔影（四十五錢）七着新撰歌典（四十錢）八着幻影（四十錢）九着敵國降伏（三十錢）十着カレンダー女十二姿（三十錢）十一着女子文壇懸賞文集（二十五錢）十二着詩的小品文集（廿五錢）十三着より廿着まで肉筆繪ハガキ一枚づゝ廿一着靑海波（五十錢）以上着順により必ず差上げます（然し男子の方は御斷り）又繪ハガキにてもよろしうございますから可成組物を送つて下さい結果は本欄てお知らせ致します（大和國郡山町柳四丁目三十一番屋敷淺田多喜子）○諸姉のうちで「テニソン」の詩をお持ちの方はお讓り下さいませんか必ず相當の禮は致しますから（羽前西田川郡念珠關村大川豊子）○姉樣方のおうちでもし二月三月の二ヶ月分の「ムラサキ女子文藝をお持ちのお方がありますならばどうぞ送つて頂戴な。妾は田口掬汀著の「幻影」幸田露伴編の「短詩はつしほ」薄田泣菫の「白玉姬」同「薄月夜」の四册でお禮致しますから。倘地方のお姉樣方には御地で發行する新聞を送つて下さいな。妾も屹度當地發行の新聞紙を御返禮いたします（大分縣直入郡豊岡村字平 甲斐ふい子）○女子文學講義二册、女學世界六册、少女界三册、日本の少女四册、少年世界六册、校外修身一册、（三十八年發行）以上の中の何れか數册と、誰樣かの食道樂、若くは（太郎は如何にして 敎育

すべきや）と御交換下さいませんか、（金澤市早道町百、杵代實子）○諸孃の內で女子文壇一卷の第八號を御不用の方が御座いましたなら御惠贈を乞ふ但し御禮としては相當の價を切手にて御送り申し上げてもよし或は當地の新聞を三ヶ月御贈り申してもよし何れにても御望の方を一寸御申し越しを乞ふ（以上北海道小樽區稻穗町第一火防線通り左ノ十四番戸梶水仙）○和歌作法、俳諧萬代集、唱歌講義、千紫萬紅、教育唱歌、征露軍歌集小學唱歌集中學唱歌集教科適用撰集唱歌集、不如歸の歌金色夜叉の歌銀鈴等と廿五絃、白玉姬塔影金帆、悲歌美文の資料と交換を願ひます（新潟市古町通二番町浦澤方水谷八重）

○寫眞交換

○皆樣各自の、御寫眞御送り下さいまし廿五名に左の品を呈します一から十まで卅錢以上の小說十一から廿五まで文藝、女學世界、はがき文學寫眞畫報、又、繪はがき三枚以上送り下されば十錢以上の雜誌差上げます四十名限りです（埼玉縣南埼玉郡岩槻町二上藤代）○私は有名なる耶馬溪の水源に蟄き居るものですがれー、何卒、繪葉書や寫眞の交換を願ひます、寫眞御惠送の方には先着五名耶馬溪の寫眞と（はつしほ）一册づゝ送ります、（福岡縣田川郡彥山村大木翼方大木あつ子）○皆樣お寫眞下さいな先着六十七名へ左の品を差上升、一より五迄保津川及嵐山のエハがき、十迄同寫眞廿五名迄絹栞五十名迄少女界と女學世界、後はレース栞二ツ宛、尙何か下さつた方へは他の品を附して返升、何れも珍重たエハガキでお通知を、（丹波南桑田郡ちとせ村主原ひろ子）○御寫眞御送り下さる方には十名限り經木眞田見本を二枚差上げます（能登國輪島河井町坂本喜代子）○諸姉樣何卒文通て御交際下さいましお寫眞の交換を致しても宜ろしう御座いますがあまり多數になると妾困りますから先着者より五人だけはきつと〳〵妾のを贈ります其の後に着したのは丁寧にして御返し申しますから御安心なすつてお贈り下さいな勿論郵便税もお返し申します。（北海道小樽區山田町九番地上村健之助方上村こう）○親友なる諸孃君よ御寫眞手紙等の交換を願ます貴孃の御寫眞を御送り被下たる御方には妾の寫眞とエハガキを添えて御送り申します（吳市二川町字西港町四十五番戸水野みどり）○おなつかしき諸姉樣よ御芳姿のお寫眞を送つて下さつた方には先着者五名に限り妾の寫眞に和歌浦の繪葉書を添へて差上げます其他は文學的雜誌三册宛を御送りします、お寫眞は永久に秘藏致します、地方の新聞や繪葉書玉章の交換も願ひますよ（和歌山市廣瀨中之町二丁目河島門內早川りよう子）○御寫眞を頂き度ふ御座います私も早速に寫眞御送申上ます其他五着迄の方には一寸巾のハイカラリボン御送致します尙はシオリの交換も願ひます（山形市六日町一二五たか子）○每月御懇にも御寫眞を御送り下されまして失禮ながら此文壇を持つて御禮を申します、又本月も同じく御寫眞と栞と繪葉書（御自身の筆）を交換致したう御座います（出雲國八束郡生馬村字コモヅ福井今）

○編物と造花交換

○皆樣私編物が好てチー、下手てすけれ共自作のを大分持て居升、栞は絹とレースとを合て百計、お望の方へは差上升故至急美しいエハガキてお申込下さい、伊豫湯月女樣何卒嘗時お借下さいな小包てたく山チー私も直ぐお送申升故、記者樣栞送り升故お入かずを、（丹波南桑田郡千歲村主原ひろ子）○皆さん私は造花が大好ですから下手ながらも澤山作て有り升からもし送て下さいましたら屹度御返事を致します（橫濱市末吉町二丁目十六番地奥田てる子）○私手許に「野菊」「すみれ」の押花が澤山有ります御望の方は何時でも繪はがきで御申込なさい但し男子の方はおことはり（讃岐高松市天神前吉田芳惠子）○諸孃樣私も愛讀者の一人ですが何卒御交際を願ひます栞を持て居ますから皆樣交換して下さいませんか（下關市田中町本通り一丁目杉山愛子）○妾も本年から小學校を卒業して女學校へ入學致しましたから何卒女學生の御方は宜しく御交際して頂戴、尙ほ編物お持ちの御方あらばどーど御惠み被下度賴みます御送り被下た御方へは妾の寫眞に當地名所の寫眞をそへて御禮いたします（近江國志賀郡坂本井神金子方里子）○皆樣私は今度同村の山田ひさ子樣の御照會で愛讀者の一人に加はりましたから以後よろしく御交際の程一重に願ひます、猶田舍者ですから皆樣の樣な都の方々の御使遊ばず繪葉書や編物、殊に「レース」糸で造つた「しなり」等の御交換を御願致して置ます（三重縣安濃郡新町古河八三、榊原みさを）○諸孃樣妾事第二卷一號より愛讀者となりましたから以後はよろしく御交際を願ひます、又繪はがきや押花の珍しいのがありますから御交換を願ひます、左樣なら（丹後加佐郡余部町中町通五丁目四百四十八番地坂根マサ方佐古多繁子）

○交際に就いて

誌友倶樂部を借りて聊か感じた事を記します、妾に交際して下さつたお方は總て三十二名ありました、他の百六十名あつた方々に比しては僅かですけれども、妾の思ひだけは十分でした、(一)内女學校のお方四名同卒業のお方三名教員のお方二名小學校のお方六名ありまして、其他は一々問ひ合せ申しませんけれ共大低普通の學を卒へて、父母の下に居らつしやる方々と思はれました、(二)内十回以上の往復を重れましたお方七お方五名、五回以上の往復が重れました御方十一名三回以上の往復を重れました、斯樣の有樣であれば、盛りの時代は狂ふに狂ひて交際をしましたのであります、(三)大概皆樣の御性質も文章で見受けられましたが、女學校若しくは同卒業の方々は優しく高尚で過がは高等教育を受けた徵しであらうと、嬉はしく感ぜられました、(四)妾武骨らしい首尾のない樣な文章で投書しましたから、蓮葉者とでも思ふたものか、君僕を使うたお方も二三名ありました妾此樣な高襟式の言葉大嫌、以來全くことはりの筈です、(五)妾の名を僅かの文に五度も付けて下さつたお方ありました、幾何に妾立派なればとて斯樣に付け呼ばれて善い心持はしなかつたです、(六)交際して下さるお方は皆自身同樣のお方と思ひまして、親しい友らしく、往復を重れましたが、後に妾は明治廿四年生であなたより九つ上と差上げたら京都生咲樣などはあなたより九つ上て、て、下されたので此時は穴へでも這入りたい心地がしました、(七)妾に下さつたお方の中僅かに、四五名は男と思ひましたが、先着者、青森縣の三宅樣に迷惑掛けましてから疑を止しましたが後に私は男ですすて下さつたのは一人ありました、筆跡で知られるか分りませんけれども號を付けて來る書、誰方で來る書へ注意しましたなら、宜しいと思はれます、此お人には妾ばかりでない未だ澤山あるでしよーと思はれます、(八)路云々の記事に對してお望みのお方は七名ありましたが、路讀の誤りでしたから、改めてお尋れ申しましたに、倘お望みて下さつたお方三名しかなかつたから、尾張秋山樣外、二名のお方へ差上ました、(九)斯樣に文學のあるお方、遠國のお方などに交際し得る樣になつたのも一に記者樣の御親切に記載して下さつたお蔭と思へば如何して此高恩に報ゐようか、斯く不學の妾であれば只忠實なる愛讀者となつて身を勉め、文を學び、後日文壇上に一大光華を放ちて、記者樣の高恩に報ゐんのみ。(秋田縣富樫里津子)

▲御覧なさい！•(再記)

▲誌友倶樂部は何時も原稿が餘つて載せ切れないやうな事になります が折角の通信を餘り遲くなるのもお氣の毒だと思ひ、紙面の許す限りは載せて居りますが諸孃も何卒公德上、原稿は短く願ひます。

▲繪ハガキ交換の外に寫眞、編物と造花の交換欄を新設します、いろ〳〵の交換を一つに望まずに、成る可く別々に望んで下さい、原稿整理上、餘りいろ〳〵の望を一つに書いたのは沒書します。

▲終りに臨んでます〳〵誌友倶樂部の賑やかにならんことを祈ります誌友諸孃、幸に御健全に御勉强なさい。

▲家庭娯樂　一トロ噺

(可成野卑にならぬもの)

▲懸賞募集

當選賞與左の如し

一等　金五拾錢
二等　金三拾錢
三等　金貳拾錢
(凡て正金にて呈す)

毎月十五日〆切の事

五月十五日　女子文壇社

▲卒業式寫眞＝都下有名女學校の本年の卒業式の寫眞は前號及本號二回とも紙數を增して掲載しましたが倘ほ殘つて居る分は六月一日の第八號へ口繪として挿入いたします。

廣告料金下記の通改定す發行部數に比較せば最廉無比（有効確實）

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、嚴谷小波先生、山中古洞先生）

○論文 ○抒情文 ○敍事文（各半紙廿四字詰三十行以内）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以内）、○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短編小說（半紙總かな付廿四字六十行内） ○新躰詩（半紙十句以内）

○和歌（半紙半枚一首） ○新歌謠（仝上） ○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新讃俳句（端書又は半紙半枚一句）

▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事　但着色無用日本紙の薄きもの

○一口噺（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）

賞與品

○論文○抒情文○敍事文○消息文○小說○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）　一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）　一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝毎月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○各種の原稿（仝封）取纒郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

【最寄書店になくば直接發行所へ注文を乞ふ】

定價

女子文壇（毎號水彩畫端書寫眞口繪數葉挿入）　毎月一日發行

一册（大判百二十頁以上）	前金拾錢
六册	前金五拾七錢
十二册	前金壹圓八錢
十六册（増刊共）	前金壹圓四拾四錢

直接申込に限り郵税全廢無料

定期増刊四回　二月五月八月十一月

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○領收書は一切差出さず候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券（收入印紙謝絶）代用は必ず定價の壹割増に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本仕候▲缺本にならぬ法▼前金拂込むに限るべし

廣告料金　改正

特等	一等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

申込發行前十五日

【備考】特等場所は表紙二、四の面なり○壹等場所は表紙三の面、色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込むものなり▲廣告面一行は五號活字廿四字のを半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

明治三十九年五月十二日印刷
明治三十九年五月十五日發行

無比廉價 金拾錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

不許轉載

增刊（二卷第七號）

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話【本局六〇七番】　女子文壇社

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目卅　東海堂
東京市日本橋區呉服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鍋屋町九番地　且明堂

明治三十七年二月十九日第三種郵便物認可



（東京秀英舍印刷）